

共同研究——『東大寺縁起絵詞』の研究——

小	小	渡
山	島	邊
正	恵	信
文	昭	和

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

小山正文

『東大寺縁起絵詞』の成立

はじめに

およそ奈良の東大寺ほど文献史料豊富な寺院はないであろう。天平の創建、鎌倉の再建、江戸の再々建を中心として一千二百有余年間に蓄積収集された史料は、まさしく汗牛充棟もただらぬものがあるといえよう。

ここにとりあげる『東大寺縁起絵詞』も、もちろんそのひとつであるが、しかし本書が注目されるようになったのはそんなに古いことではない。管見では書目のみを記すものは別として、昭和十五（一九四〇）年の尊経閣叢刊前田家本『南都巡礼記』の解説に「大島雅太郎氏所蔵東大寺縁起絵詞と称する鎌倉末期の仏教説話集にこの鯖の杖の話を記して、「其木ハ治承ノ炎上ニ焼ノコリタリシヲ東南院ノ経蔵ニ収リ今ニ侍リ」

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

とあるのは異聞というべきである。但しこの東大寺縁起絵詞は南都巡礼記または宇治拾遺とは直接の引用関係はない。」とあるのが早く、ついで昭和二十九（一九五四）年の『南都仏教』第一号に発表された筒井英俊師の論文「良弁僧正と漆部氏」に、

次で鎌倉末期頃と推定せられる東大寺縁起絵詞―建武四年丁年（西紀一三三七）の奥書がある―には、

花叢の良弁僧正は相模国大隅郡漆窪と云所の漆部の氏人也。着服せんとて母の夢に一人の沙門来て向居ると見けり。持統天皇治三年^丑誕生す。嬰兒の時金色の鶯取て雲を凌て西を指て飛ひ去き。当寺の昔深山なりし時彼の鶯大なる杉のうつぼなる中に其子を置て養ふ。年月を経る程に良人と成りて木の下に草菴を結て住す其名を金鶯仙人と云ふ。云々

良弁僧正の母子を鶯に取られ後あづまより出て三十余年、国々を尋

ね求に行方を知らず。筑紫より淀の津へ至る時かたへの船の中にて人の物語するを聞けるに東大寺の上人良弁と云ふ人は赤子にて鷲に取られたりけれども仏法の眞首たるべきによって、禽獸なんども害を成さず養ひけり、今は別当に成て明日拝堂の節を遂くへしとなん。側によそながら此事を聞て我子の行方なりと知ぬ。

良弁の母急ぎ東大寺に至て尋に其日別当の拝堂とて南大門に寺官等衆会を成し供奉の輩巍々として見聞の縑素濟々たり。其砌嚴重にして子細を述べ難し。門の東の脇に立ちやすらひしに、僧正進み出つゝ女人を礼して曰く、公の来り給はん事を待て今に拝堂せざりき。悦しきかな今来り給へる事よとて僧正老母を具して参内しつゝ、此由を奏聞せしかば上皇哀み給て母子共に召迎へて汝貴きかな僧正の生母として踐き身なれども帝王に膝を並べ竜顔に近づく事をとて自ら彼母を礼し御しき。母亦立て良弁を礼して悦しき哉依て汝母の爲に親王の宣を下され富基宮と云ひ又ウタツカの岡の宮と云ふ官舎を給ひき。今の宮殿と云は是也。又彼母を置きて日々に行て孝行の誠を至しき。其所を孝養院と云ひ彼名今に改むる事なし

と記されているが、そのほかに、

鷲に養はるが故に諸の鳥類の噂を聞き知て鳥と物語ると云ふ。此故に其名を良弁とぞ名づけ給ひける。彼の仙人の俗服は尊勝院の経蔵にあり。

とも記され、要録所収の伝説よりはくはしくなっているが、それだけ伝説の嗅みが強くなっている。

と記されるのが目にとまるが、昭和四十一（一九六六）年筆者も『史迹と美術』三六一号に架蔵の『東大寺縁起絵詞』を用い「運慶・快慶の叙位について」を発表した。幸いこれが契機となって本書はにわかには諸氏の注目するところとなり、爾後昭和四十一（一九六六）年の『秘宝』東大寺下（講談社）、昭和四十七（一九七二）年の『奈良六大寺大観』十一東大寺三（岩波書店）、昭和四十九（一九七四）年の『社寺縁起絵』（角川書店）、昭和五十八（一九八四）年の拙稿「重源上人入滅年月日考」『東海佛教』二八）その他等々で『東大寺縁起絵詞』は大きくとりあげられるにいたった。この間にあって特に注目されるのは、昭和四十八（一九七三）年の『寧楽』続刊第一号と翌年の同第二号に公表された堀池春峰氏による『東大寺縁起絵詞』本文の復刻と解説である。両号において氏は架蔵本も対校本に使用されたが、しかし惜しいことに誤植も多い上、第八巻までしか公刊されておらず、解説にも少々不備な点があって物足りなさを感じる。そこでわれわれは今回あらたに現存最古最善の永享三（一四三二）年延喜本『東大寺縁起絵詞』を全文翻刻し、あわせて類話の注記と索引（紙幅の都合で次号に掲載予定）を付すと共に本書成立の事情や諸本の書誌につき若干言及することとした。

構成と内容

さて、本論へ入る前にいちおう『東大寺縁起絵詞』の構成・内容を瞥見しておきたいと思うが、本書を理解するにあたりまずもって重視しなければならぬのはその名称であろう。すなわち「絵詞」と明記されるところより察しがつくとおり、元来これは『東大寺縁起絵』と題される絵巻物の詞書にはかならないのであって、この題目は本書の性格を決定づけるもっとも重要な要素といえよう。しかしながらこんにちかかる表題の絵巻物がかつて存した事実が寡聞にして知らないが、げんにその詞書が存在する以上そうした絵巻物もあった可能性はこれを十分認めてさしつかえないであろう。このへんについてはあとであらためて詳述したい。ところで『東大寺縁起絵詞』はその巻数二十巻よりなり、段数にいたっては実に総計百七十段を数える大部な絵巻物で、さすが天下の東大寺絵巻にふさわしい堂々の貫禄と評しうるものである。ここに絵巻二十巻といえは誰しも想い起すのが、同じ南都の興福寺春日社に伝えられた『春日権現験記絵』二十巻であろう（同絵巻は現在宮内庁京都御所蔵となっている）。このことはのちにもふれると思うが、実はこの『春日権現験記絵』と主題の『東大寺縁起絵詞』は、単に巻数だけではなくその時代や場所さらに背景などを同じくして成立している点まことに興味深いものを覚える。したがってもし東大寺の方も絵巻物として現存していたなら、両者はあらゆる点で対比されたにちがひなからう。

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

名 巻	東大寺縁 起絵詞	春日権現 験記絵
1	4	4
2	9	3
3	9	5
4	4	6
5	7	5
6	6	3
7	10	5
8	12	7
9	12	3
10	15	7
11	5	4
12	10	5
13	14	6
14	9	6
15	9	6
16	5	4
17	7	3
18	7	5
19	8	5
20	8	2
計	170段	94段
一 巻 当 平均 値	8.5段	4.7段

右の表は両絵巻の巻段数をわかりやすく示したものであるが、同じ二十巻といっても『春日権現験記絵』の一卷あたりの平均段数が四・七段であるのに対し、『東大寺縁起絵詞』のそれは八・五段となり、ほぼ二倍弱でいかに東大寺の絵巻が規模壮大かを知ることができよう。

このように大規模な構成を有する『東大寺縁起絵詞』の内容全部をここでいちいち紹介するのは煩にたえず、また容易でもないでこれを便宜つぎの三段階にわけて展望しようと思う。

- 第一段階 第一巻より第九巻まで 九卷七十三段
- 第二段階 第十巻より第十四巻まで 五卷五十三段
- 第三段階 第十五巻より第二十巻まで 六卷四十四段

この段階規定は諸本のところで詳しく記す『反故』本系『東大寺縁起絵詞』の写本にもとづくものだが、『反故』本ではこれをそれぞれ上・中・下としているので、ここでもそれに従いたい。

まず上九巻であるが、ここは本書全体の序論ともいうべきところで、そのはじめには東大寺の草創と大仏造頭にまつわるさまざまな仏教説話が、主として四聖（聖武天皇・行基菩薩・菩提遷那・良弁僧正）に焦点

を合わせつつ語られ、ついで良弁の資実忠が創めた東大寺の重要な観音靈場二月堂のことにおよび、そこで行われるようになった十一面悔過の行法修二会、ならびにその本尊がはなはだ賞罰きびしい十一面観音菩薩であることを述べる。そして終りには鑑真によつてはじめてわが国にもたらされた大陸の正しい戒が最初に行われたのは実に東大寺で、ひきつづいて設置された戒壇院もまた東大寺が根本たることを強調する。

以上要するにはじめの九巻では、日本最大最高の勅願寺院は東大寺をおいてほかにはなく、ためにその造立発展には幾多のすぐれた名僧知識が率先寄与した事実を力説するわけで、もつてここに典型的な寺院縁起の書き出しぶりをみてとることができるであらう。

次ぐ中五巻は、かくて創建された東大寺と文字どおり真言の二大双壁をなす弘法大師空海、聖宝の両名とは、密接不離な関係にあったことを縷々説明するのにもつぱら費された感が深い。これは二人が東大寺内に建立した真言・東南の両院を指しているのであるが、むしろわれわれはここによりやく東大寺と真言密教の対立が表面化してきた事態をとらえることができ、暗に東大寺の真言に対する優位制を鼓吹せんとする節がうかがえて興味深い。これは『東大寺縁起絵詞』の成立時期を勘案する上での重要な一事象となる点で没却しがたい面をもつ。

最後の下五巻は、一朝のうちにあの東大寺大伽藍を灰燼に帰せしめた平重衡の焼討ちとその再建譚が中心となる。東大寺の平家に対する憎惡の念は黙しがたく特に清盛の横死はまさしく仏罰そのものであったこと

を語るのは当然として、譚はその後の再建に重きが置かれ、わけでも不世出の大勸進上人俊乗房重源の倦むことなき勸進と朝暮の積極的な援助が行われた事実を特筆大書するのである。この下五巻において殊に注目されるのは、鎌倉幕府の將軍源頼朝が平家によつて焼亡した東大寺を源家の手で再建した有様や供養の模様などを史料に即しながらきわめて具体的に述べていることで、その史料の中には本書にしか出てこないものもあり貴重な巻となっている。

以上、大観したところによつておよそ『東大寺縁起絵詞』がいかなる内容を有するものであるかがほぼ見当ついたことと思われるが、この絵詞全二十巻には一貫して底流するなにかがあることを看過すべきではなからう。それは端的にいえば由緒正しいわが国最大の勅願寺院は東大寺をおいてほかにはなく、その東大寺の一大中心はいうまでもなく大盛遷那仏である。したがって万民はこぞつてこの大仏を尊崇奉拝しなければならぬ。奉拝の徒はかならずや大いなる利益にあずかり、逆に不拝の者は仏罰必定というのがその意図するところのようである。

このことの裏面にわれわれは、南都仏教の斜陽化とそれを促進せしめた新仏教の浸潤をみてとることができるのではないだろうか。淨土教や禅に全然ふれない『東大寺縁起絵詞』は、暗黙のうちにそれを語るかのようである。

成立年代と編者

『東大寺縁起絵詞』がいつだれによって成されたかという問題は実に重要であって、これを解決してこそはじめて本書の絵巻物史上、あるいは寺院縁起史上における地位も定まるわけで、この問題は鋭意追究されなければならない。

さて、本書の成立を早く鎌倉末期としたのは最初にも紹介した尊経閣叢刊前田家本『南都巡礼記解説』（この解説は池田亀鑑博士の執筆かといわれる）であり、『南都仏教』創刊号の筒井英俊師であったが、残念ながら共に本書を中心とした論考でないためその根拠が具体的に示されていない。

およそ寺院縁起の成立時期を把握する場合もっとも有力な手がかりとなるのは、本文中に出てくる年紀の記載であろう。そこでこれを『東大寺縁起絵詞』にもあてはめてみると五世紀の年紀が一回、六世紀のそれが三回、七世紀が六回、八世紀が五十回、九世紀が三十三回、十世紀が二十五回、十一世紀が三回、十二世紀が三十一回、十三世紀が十三回でこれ以降がなく、もっとも新しい年時記載は第八卷第十二段冒頭の弘安九（一二八六）年であることがわかった。すなわち『東大寺縁起絵詞』は弘安九年以後の成立とみなされるわけで、堀池春峰博士もこれにつきつぎのごとく述べておられる。

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

年紀の明白なものとしては、卷二〇の貞永元年三月の東塔雷火、寛喜二年二月・宝治三年二月の大仏不見記などがあるが、卷八の弘安九年（一二八六）の二月堂修二会に勤仕した山城国隠原の下司の説話を下限とする。このことは卷一の巻頭にみえる東大寺を四聖同心建立の寺とし、更に擬然によって主張された東大寺を「吾朝惣国分寺」とする学説を収めているのと年代的にも符合し、縁起絵詞の成立は十三世紀末と認めて誤りがなからう。

このように堀池春峰博士も鎌倉末期成立説を主張されるのであるが、そのさい重視しなければならないのは、諸写本の奥に記されるつぎの識語であろう。

本云 建武四年十二月十七日

玄竜判

この奥書は現在管見に入っている十二本の写本中九本にまで確認でき、おそらく他の三本にも本来あったと推断されるもので、しかも諸本のところで明らかにするとおり系統を異にする二つの写本系に等しく見える識語であることは、きわめて示唆的といわねばならない。すなわち南北朝時代の建武四（一三三七）年十二月十七日こそが『東大寺縁起絵詞』二十卷百七十段の成立年月日と断定しても、あえて不都合でないことを右の事象は物語っていると思うのであるがいかがなものであろうか。はたしてそうだとすれば『東大寺縁起絵詞』は、応安五（一三三二）年以降室町時代に成った『東大寺統要録』よりも以前の成立で、嘉承元

(一一〇六)年の『東大寺要録』につぐ重要な東大寺文献史料ということになり、その価値の決して低きものでない事実がおのずから明らかとなるであろう。

かくてその識語から『東大寺縁起絵詞』の成立が建武四年とみなされれば、当然その直下に記される「玄竜判」なるものが、編者その人と推定してもすこしも不審はあるまい。特に建武の原本には判||花押が添えられていたことも、なお一層彼が編者であった点を示す強き証拠のように思われてならないが、残念ながら玄竜に関する史料は目下のところ皆目伝わっていない。したがっていきおい想像に走るのであるが、書物が常識的に彼は東大寺の僧と推考したい。特に第一巻第一段に明記することく本書はきわめて多数の旧記類を参照吸収して編まれているわけだが、そうした記録を容易に見られ、しかも理解しうる立場にあった人は、やはり東大寺僧とみなすのが自然であろう。また文中しばしば東大寺を当寺と称し、「彼仙人、俗服、尊勝院、経蔵有り」(第二巻第三段)とかあるいは「辛国、塚、大仏殿、西側イマタアリ」(第三巻第五段)、「其木、治承、炎上、焼残、タリシヲ東南院、経蔵収今侍」(第六巻第三段)、「彼屏風、正倉院、勅封、倉被納今有」(第七巻第六段)、「御筆、経論、多東南院以下、経蔵今アリ」(第七巻第七段)、「青衣、女人名付今誦侍」(第八巻第七段)、「其後于今至マテ神変、現分布シ給」(第十九巻第八段)等々の記述ぶりはつぶさに編者の目撃したところで、かような記載は東大寺僧と類推するのにも有利かと思う。それに玄竜の前後ごろ『東大寺統要録』供養篇などによれ

ば、玄□と名乗る東大寺僧がすくなくとも玄竜を同寺僧の一人とみてもおかしうはない点があげられよう。もとより史料なきいたずらな臆測は当然さしひかえなければならず、げんに不審なのはもし玄竜が真に東大寺僧ならば上記の識語に誇らしくその肩書を並べ立ててもよさそうなものなのに全くそうした記載がないし、当時の東大寺文書とか後世の僧伝類にも彼の名を見出しえないのも、ことによると玄竜が東大寺僧でなかったことを暗示しているのかもしれない。ともかく現段階では『東大寺縁起絵詞』の編者と目される玄竜については、決定的史料の出現を後世に期するほかないので、ここでひるがえって同書が成立した南北朝時代の社会的情勢を東大寺に焦点を合せつつ顧みておくこととしたい。

鎌倉時代平家焼討ち後の再建に明け暮れた東大寺は、単に伽藍の復興だけではなく教学の面でもまことにみるべき復興があった。宗性(一二〇二—一二七八)、円照(一二二二—一二七七)、凝然(一二四〇—一二二二)等の出現はすなわちそれで、彼等は真摯に華嚴や戒律の理論実践に励み多くの著述を残して、よく南都仏教々々最後の花を飾ったことはあまりにも有名である。ところが南北朝以後急速にその南都の教学が衰退してしまふのは、ひとえに時代の推移にともなう経済的事情にもとづくものといふことができる。

周知のように寺社勢力の大支柱となってきた荘園が、内より自立成長してきた武士団によって自壊作用が進行し始め、やがて荘園領主と武士団、武士団と武士団の対立抗争にまで発展して、漸次それが新権力の形

成へ向うというのがまさに中世であったが、特に南北朝時代から室町時代にかけての動乱期は、その極に達したときであった。したがってこの期における南都教学の不振や東大寺内の東南院々主聖尊（南朝方）と西室院々主顯実（北朝方）の対立も、上記のような政治社会の情勢を顧慮してはじめて納得いく事柄といえよう。他方こうした世情の間隙をぬって力強く抬頭してくるのが民衆層であって、わけても南都周辺のいわゆる郷民の成長は想像を絶するものがあつた。東大寺には七郷とて転害、今少路、宮住、中御門、押上、南院、北御門の各郷が鎌倉末期にすでに成立していたことが文書から知られるが、彼等郷民は周辺部の新興農民とあいまって庶民仏教との結びつきが大変濃厚であつたことをここで大いに重視しなければならない。今に庶民信仰を集める東大寺の二月堂や興福寺の南円堂は、こうした時期に寺側から積極的に彼等に開放した御堂であるが、そうしたもののへの結縁に一役買ったのがいうまでもなく勸進聖で、聖達は經典の内容や寺社の縁起、あるいは高僧の伝記などをさかんに創作、改作、誇張しながら唱道し、ときに絵巻や絵伝の絵解きも行ない一層庶民信仰をかきたてたのであつた。太子・観音・地藏・大師・大般若・蘇生等々の当時もつともポピュラーだった信仰すべてを含む建武四（一三三七）年の長大な『東大寺縁起絵詞』二十巻も、まさにそこへ位置づけすべき寺院縁起にほかならない。このように考えてくると、その編者玄竜もあるいは東大寺関係の名もなき一聖（いちせい）であつたのかも知れない。なお南都へは浄土宗、臨済禅宗、真宗といった新宗派もいち

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

早く進出して庶民と直結したが、『東大寺縁起絵詞』はかかる新宗を故意としか思えないほど黙殺しているにもかかわらず、その内容は全くそれらの宗派と表裏一体の庶民信仰一色に塗りつぶされた感が深いのも興味あるところといわねばならないであろう。

目録の復原

大谷大学図書館にはのちほど詳記するごとく『東大寺縁起絵詞』の写本二部を蔵するが、そのうち題簽に「大仏（大）縁起絵詞 二卷」（図書番号余大四三〇）とある方の本には、「大仏殿絵詞目録」なるものが付されていて注目される。斯本の題簽は一見して明らかなごとく近年の付加になる誤つたもので、原題はその内表紙中央に書される「反故雄（第五）大仏殿縁起上下（上下）拔書」とあるのに従うべきであろう。しかしこのように記されてはいるものの、その内容はまったく『東大寺縁起絵詞』にほかならないのであって、つまりこれは『反故雄』なる書物のうちに『東大寺縁起絵詞』が『大仏殿縁起』の名のもとに写し収められているわけである。そしてその本文は構成と内容のところでも寸記したとおり全二十巻を上・中・下に三分したうちの上と下に相当する部分の抜書であつて、したががい斯本の本文自体はさして取るに足らないものであるが、ただ以下に問題とする目録が付記されていて軽視しがたい価値をもつ。

その目録というのは、開巻初葉に「大仏殿絵詞之目録上」とあつて、『東大寺縁起絵詞』の第一巻から第九巻までの総て九卷七十三段（うち

第九卷第三段・第四段の二段を欠く)を後掲のごとく記し、ついで斯本なかほどに同じく「大仏殿絵詞目録下」があり、第十五巻から第二十巻までしめて六巻四十四段(うち第十五巻第四段・第十八巻第七段の二段を欠く)のそれを載せる。これに欠如せる第十巻から第十四巻にいたる五巻五十三段が、したがって同目録の中となる。してみると『大仏殿絵詞』と改題された『東大寺縁起絵詞』には、もと全百七十段にわたる目録上・中・下が存在したことほとんど確実といわねばならず、今この大谷大学図書館蔵の『反故雄』にその中を欠くことはかえすも残念でならない。

しかるにその後、東大寺図書館で図らずも目録の中を収める一写本にめぐり会えた。それは大谷大学図書館蔵の『反故雄』ならぬ『反故堆』と題される全十冊からなる本で、内容はおおむね東大寺関係の文集であるが、その第五・六・七の三冊に目録の中(うち第十四巻第五段を欠く)と『東大寺縁起絵詞』の第十巻から第十四巻までの全文が写されているのである。奇しきことは東大寺の『反故堆』たるや逆に中のみで上・下を欠くというものであったが、とにかくにもかくて大谷大学、東大寺図書館の『反故雄』『反故堆』より『東大寺縁起絵詞』全二十巻百七十段の「大仏殿絵詞目録上・中・下」がここに首尾一貫することとなった。

ところで、それではこの目録は『東大寺縁起絵詞』成立当初の建武四年から備っていたものなのかどうか当然問題となる。このことを問

う前に該目録が収載されている『反故雄』『反故堆』の性格を明らかにしておく必要がある。全体この二つの本はいかに解したらよいのであろうか。まず大観して気付くことは、(一)雄と堆の違いこそあれ両者はまったく相似た題を有し、(二)いずれも内表紙ないし題簽の割書に「大仏殿縁起」とあり、(三)共に「大仏殿絵詞目録」が見られ、(四)共通して本文のかながひらかな体を使用していることなどであろう。これらの諸点は結局『反故雄』も『反故堆』も、もと同一の本でつまりどちらか一方の一字の誤写を想定せしめるに十分なものがあるように思われる。しかしその考えの不当なことは、東大寺図書館の『反故堆』十冊がみな明瞭に「堆」とあるのに対し、大谷大学図書館のいま一冊の『反故雄』も、やはりまた明確に「雄」と書かれている事実によって明らかであろう。さらにその場合重要なことは、両本の内容が全く一致せず、特に『反故雄』興福寺系、『反故堆』東大寺系とはっきり系統が内容的にわかれる点より、元来これらが別個に成立した本であることを雄弁に物語るわけで、したがって結論としていいうことは、「大仏殿絵詞目録」の付された『大仏殿縁起上・中・下』なる『東大寺縁起絵詞』のうち、興福寺系の『反故雄』はその上および下を、東大寺系の『反故堆』はその中だけをおたがいに関係なく書写したということになる。だからここに目録全部が打揃ったのは全くの偶然であった。

さて、それでは前に保留しておいた問題、すなわち上記の目録が建武四年成立当初のものかどうかを検討しよう。絵巻にこの種の目録が往々

附随していることは、たとえば『春日権現験記絵』や『弘法大師行状絵』に照しても不審でないが、しかしながら結論として本目録は以下の理由により『東大寺縁起絵詞』成立当初のものとみなすことはできない。

その第一は、もしかりにこの目録が成立当初から備っていたなら、それは当然順次伝写されていったにちがひなかるうが、事実は『反故』本系の写本にのみに当該目録があつて他本には全く存在しないのである。

この一事は後作の疑いをまず濃くするものといえよう。第二に見逃せないことは、『大仏殿絵詞』と改題された写本にのみ本目録があつて、しかもその写本は一名『大仏殿縁起』とも称され上・中・下の三巻に分たれていることに加え、本来カタカナ体であるべき本文が、そこではひらかな体に改められている事実である。このような事象の背後には、なにか『東大寺縁起絵詞』の外形上に特別の変革を要するような事態が生じたのであらう。

いったいそれはなにであつたのかといへば、天文五（一五三六）年に東大寺で作られた『大仏殿縁起』（原本に「殿」の字はないが普通にかく呼称される）上・中・下三巻がこれに関連するものと思われる。芝琳賢が画く右の『大仏殿縁起』は、上巻の詞書が後奈良天皇（一四九六—一五五七）、中巻のそれが同天皇の弟青蓮院二品尊親王（一五〇四—一五五〇）下巻が三条西実隆（一四五五—一五三七）の子で、後奈良天皇や尊親親王とは従兄弟の間柄になる東大寺別当寺務公順（一四八四—）の筆にそれぞれなるものとしてすこしく知られる室町末期の絵巻物であ

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

るが、実はこの絵巻物は末尾に記されるつぎのような奥書より、『東大寺縁起絵詞』二十巻を上・中・下の三巻に要約したことがわかつてゐる。

東大寺縁起古来所記為廿卷

而依事繁多見者聞之聞者倦之

仍鈔至要縮为上中下三卷焉

於上卷之詞書系被染宸翰訖

披閱之輩發修造之志者足矣

于時天文五年 月 日

勸進沙門祐全

この奥書と前記の事象とを合せ考えれば、そこにおのずとひとつの結論が導き出されるのではないだらうか。すなわち天文五年に東大寺では古より伝えられる『東大寺縁起絵詞』二十巻を要約して『大仏殿縁起』上・中・下三巻を制作することとなったが、二十巻は浩瀚にすぎるため全段の内容を容易に把握しがたい。これをたやすく窺知する目的で目録が必要視されて、ここに「大仏殿縁起絵詞目録上・中・下」が作られ、そのさい絵巻の常として本文のかなり改められたと考えられないであらうか。

以上いささか想像に走りすぎた嫌いも多分にあるが、ともかくくだんの目録なるものは、早くて室町末期の制作で、とうてい『東大寺縁起絵詞』成立当初から存在したものとは思われず後作とみなしたい。しかし内容を検索する目安となる点で捨て難く私に復原したものを本稿の最後

に掲げておく。

絵巻化の問題

『東大寺縁起絵詞』は文字どおり絵巻の詞書であることはすでにしばしば述べたが、重要な問題は実際それが絵巻として完成したかどうかである。かりに絵巻化されそれが今日遺存していたらどんなにかすばらしかったであろうか。おそらく時代、場所、巻数、背景などあらゆる点からいって、かの延慶三（一三一〇）年に成った『春日権現験記絵』にも匹敵するほどの絵巻であったにちがいない。

ところで、『東大寺縁起絵詞』第一巻第一段をみるに『法華経』方便品の文を借り、

感^ニ應^マチ^クニ見^テ旧^ニ記^シケ、レハ適^ニ万^ノ水^ニ一^ノ滴^ヲ露^ノ点^ヲウツシ僅^ニ九^ノ牛^ノ一^ノ毛^ヲ取^リ筆^ヲ端^ヲ頭^ヲ只^ニ記^ス録^シ任^ニ言^ハ葉^ヲカサルニアラス八^ノ音^ヲ皆^ヲ法^ヲ身^ヲ説^キナレハ万^ノ善^ヲ同^ニ仏^ノ界^ニ帰^リ童子^ノ採^リ画^シ遊^ビ終^ニ覺^ヲ路^ヲ趣^ニ縑^ノ素^ヲ見^ル聞^ク果^ニ海^ニ至^リ縁^ヲセン

とあって、採画つまり絵画化する旨が記されているし、また各段の後は必ず「第〇絵有ヘシ」の記載が認められ絵の備っていた様子を伝えている。してみると『東大寺縁起絵詞』には、かつて二十巻の絵巻に仕立て上げられた可能性も十分ありうることとなる。しかしその可能性は単なる夢としてしりぞけなければならないことを残念に思う。以下このへんについて検討を加えてみよう。

まず『東大寺縁起絵詞』のうちに前記のごとき絵巻としての要素を含

む点につき述べると、これは編述後絵巻化を予定しての編者の当然の言辭とみなすべき性格のものであって、これをもってただちに絵巻を予想するのは早計といわねばならない。つぎに問題となるのは、こんにち絵巻化された『東大寺縁起絵詞』の原本はもとより、その模本や残欠ないしは一片の断簡すらも発見されていない事実であって、これは常識的にそれが成されなかったことを考えしめるであろう。もっともかくいえばあるいは人あっていうかもしれない。それは単に現在まで伝存しなかっただけである。よしそうであるなら、東大寺の二十巻もの絵巻である。それがなんらかのかたちで文献にあらわれていても不思議はなからう。これにつき『看聞御記』永享十（一四三八）年六月十七日条の、

十七日 晴 南御方 春日 御乳人七観音詣 重賢参 法輪院絵四

巻進之 東大寺縁起三月堂絵
児方芸松三局 則内裏献之

とみえる『東大寺絵』を『東大寺縁起絵詞』にあてるむきもあるが、これがあきらかに失当であることは、前者が一卷であるのに対し、後者が二十巻ということによっても明白であって、結局文献の上でもその存在を徴することはできないのである。さらに未完成説を側面から支持するものに室町時代後半東大寺において、相次いで制作された『執金剛神縁起』三巻、『八幡縁起絵』二巻、『大仏縁起』三巻、『二月堂絵縁起』二巻の各種縁起絵巻がある。これらの絵巻は前にも寸言したごとく、実は『東大寺縁起絵詞』にもとつきながら画かれたものにほかならない。もし『東大寺縁起絵詞』が絵巻化されていたのならば、あえて同工異曲

のこうした絵巻は必要なかったであろう。

このように遺作の面でも文献の上でも『東大寺縁起絵』という二十巻の絵巻物の存在が確認しがたいとすれば、それはあたかも文和元（一二三二）年乗専（一二七五）撰の覚如の伝記絵巻『最須敬重絵詞』七巻同様、ついに絵詞のみ作られ絵巻化されなかったとみなすほかないであろう。

それではなぜ詞書まで完成しておりながら、絵巻化をみななかったのかすこしく疑問に思われようが、それはやはり前に瞥見した時代の趨勢に帰せしめるのが妥当かと思う。この期における東大寺には、もはや二十巻ものの絵巻を完成させるだけの経済的余裕と仏教的活力とを失せていた上に南朝方の東南院と北朝方の西室院という政治的対立もからんで、この絵巻が目覚しく抬頭してくる庶民層の眼前に必要不可欠の勧進用具と知りつつも、ついにこれを断念せざるをえなかったのではなかろうか。隣寺のライバル興福寺では、これより先しばしば引合に出す『春日権現験記絵』二十巻を、ついで『玄奘三藏絵』十二巻を完成させている。しかし東大寺には興福寺のごとき大和一国の守護権もなく、藤原氏という強力なパトロンもいなかったのである。

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

『東大寺縁起絵詞』の諸本

はしがき

『東大寺縁起絵詞』が絵巻物化されなかったであろうことは前章において大略これを説述した。したがって、こんにち本書は詞書の写本によってのみ本文をみる事ができるのである。そこでここでは『東大寺縁起絵詞』には、いかなる写本が存し、それはどういう特色があって、系統はどのようになっているのかといった点を主として書誌的な面から鋭意追究したいと思う。

さて、くりかえしいうようだが『東大寺縁起絵詞』の成立は、南北朝初期の建武四（一三三七）年で、そのことは後述の永享三（一四三一）年本、明暦二（一六五六）年本の系統を異にする二写本の識語からも推断できる。それより半世紀以上を経過した応永九（一四〇二）年兼俊なる東大寺僧によって、『東大寺縁起絵詞』は建武の原本から転写された事実が、右の永享・明暦両本の奥書より知られるが、兼俊本は残念ながら現存しない。その識語はつぎのとおりである。

本云 建武四年_{丁丑}十二月十七日 玄竜判

于時_{（イ）} 応永九年_{壬午}三月十一日写之 興隆沙門_{兼俊} 識

もし兼俊がこの応永九年に本書を書写しておいてくれなかったなら、

あるいは『東大寺縁起絵詞』は現在まで遺存しなかったかもしれない。というのは漸次判明するごとく以下の諸本がすべてこの応永九年兼俊本の系譜をひいているからである。書写者の兼俊は『専寺堅義者参勤例』によれば、明徳四（一三九三）年に興福寺維摩会の堅義者として参勤しているほか、大東急記念文庫蔵の応永七（一四〇〇）年八月二十七日付『東大寺文書』鳥羽谷水田売券から東大寺僧と知られ、『東大寺縁起絵詞』を写した同月二十日には、『八幡宮勸学講記録』（『大日本史料』七―五）にも『擬講兼俊』の名をつらねている。

南都における擬講とは、いうまでもなく金光明・最勝・維摩の三会講師たる勅命を受けながら、まだそれを終えない前のことをいうのであって、已講に対する名称で、つまり講師に擬せられるとの意である。室町初期そうした三会の制が厳格に守られていたかどうかは疑問であるが、ともかくかかる伝統の擬講位にあった兼俊の学僧としての面目を察知すべきであろう。

ところで、この兼俊本は権威ある『東大寺縁起絵詞』の写本として以後転写されていくが、早くも翌応永十（一四〇三）年と同二十一（一四一四）年に雁行する二本が派生している。実はこの二つの写本が、おのずと『東大寺縁起絵詞』の系統を二分していくわけだが、そうした意味においても分岐点に位置するこの応永九年兼俊本の存在は、『東大寺縁起絵詞』書誌上まことに重要な地位をしめるものといわねばならない。斯本が建武四年の原本と共に現在伝存しないのは、かえすがえすも遺憾

のきわみである。

系統一の諸本

前記のごとく『東大寺縁起絵詞』は、応永九（一四〇二）年東大寺僧兼俊によってはじめて写されたが、翌十（一四〇三）年紀延光という俗人がその兼俊本を転写した。その間の事情を永享三年本の識語からうかがってみよう。

昔本云建武四年^丑十二月十七日

玄竜^判

于時^{壬午}応永九年^{壬午}三月十三日写之早

興隆沙門擬講兼俊

応永十年^{壬午}二月廿四日書写早

従四位下紀朝臣延光

かくて紀延光は兼俊の本を直接写していることがわかり、このとき兼俊もおそらくはいまだ健在であっただろう。前記のごとくこの応永十年紀延光本が『東大寺縁起絵詞』の系統を二分するその一方の祖本となる点で注目しなければならない本であるが、これまた現存しない。

紀延光については所徴がないが、『^{新訂}国史大系』第六十卷下『尊卑分脉』第四篇所収の「紀氏系図」に嗣弘の息としてみえる延弘^{えんこう}というのが、あるいは同じ従四位下である点より延光^{えんこう}に当るのかもしれない。それはともかくとして、中世における紀氏といえは興味深いことに東大寺再建の立役者俊乗房重源（一一二一―一二〇六）が同氏の出とされ、また林屋辰三郎博士の『中世芸能史の研究』から、紀氏出身の人々

が多く東大寺関係の芸能を司っていた事実も知られるゆえ、おそらく紀延光も東大寺にかかわる俗人であったと推定して大過なからう。

さてこの系統一の祖本に当る応永九年紀延光本は、その後二十八年を経過した永享三（一四三一）年に延管という者によって書写される。これがすなわち上来その識語を利用している現存最古の永享三年本にほかならない。一部重複するが系統を知る上で重要なため煩をいとわず識語の全部を左に掲載する。

書本云 建武四年^{丁未}十二月十七日

玄竜^{（時）}美

于時^{（壬午）}応永九年^{（壬午）}三月十三日写之早 興隆沙門拟講兼俊

応永十年^{（壬午）}二月廿四日書写早 從四位下紀朝臣延光

永享三年六月書写早

延管

今本はげんに奈良東大寺竜松院の故筒井英俊師が所蔵されるところで、その筆風紙質使用文字および堂々たる書型より推し永享三（一四三二）年の書写本にまちがいなく、筆者は延管と断定される（写真一）。二冊よりなり共に袋綴で後補の淡茶色表紙には「清凉院」「実英」の墨書がみられる。第一冊は縦二十七・五cm、横二十一・八cmで紙数四十七枚を数え、前後にやや厚手の後補紙各一枚を添える。第二冊もほとんど同じで、すなわち縦二十七・七cm、横二十一・七cm、紙数四十八枚。やはり前後に後補の厚紙各一枚がある。第一冊には「東大寺縁起絵詞」の内題のもとに第一巻より第十巻までを写し、続いて第十一巻より第二十

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

巻を第二冊に写すが、第二冊には内題も尾題もみられない。行数は全紙半葉十一行であるが一行の字詰は不定。本文はすべて延管の一筆で、他筆を交えない。ただ漢字にはよみかなが付されており、その状況ははじめの第五巻第三段までが密で、それよりあとは疎となるが、よくみると密な部分には墨色弱きところが多く、かつ濁点も認められるだけではなく、虫喰の上にそれが打たれているところより推して、明らかに近世の後付であることがしられる点に注意しておきたい。しかしいづれにしても今本は、建武四年の原本からわずか九十四年後の写本であるためかきわめて善本で、他本の誤謬誤写を正すところ実に多大なるものがある。このことは筆者延管の書写態度もさることながら、その間に介在する応永九年兼俊本、同翌十年紀延光本がこれまた相当忠実な写本であったことを意味しよう。

ところで、いったい書写者の延管とはいかなる経歴の持主なのであるうか。管見に入った史料でそれを記述しておけば、彼も兼俊と同様やはり東大寺の僧であった。延管の名は『東大寺別当次第』に次のごとく散見される。

百四十五代

恆弘^{勸修寺} 寺務四年半
宝徳三^{享徳元二三四半}

公恵^{西室} 康正元四月五日寺務七（ママ）年

康正元二長禄元二三寛正元
出世後見五師大法師延管 藏照房三論集

公深 尊勝院 後見□少 経真
寛正二二

覚尋僧都 東南院 寛正五年
寛正五十六文正元

後見五師大法師延・
宮

巖宝 隨身院 文正元より寺務三年

文正元応仁元二

公恵 西室 応仁二年 還著

覚尋 還著 文明五—文明七寺務未補

嘉吉より文明十七未補

寺務代延・
宮

これによってわかるとおり、延宮は実に嘉吉（一四四一—四）年間より文明十七（一四八五）年にいたる四十年以上の長きにわたり、寺務代つまりは事実上の東大寺別当と思われる重職にあったのである。これは動揺してやまなかった当時の世相を反映するのであるが、かかる困難な時期に寺務代の任にあった延宮の地位は祭するにあまりあるものがある。この間にあって彼はまたよく寛正五（一四六四）年には維摩会の豎義者をも勤め（『専寺豎義者参勤例』）、同七（一四六六）年には地子に関する衆議にもあずかっているが（『法花堂要録』）、『三会定一記』文明五（一四七三）年条には「延宮擬講」とみえていて、彼もまた兼俊同様講師に擬せられたことが知られる。以上よりして延宮は単に寺

務的な才腕にだけたけていたのではなく、学僧としても十分人望のあったことには思いをいたすべきであろう。『東大寺縁起絵詞』を書写した永享三（一四三一）年は、しかし上のごとき延宮の履歴より推せばいまだ無位の僧であつたと思われるが、彼としてはこれを写すことによって東大寺の認識をあらたにし寺觀の維持を自覚したにちがひなからう。

八幡大井御詠

心カラ生死、衆シツムナヨ急ケ浮舟浪立ヌ間。

春日大明神御詠

六道朝露ワケテ行通、慈悲ノ衫ワカワク間ナシ

善光寺阿弥陀

急ケ人御法ノ舟ノ出ヌ間、ノリヲクレナハ誰カ渡サン

と『東大寺縁起絵詞』の最末尾に書きつけた詠三首は、まさに当時の延宮の信境でもあったかと思われ興味深い。

ところでこの延宮本には、はじめにも記したごとく二冊共前後にやや厚手の後補紙があつて、うしろのそのの表裏にはつぎのごとき墨書がしたためられている。

（表） 此縁起絵詞二帖自有方令相伝処

破損之故加表紙訖

花叢未葉 実英

(裏) 尊光院懷賢法印の相伝之

北林院成算

この墨書から延営本が有方より清涼院の実英に相伝され、そしてそれが尊光院の懷賢より北林院の成算へと伝領されていった次第が明らかとなるが、清涼院・尊光院・北林院ともに東大寺の子院(塔頭)で、表紙をつけくわえた実英は徳川家康(一五四二—一六一六)の帰依をえた近世初頭における寺内無双の学僧といわれた清涼院の中興者、懷賢も宝暦十一(一七六一)年に尊光院を中興した人であるが、成算については未詳。ただ北林院の院主は中興成慶以降代々成の字のつく人が多いので、彼もそのうちの一人なのであろう。この本がいつ竜松院の筒井英俊師の手に帰したのかは知らないが、同師の編になる『東大寺要録』および『南都仏教』創刊号の論文「良弁僧正と漆部氏」に『東大寺縁起絵詞』が使用されるところより、師みずから一本を蔵せられることを察知し親しく拝見あまつさえ恩借する幸運にまで恵まれた。師の生前これを底本に『東大寺縁起絵詞』の翻刻を約しながら果さずまことに慙愧にたえなかったが、今回ようやくそれを実現できてよろこばしく思うとともにあらためて同師に深甚の謝意を表したい。

なにはともあれ、かくてこの永享三年延営本は、現存最古最善の写本としてすこぶる価値高く、今後『東大寺縁起絵詞』を論ぜんものは必ず一見しなければならぬ古本である。

ところでこの延営本には、近世初頭のきわめて忠実な写本が奈良市興福寺に蔵せられているのでつぎにそれをみておきたい。

同本は縦三〇・四cm、横二三・〇cmの袋綴本上下二冊で、上は表紙共で紙数四十九葉、下は同じく四十八葉。半葉十一行。一行の字詰は不定。全文一筆でよく延営本のおもかけを残しながら写しているが、その紙質より江戸初期の写本と思われる。表紙は本紙と共紙で中央に大きく「東大寺縁起絵詞上(下)」と書き、右下に「興福寺印」の二行四文字角印を押す。外題の右には「第四十五号」の新しい小さな貼紙もみられる。内題は延営本同様上の開巻初葉第一行にしたためられ下にはない。尾題の方は上下ともにこれまた延営本に同じく書かれない。漢字にはところどころふりかなをつけるが、延営本ほど繁くはないのは、延営本の密なる部分が後世の付加になるからで、そうした点より興福寺本のふりかなの方がそが、むしろ延営本の原形をとどめるものといえよう。下の最末尾には建武四年の玄竜・応永九年の兼俊・応永十年の紀延光・永享三年の延営の各識語と共に八幡・春日・善光寺の詠歌もそのまま写されているが、かんじんの興福寺本が書写された年紀は明記されない。しかしこれによって興福寺本が延営本の写しであることは確実で、延営本の虫喰部分は興福寺本をもとに復原可能な点きわめて貴重な副本的存在といわねばならないであらう。なお下の裏表紙はもと上の表表紙であつたらしいことが「東大寺縁起絵詞上」の逆文字から窺知され、現在の上の外題は下のそれとは筆致が異って、あとから書きかえられた形跡があ

る。興福寺に延宮本の系統をひく『東大寺縁起絵詞』の写本が蔵せられていたことは、このすぐあとで述べる大谷大学図書館蔵の『反故雄』からも推定できるが、本書はまさしくそれを証するものにほかならない。

さて、永享三年に書写された延宮本は、素性正しい写本として早くも同八（一四三六）年春千代丸という東大寺の童子らしき人物が写しており、ついで時代もずっと降った江戸時代の元禄元（一六八八）年に今度はその永享八年春千代丸本を、さらに同四（一六九一）年には上の元禄元年本を、そして享和二（一八〇三）年に元禄四年本をと順次書写されていく過程が、大谷大学図書館蔵の『反故雄』にみえるつぎのような長文の識語から知られて興味深い。

右此絵詞伝者東大寺寺院之以旧記次

第^①爾^②頭^③し来る処年代数ケ度左^④丹頭^⑤し

侍る然^⑥連^⑦とも文字^⑧農^⑨あやまり字^⑩農置^⑪所

相違^⑫雖^⑬有^⑭之本^⑮農^⑯儘^⑰写^⑱之^⑲尤^⑳正本^㉑ハ正^㉒し

といへとも後人写し来る筆者^㉓農^㉔あやまりな

らん猶^㉕後人以^㉖三^㉗正本^㉘是^㉙越^㉚あら堂^㉛免^㉜よ

本言建武四年^㉝丁^㉞丑十二月十七日

玄竜在判

応永九年^㉟壬^㊱子三月十三日写之

（興竜沙門
疑講兼俊

同十年^㊲癸^㊳卯二月廿四日写之

從四位下紀
朝臣延元^㊴

永享三年六月写之

延宮

同八年^㊵丙^㊶辰八月三日^㊷書^㊸了^㊹春千代丸

右絵詞伝元禄元年辰仲冬下旬写^㊺之

同四年^㊻庚^㊼子二月二十八日写^㊽之

將軍義昭公大仏殿農^㊾縁起を 叙覽

爾^㊿楚[㋀]奈[㋁]へ奉りし時

照[㋂]せ猶見し世かハラ怒[㋃]ともし火農[㋄]

も登[㋅]の飛[㋆]かりとむかふ古[㋇]ゝろを

右者南都興福寺藏本之内多武峯何某院

藏本也 享和二年[㋈]戊[㋉]初冬中七日書写之

紀吉継

最此方ノ中朱印分計書抜もの也

右もって這般の顛末を窺知することができよう。これらの識語を有する『反故雄』については、すでに略述したごとく『大仏殿縁起（絵詞）』と改題された『東大寺縁起絵詞』の第一巻から第九巻、第十五巻から第二十巻にいたる部分写本で、はじめの九巻はあとの六巻より四日はやく

書写されていることが、なかほどにみえるつぎなる識語によって判明する。

右者南都興福寺藏本之内多武峯何某院

藏書也

享和二年^{壬戌}初冬中三日時写之

紀吉継

大谷大学図書館蔵の斯本は縦二十三・九cm、横十六・六cm、袋綴で片面十行、紙数五十二枚を数える。抄出本であるため本文自体はさして価値ないが、既述の「大仏殿絵詞目録上、下」を付すことと、識語の豊富な点においては他の比でない特徴を有する。

なお前掲の識語から『反故雄』の底本が興福寺藏本たることが知られ、その興福寺本が前に述べた近世初頭の書写になる『東大寺縁起絵詞』上下二冊本と無関係に存在しないことは容易に察せられよう。

筆者の紀吉継についてはまったく徴するところがないが、もはやこの期にいたれば一概に東大寺関係の人物とも断ぜられないであろうし、ことに本書が興福寺藏本を写している点で、なおさらその感を深くせざるをえないといえる。しかし彼は^{拾巻之内}大谷大学図書館にもう一冊の『反故雄』（図書番号・余大四三三）を残しており、元来それは全部で五冊からなっていたようであるゆえ、そうしたものを書き写すには苗字を有することとあいまち相当の教養人と推定しなければならぬであろう。

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

ところで前の識語で、いま一点注意しておきたいのは、將軍足利義昭（一五三七—一五九七）が、『大仏殿縁起』を叙覧にそなえたという記載である。周知のとおり義昭は室町幕府第十五代最後の將軍として知られる人だが、ここでいう「大仏殿農縁起」とは、おそらく天文五（一五三六）年芝琳賢が画く東大寺現存の『大仏（殿）縁起』三巻を指し、「叙覧」とはときの正親町天皇（一五一七—一五九三）を意味するものと思われる。『お湯殿の上の日記』永禄十一（一五六八）年二月十日条の、「おかのお所きのふたかたより御とまりありてたけのうち殿御まいりにてならの大ふつのえんきあそはさるゝおかのお所一日御いてあり」という記事は、ことによると右の記載と関係あるのかもしれないのちに記して後考にまきたい。

さて、つぎに上記の大谷大学図書館蔵『反故雄』ときわめて類似した題をもつ東大寺図書館蔵の『反故雄』につきふれなければならない。この東大寺本『反故雄』はすでに略記したごとく全十冊よりなり、『反故雄』と同様その中に『東大寺縁起絵詞』の一部分を写し収めている。十冊の筆者は明らかではないが、すべて一筆で内容より推し東大寺関係者と推定する。縦二十三・四cm、横十六・九cmの袋綴で第一冊十八、第二冊十九、第三冊十九、第四冊十九、第五冊十七、第六冊十九、第七冊十八、第八冊二十六、第九冊九、第十冊十五の紙数を数え、これら表紙の題簽には「反故雄^{拾巻之内}」と書かれているが、うち一・三・八・九の各冊は現在これを欠く。また全冊表紙右上には千字文「効」の図書記号をみる。十

冊の内容にはあまり一貫性が認められないが、おおむね東大寺関係の文集で、この点大谷大学図書館の興福寺系『反故雄』と対照的である。その書写年次については明記するものがないものの多少推測できる材料はある。第八冊末尾のつぎの記録がそのひとつとなる。

右件之一冊者以東大寺秘密之証本写之早

于時貞享二_乙二月 日

縮亀軒忘滴

又貞享第四_丁二月七日

縮亀之以本写之者也

ここにみえる貞享四（一六八七）年は『反故雄』書写年次の有力な手がかりとなるが、なにぶん第八冊目という中途に位置する点かならずしも絶対的でない。げんに第六冊の註記には同筆をもって、それよりかなりあとの元禄五（一六九二）年の年記もしたためられているから、これをさかのぼりえないとするのが隠当であろう。そこで留意されるのが各冊表紙の紙背文書であって、この表紙はすべて宝暦七（一七五七）年伝香寺照什の「石橋千人講帳」を使用しているのである。してみると『反故雄』はこの宝暦七年以降の写本とするのが無難で、かたがたもって江戸時代後期の書写にものとしておこう。

かくなる東大寺『反故雄』の第四・五・六冊に『東大寺縁起絵詞』の第十巻から第十四巻までの五巻全文が、『大仏殿絵詞』の中としてその目録と共に収載されており、これはまさに大谷大学図書館の『反故雄』

に欠如せる部分に相当し、その偶然にはただ驚くほかない。本文は片面八行、まま細字による註記があって、その中に前記のごとく「元禄五申ノ三月」の年次もあるので、これ以降の書写にかかるものと推定されるが、使用仮名に濁点がみられる事実は、やはり近世後半の写本であることを如実に示している。なお仮名は『反故雄』同様ひらかな体で漢字にも一部ふりがなが施される。

『反故雄』と『反故雄』所収の『東大寺縁起絵詞』には、なんども記すごとくその題名、巻立、目録、使用仮名、抄出書写等々共通する部分があまりにも多く、おそらく同一原本より別々に写したものと考えられ、その本が目録の検討から『大仏縁起』三巻が成った天文五（一五三六）年ごろの書写本でなかったかと推測されることはすでに述べた。

この『反故雄』と『反故雄』の『東大寺縁起絵詞』が、同じ流れをくむかぎり、これを応永十年紀延光本に発する系統一の写本に所属せしめることは、きわめて当然といわなければならないであろう。

以上、建武四（一三三七）年玄竜によって編まれたと考えられる『東大寺縁起絵詞』が、応永九（一四〇二）年兼俊によりはじめて書写され、さらにこれを翌十（一四〇三）年紀延光が写すことによって、ひとつの系統が生れた事実を明らかにし、今日その系統に属する諸本の解説ならびに特色等につき説述した。このうち現存のものは、永享三年の延宮本（東大寺竜松院蔵）、近世初頭の興福寺本（興福寺蔵）、享和二年の『反故雄』本（大谷大学図書館蔵）、近世後期の『反故雄』本（東大寺図書館蔵）

館蔵）であるが、延喜本は最古最善の写本として価値高く、興福寺本もその副本的存在意義があり、また両『反故』本は新しい写本とはいえず録と識語の多い点で無視しがたい価値をもつのである。それでは系統二にはどのような本があり、いったいいかなる特色をもつのか節をあらため検討しよう。

系統二の諸本

『東大寺縁起絵詞』の系統一が、応永九（一四〇二）年の兼俊本を翌十（一四〇三）年紀延光が写したことに始まるのに対し、その二もやはり右の兼俊本が同じ応永二十一（一四一四）年に書写されたことから出発する。つまり両系の祖本は共に、兼俊本を中心として雁行する格好となり、したがってそれはいわゆる異本を意味するものではない。この事実が『東大寺縁起絵詞』の書誌上におけるおおいなる特色ということができよう。

それでは早速系統二の祖本を明示する識語をのちに説く明暦二年本の記載よりうかがうとしよう（写真二）。

本云 建武四年_{丁丑}十二月十七日 玄竜判

于時応永九年_{壬午}三月十一日写之 興隆沙門_{兼俊}

于時応永廿一年八月十五日写之 右筆平康藤

これにてわかるとおり、かの応永九年兼俊本を十二年後の同二十一年

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

に平康藤なるものが書写したことで、ここにもうひとつの系統が派生するにいたるのである。わかりやすくそれを図示すればつぎのようになる。

建武四（一三三七）年玄竜本——応永九（一四〇二）年兼俊本——

┌ 応永十（一四〇三）年紀延光本……………系統一
└ 応永二十一（一四一四）年平康藤本……………系統二

さてその筆者である平康藤については、これまたいかなる人物なのか明らかにしないが「右筆」とあるところより推し、いずれ高貴の家に仕えた身かとも想像される。ここで偶然の一致として興味深く思えるのは、系統一の祖本を写した紀延光といい、二のその平康藤といい共に俗人という点が共通することで、これは当時の東大寺内にそうした人達が入り込んでいた証となるものだろう。したがって高貴の家とは寺家を指すことになろうか。それはともかくとして、この平康藤がおそらく書き付けたと考えられる三年後の応永二十四（一四一七）年に行われた東大寺大仏塗金に関する記録と和歌が、系統二の写本には上記の識語にひき続きつぎのごとく写されているのを重視しなければならない（写真二・三）。

南京東大寺廬遮那仏大像造立歳久裝飾銷損

大相公捨數千兩黄金命工修新之一朝功就台駕臨拜_{（詔之）}

愚拙臨_レ老観_ニ此盛事_ヲ感激之余作和哥三篇以写賀悦之慶云

世ヲテラス君カ光ヲカリテコソ仏モ本ノ姿ミセタレ
今ヨリハ仏ヲカサル金トテ三ノ宝ニカスヲソヘハヤ
仏サヘ又アタラシク奈良ノハノ古ルキ都ソニキハイニケル

花陽山人明一拜上 私云道号耕雲云々

勝定院殿也

于時応永廿四年九月被押大仏御簿為御拝見室町

殿有耕雲御同道御下向之時被詠此和哥云々雖

非繚肝要依為大仏御事書付早

右の文中「私云道号耕雲云々」以下が平康藤の書付になるものと推定され、それより前の部分は明一耕雲すなわち花山院長親（一三三六—一四二九）の記録であって、この史料から東大寺の大仏に対する塗金が、天平の創建時と鎌倉の再建時以外にもう一回室町の足利將軍勝定院義持（一三八六—一四二八）によって行われた事実が判明する点で貴重である。

ともあれこうした重要記録も付する平康藤本は、紀延光本同様これまた残念ながら現存しないが、室町末期の写本が東大寺図書館に所蔵されている。堀池春峰氏はこれを『寧楽』続刊第一号（昭和四十八年）においてA本の名のもとに紹介されたが、ここでは髪字A本と呼ぶことにする。縦三十・三cm、横二十一・二cmの袋綴で、紙数九十四枚の一冊本。表紙には大きく「東大寺縁起絵詞」と中央へ書き、その右肩に千字文の「髪」の字が同筆をもって雄渾にしたためられている。本文は半葉九行

で、大型本のため一行の字詰も二十五字内外と比較的多い。第一巻の最初に「東大寺縁起絵詞」の内題をおくことは他本に同じい。この髪字A本は延管本に劣らずなかなかの善本で、堀池氏も翻刻底本に使われたが、それが第八巻までで途絶してしまったことと、誤植の目立つ点が惜しまれる。

ところで、この髪字A本には二本の転写本があって、やはり東大寺図書館と大谷大学図書館に蔵せられる。よってまず前者から記述するが、堀池氏はこれをC本と名付けておられるので、ここでも髪字C本と仮称しておく。髪字C本は縦二十三・七cm、横十七・一cm。袋綴装で共紙の表紙と最後の白紙一枚を入れ総紙数六十三。表紙左端に「東大寺縁起絵詞全」の外題があって、右角上に例の千字文「髪」が認められるところより、これが髪字A本の転写になることを知るのであるが、遺憾ながら当髪字C本は第九巻第九段までの零本のため、終末に備っていたであろう識語や大仏塗金の記事がみえず、したがってその書写年代や筆者を明らかにすることができない。筆致紙質より勘案し江戸中期の写本とみておく。本文はあまり上手な筆とはいえないが、半葉七行、一行二十字以内位で写しているから、髪字A本よりゆったりしており、きわめて読みやすい本となっている。なお表紙外題の文字と本文のそれとは異筆であり、また最終白紙部分には大小二個の朱印を押すも墨で抹消されており、判読しがたい。あるいは所持者の印であろうか。髪字C本は完本でない上、筆者や書写年代も不明であるため本文自体はところ少いが、髪

字A本と共に系統二に属することが明らかな点で多少注意しておきたい本である。

つぎに大谷大学図書館蔵の髪字本に移れば、本書は早く大正十三（一九二四）年九月現在の『大谷大学和漢書分類目録』に余大一一七の圖書番号で登録されるものに当り、袋綴縦二十六・四cm、横十八・四cmの一冊本。表紙の題簽には髪字C本同様「東大寺縁起絵詞 全」とあり、内表紙の内題および本文最初の首題は通例のごとく単に「東大寺縁起絵詞」と書く。紙は全部で百十一枚の片面十三行制罫紙を使用し、一行の字詰も終始十七文字に統一した階書体であるため、きわめて整然としており読みやすきことこれ以上の本はない。内表紙の初行にやはり「髪」の字が小さく書かれ、かつ大仏塗金記事が最後にみられるところより、東大寺図書館蔵の髪字A本を直接写したものであることが知られよう。その筆写年代は不明なるも、罫紙を使用する点より明治以降の写本とみたい。また同時に筆者もわからないが、第十四卷第八段の途中で筆跡が明瞭に異っているから、筆者はそれ以前と以後の二人と断定できる。

このように大谷大学図書館蔵の髪字本『東大寺縁起絵詞』は、たいへん新しい写しとはいえ、系統のはっきりする東大寺図書館蔵髪字A本の直系写本であり、しかも完本で活字本のごとき体裁を具有する点、他本の読みづらき箇所の指南的役割をはたし捨て難き一面があるものといわねばならない。

さて、系統二の写本としては、以上三つの髪字本のほかなお兼意本と

も称すべき流れの諸本があるので、それをばつぎにみていきたい。

本云 建武四年丁丑十二月十七日

玄竜判

于時応永九年壬午三月十一日写之

興隆沙門擬謄

于時応永廿一年八月十五日写之

右筆平康藤

〔この間に大仏塗金記事が入るも略す〕

于時明暦二年八月十日写之

南山沙門兼意法印

書之

右の奥書識語を有する『東大寺縁起絵詞』は架蔵のもので（写真二・三）、堀池氏が紹介されたB本に相当するが、これによってわかるとおり斯本は、大仏塗金記事を含む明確な系統二に属する本であることが了解できよう。

書誌をいえば縦二十六・六cm、横十九・七cmで、その黄地表紙の題簽には「南都東大寺縁起 全」とあり、また同表紙右上には「廿二」の貼符をみるが、このふたつは共に本文とは別の同筆である。本文は行数字詰不定の袋綴九十七紙。しかして内題は外題と異り正しく「東大寺縁起絵詞」と書かれるが、さらに続けて「上 自一之卷至十之卷」とあって同様のことは中程四十六紙目にも「東大寺縁起絵詞下 自十一之卷至廿之卷」と記される。もってこれが永享三年延営本や興福寺本でみたごとく元來二冊本であったことを知るが、延営本系には上下の文字を明記しない点でやや異なる。斯本は第十五卷第一段を重複し第八卷第五段、同第

六段を欠くほか誤字脱字衍字も多くかならずしも善本とはいえない。こうしたことは書き手が三筆にわかれることも関連するであろう。今本の筆者と書写年代については、奥書通り明暦二（一六五六）年兼意とみることもできるが、このへんにつき堀池氏は『寧楽』続刊第一号で、

B本（架蔵本）は明応二年八月を誤写して明暦二年（一六五六）八月としているが、D本（後述の光成本）が正鵠を得ているようだし、筆写兼意の下「法印書之」は後人の追筆で、兼意が法印であれば自署として、「南山沙門法印兼意書之」とでも記載するのが当代の旧例であつたろう。

と指摘され問題がある。ただこの場合後述するD本には、筆者のみたかぎり架蔵本のごとき長文の識語がなかったように記憶するので、明暦が明応の誤写と簡単にいいきれないものを覚える。がしかし今はいちおう氏の説に従って、もう一度架蔵本の奥書を考えなおしてみると、書写者が明応を明暦と記してしまったのは、文字通り明暦二年の写本であることを暗示しているのではないだろうか。紙質も文字もまたあとでふれる朱印もともども明暦頃のものともみてもさして不自然を感じないから、右の考えも一説として是認できると思う。

とまれここにいたって系統二の本には、応永二十一（一四一四）年の平康藤本を転写した明応二（一四九三）年本とさらにその転写本に当る明暦二（一六五六）年本が存在した事実が浮び上ってきたことになるわけだが、筆者の南山沙門兼意については未詳というほかない。南山は

東大寺の大和にあつては吉野山、壺坂山を指すが、普通一般には高野山をいう。そういえば兼意の下に追筆される法印の位も高野山で用いる場合が多いし、またその右に押される「南山北寺」なる朱印に注目すると、巷間にはこの印を押した仏教典籍がすくなく散在しており、そうしたひとつの天海版『広弘明集』（架蔵）の表紙裏貼には、「金剛峯寺僧名帳」が使用されているので、ここでの南山は高野山を意味するものとみてよからう。そうなれば高野山の兼意なる僧は、室町時代の明応年間の人なのか、それとも江戸時代明暦頃の人物であるのかを追究することによって、斯本の書写年代も判明するわけだが、遺憾ながら目下のところどちらの史料もえていないので諸彦の垂示を切念したい。

かくて架蔵本『東大寺縁起絵詞』は、誤脱多くかつ書写年時にも若干の疑問が存することがわかったわけだが、それでも建武四年玄竜本―応永九年兼俊本―応永二十一年平康藤本―応永二十四年大仏塗金記事―明応二年兼意本―明暦二年本という経歴を踏む貴重な写本と目され、その価値は低からざるものがあると思われる。

ところでこの明応二年の系譜をひく『東大寺縁起絵詞』が、いま一本東大寺図書館に蔵せられており、同寺所蔵の本書は竜松院のものも含めれば都合五本となりさすが本家本元の感を深こうする。今本は堀池氏がD本の名のもとに紹介されるもので、十巻ずつを上下に二分冊とするうちの上冊零本一冊である。その大きさおよび装幀は縦二十四・三cm、横十七・〇cmの袋綴で、紙数は丁付・奥書ともに四十六と記すも実際は第

三十九丁を重出しているから四十七と数えるが正しい。表紙につき述べれば草書をあしらった厚紙に松葉を配した題簽が貼られてあり、それに本文と同筆をもって「東大寺縁起絵詞 毫」と書かれている。開巻初葉第一行目は他本同様「東大寺縁起絵詞」の内題にあて、以下各半葉十行の謹直な細字で書かれるため一行の字詰もかなり密となっている。特に目立つのは朱による各種の記号で、すなわち句読点は・で、各段落は〽で、寺名地名は右横に、人名は中央に、官職名などは左横にそれぞれを、また宗名は中央に、年号は左横□で明示されている。したがってきわめて読みやすい本であるが、注目されるのはかなに濁点が認められることで、もってこれが近世の写本であることを察知すべきであろう。はたせるかな末尾につきのような識語が書かれている。

右合四十六紙^(宋)総テ為^ニ上^ノ之^ノ卷^ヲ以^テ東大寺総持院之藏書^ニ於^テ知足院^ニ筆^ス之^ヲ

享保十一年次丙午夏六月二日膳写之竟

泉州堺府百舌埜耳原山円通寺唐禪院沙門

南山律宗後学釈迦覺泉僧懺敬誌

東大寺縁起已上十卷合為上卷

維時延享第五竜集辰戌上巳中完以知足院本於
放光院写模功畢

小菰菰光戒^(盛) 欽^(書) 筆

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

これをもってこれをみれば斯本は前十巻までを上巻とする本で、その筆者は光戒、筆写年代は江戸後期の延享五（一七四八）年と知られ、まさしく濁点のみられることと照合する。そして明記されるように本書は、東大寺総持院本を享保十一（一七二六）年に覺泉が書写した本を底本としているので、ここに東大寺総持院本、享保十一年覺泉本、延享五年光戒本の計三本の存在が一挙に確認されたわけである。この延享五年光戒本につき堀池春峰氏は、

D本（光戒本）はC本（東大寺図書館藏髮字C本）と同じくもと三帖よりなった原本を^(輕)写したもので、あと二帖が^(輕)写されたかどうか明白でないが、絵詞卷一より卷九まで収録し、享保十一年（一七二六）六月に堺の円通寺唐禪院の僧覺泉が、東大寺総持院所藏本を^(輕)写したものを、更に延享五年に僧光戒が書写したもので、帖末には、E本（東大寺『反故堆』本）をのぞき、ほぼ同一原本より転写したことを示す識語が収められている。

と記述しておられるが、やや不審な点がある。いまそのへんを指摘すれば、第一に光戒本を卷九までとされる点である。しかし原本にあたってみると光戒本は、奥書にもあるとおり卷十の終末までちゃんと収録している。おもうにこれは第九卷第九段で綱筆されている髮字C本と混同された結果であろう。第二に光戒本も髮字C本も、もと三帖よりなったといわれることだが、これまたそれぞれ十卷づつの上下二卷（帖）本とみなければならぬであろう。ここも氏はおそらく髮字C本が九巻までし

が現存しないため、そこまでを上巻とする『反故』本系と同一視され、それをそのまま光戒本にもあてはめられたものと考えられる。第三に光戒本にも架蔵B本などと同一識語が収められているとされる点であるが、これまた疑いなきをえない。大仏塗金記事を含む長文の識語は、架蔵本に照しても第二十巻のあと、つまり下巻最末に記されているはずなのに、堀池氏の口吻では第十巻上巻末にそれがあるらしいような記述ぶりだが、事実は光戒本には下巻が存せず、かつ上巻の識語は上掲のとおり享保と延享のそれのみとなっているのである。したがって架蔵本の明暦二（一六五六）年が、光戒本のそれより明応二（一四九三）年の誤写とされる理由がよくわからないのであって、あるいはこれはその後架蔵本に書かれると同じ識語部分の断簡でも見出されたのであろうか。このへんいちどぜひ確認したいものである。

いずれにしても延享五年光戒本は、十巻ずつを上下に二分巻する上、堀池氏のいわれるごとく架蔵本と同じ識語があるとするならば、当然これは兼意本の流をくむもので、それはそのまま系統二に属する写本となる。いま光戒本の下巻を欠くのは、同本が相当の善本だけに惜しまれてならない。

ところで、系統二の写本にはいま一本天保十五（一八四四）年樂山本とて香川県大川郡志度町の多和神社内多和文庫に所蔵されるものがある。斯本のことは『国書総目録』第六巻にもすでにその存在が明記されているものの、眼福の機を得ず詳細がつかめなかった。しかるところつい最

近愛知県立大学の黒田彰氏の御好意により、氏の撮影された同本の紙焼写真を閲覧する幸運に恵まれ、ようやくその全容を知るに至った。これによれば多和文庫の天保十五年樂山本『東大寺縁起絵詞』は、袋綴の一冊本で紙数八十一枚を数える。黒田氏の御教示によれば、縦二十七・三cm、横十九・五cm、半葉十行、一行二十字以上の字詰をもつ。表裏の表紙はえんじ色亀甲唐花型押紋の厚紙で、表紙には題簽を含め三枚の貼紙がある。まず左端の題簽には「東大寺縁起絵詞 上下」とあり、表題の文字に平行して「このふみたわのふぐらにをさむ」の〇型印が押され、その下に「四十号」の文字をみる。二枚目の張紙には「香木舎文庫」の長方型印と「東大寺縁起絵詞一冊」の墨書およびその右肩に「上左六左ノ五」なる箱番号らしき細字がみとめられる。三枚目は千字文による図書記号「行」の字で、そのラベルの形は六角型となっている。これらの文字はいずれも本文とは異筆であり、いずれも松岡調の使用印であるので多和文庫へ入ってから貼附されたものと考えられる。第一葉初行には「東大寺縁起絵詞上 自一之卷至十之卷 上巻」の内題があって、その右下横に表紙でみたと同じ「香木舎文庫」、左上端に「多和文庫」（二行四文字角）の押印がある。第三十九葉目にも「東大寺縁起絵詞下 自十一之卷至廿之卷 下巻」の内題文字があって、元来これが十巻つつを上下に分かつ二冊本であったことを教えているが、この内題の書き様はすでにみた架蔵本と同じ点を注目すべきであろう。はたして最末には建武四年の玄竜、応永九年の兼俊、同二十一年の平康藤の各識語に加え、

応永二十四年の大仏塗金記事が写されているので、当本も明瞭な系統二に属する写本であることが知られよう。その書写年代は筆体より江戸末期と鑑されるも、それを明示する奥書類はない。ところが表紙の見返しに本文とは異筆の文字で、つぎのごとき重要な記録が張紙されていて、この本が天保十五（一八四四）年の書写にかかることを教える。

此二冊原本ハ勢州山田善光寺所蔵ナリ天保十五年秋八尾樂山ノ太神宮ニ詣ル時善光寺ニ信宿ス其間寺蔵ノ宝物書画ヲ拝見／ス此本^モソノ中ニ有リ 樂山初メテ見テ珍ナリトシ院代ニ乞フテ写サシム原本ノ亦画ヲ畧セリ絵詞兼備ノ本何レニ在リヤ尋ヌヘシ東大寺ニ執金剛神／画卷三卷アリコハ夫ト同カ異カ知レル人ニ可^レ問

此本ヲ読ム人ハ東大寺ノ盛ナル事ノ大綱ヲ知ルヲ詮トスヘシ前後ノ文附記スル事多クノ甚／煩冗ナリ且朝議勅裁王公大臣ニカ、リシ事ハ六国史東鑑朝ノ野群載等ニ見ユ高僧ノ履歴ハ高僧伝ヲ披イテ知ルヘシ法門ノ事ハ夫々ノ仏書アルモノナリ各其本書ニ就テ僉義スヘシト云

写誤モ亦少カラス善本ヲ得テ校正スヘキ者也弘化三年三月廿六日此丘詮兼校読了記之／此書ノ外ニ東大寺大仏記アリ大仏造立供養記アリ世間ニ印行セル大仏縁起アリ更ニ対照ノ善キ事調ルヘシ

これによって明らかとなり、多和文座所蔵の『東大寺縁起絵詞』は、天保十五年秋に八尾（河内国八尾か）の樂山なる者が伊勢山田善光寺蔵本を底本として書写したことが知られ、さらに弘化三（一八四六）年三月僧詮兼が、これを校読し上掲の文を附した事実が判明しよう。本文中にみられる注記や押紙の文字は、筆致より書附どうり詮兼の手になることがわかる。樂山、詮兼ともにいかなる人物なのか詳らかにできないが、樂山は本書を珍本と見、詮兼また先行文献と対照して読むべきことをすすめるなど、二人の炯眼には敬意を表せずにはおれないものを覚える。ちなみに詮兼の書附は樂山の書写本を指して「此二冊」と記すが、現物ははじめにもいったとおり一冊本であるから、これはあるいは底本の勢州山田善光寺本が、上下二冊本となっていたのかも知れない。ところでその善光寺であるが、同寺はいまも三重県伊勢市吹上町に寺名のみを伝える天台宗善光寺のことで、この寺には近世初頭まで享徳四（一四五五）年書写の文保本『太子伝』八冊も所蔵されていた事実を注目したい。右の『太子伝』は山田善光寺から本山の近江西教寺法蔵へ寄進され、ついでそれがかの天海蔵本となって、現在は日光山輪王寺に収まっているのである。山田善光寺と西教寺といえ、戒光山西教寺より弘化二（一八四五）年に版行された同寺中興真盛の『円戒国師絵詞伝』六卷（盛俊撰）の原本も、これまた山田善光寺に伝えられていたものであった。他方その山田善光寺も文政十（一八二七）年には、源信の『自誓戒』を出版しているほどであるから、同寺にはかなりの典籍が収蔵さ

れていたものと思われる。かような寺であつたなればこそ安永九（一七八〇）年九月には、信濃善光寺の一光三尊仏が山田善光寺に一宿されたのである『統郷談』。しかし太神宮の膝元である伊勢において、特に熾烈をきわめた明治の排仏毀釈で、ついに同寺も廢れてしまったらしく、現在は有名無実の寺院と化している。したがって同寺の『東大寺縁起絵詞』も、その後どうなったのかもろん不明であるが、ことによると後記する末見の成資堂文庫本が、あるいはそれに当るのかも知れない。なにはともあれ右のごとき善光寺に伝えられた『東大寺縁起絵詞』を写した天保十五年樂山本は、間もなく僧詮聚の手に移り、琴平・多和両神社の元宮司松岡調の多和文庫へ入つたのである。

以上が建武四年玄竜本―応永九年兼俊本―応永二十一年平康藤本に発する『東大寺縁起絵詞』系統二の諸本の概要である。この系統の特色としては応永二十四年に行われた東大寺大仏塗金に関する明魏耕雲（花山院長親）の詠歌記事と、本によつては第一巻より第十巻までを上巻、第十一巻より第二十巻までを下巻とすることなどがあげられる。特に大仏塗金の記録はその事実を具体的に示すものとして貴重で、『和州旧跡幽考』巻二なども引用したほどである。

しかしして系統二の現存本には、室町末期の髪字A本（東大寺図書館蔵）、江戸中期の髪字C本（東大寺図書館蔵）、明治以降の写本と考えられる髪字本（大谷大学図書館蔵）、明暦二年の写本であろう架蔵B本、延享五年光戒本（東大寺図書館蔵）、天保十五年樂山本（多和文庫蔵）の

各本があり、このうち髪字A本は中世最末期にさかのぼる完本として、また架蔵B本は多くの識語を載せる点で、それぞれ珍重されるのである。

余 説

『東大寺縁起絵詞』の諸本を系統別にみくると以上説いたようになるのであるが、なおこのほかにいずれの系統に所属するか判然としなものの若干あるので、ここでそれらについて補記しておく必要がある。

まず初めにも紹介した『南都巡礼記解説』に記される大島雅太郎氏蔵本である。吉田幸一氏の御教示によれば所蔵者の大島氏は会社重役で蔵書家であつたらしいが、すでに故人となられその蔵書も戦後分散してしまつたとのことである。したがってこの本の詳細は現在のところ『解説』の記述以上に知りえないが、ただそこに引用される第六巻第三段末尾の詞書を他本と比較してみるに、

大島本	治承ノ炎上	焼ノコリ	収リ
延営本	治承ノ炎上	焼 ^々 残 ^リ	収テ
興福寺本	治承ノ炎上	焼テ残リ	収テ
髪字A本	治承ノ炎上	焼ノコリ	収テ
髪字C本	治承ノ炎上	焼ノコリ	収テ
髪字谷大本	治承ノ炎上	焼ノコリ	収テ

架蔵本	治承炎上	焼残	収テ
光戒本	治承ノ炎上	焼ノコリ	収テ
梁山本	治承炎上	焼残	収テ

となり、もし「収リ」が「収テ」の誤植とするならば、髪字本系や光戒本に近い本だったことが推定され、系統二に属するものといえようか。

ちなみに架蔵本はこの小比較からもわかるとおり、きわめて不純な写しで決して善本といえない事実が了解できよう。

つぎにあげておかねばならない本は、お茶の水図書館成資堂文庫に収蔵される二巻二冊本である。『国書総目録』第六巻に「建武四写？」とあるので、これが『東大寺縁起』とされながらも『東大寺縁起絵詞』に相当するものであることはまちがいない。ただ同文庫本は目下未整理を理由に公開しないので、系統一に属する二冊本なのか、それとも系統二の上下二巻本であるのか全く不明なのもどかしい。前述のごとく山田善光寺旧蔵本の可能性も考えられるので、その速かな公開が望まれる。

最後に新しい写本ながら奈良国立博物館と日本大学図書館にも、おの一本づつ『東大寺縁起絵詞』が蔵されているが、共に昭和のもので前者は東大寺本を写していると思われる。

なお、『国書総目録』にはこのほか内閣文庫、宮内庁書陵部にもそれぞれ『東大寺縁起絵詞』を蔵するように記してあるが、両本については国文学研究資料館蔵の紙焼写真を徴するに、その内容は『東大寺縁起絵詞』ではない。

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

むすび

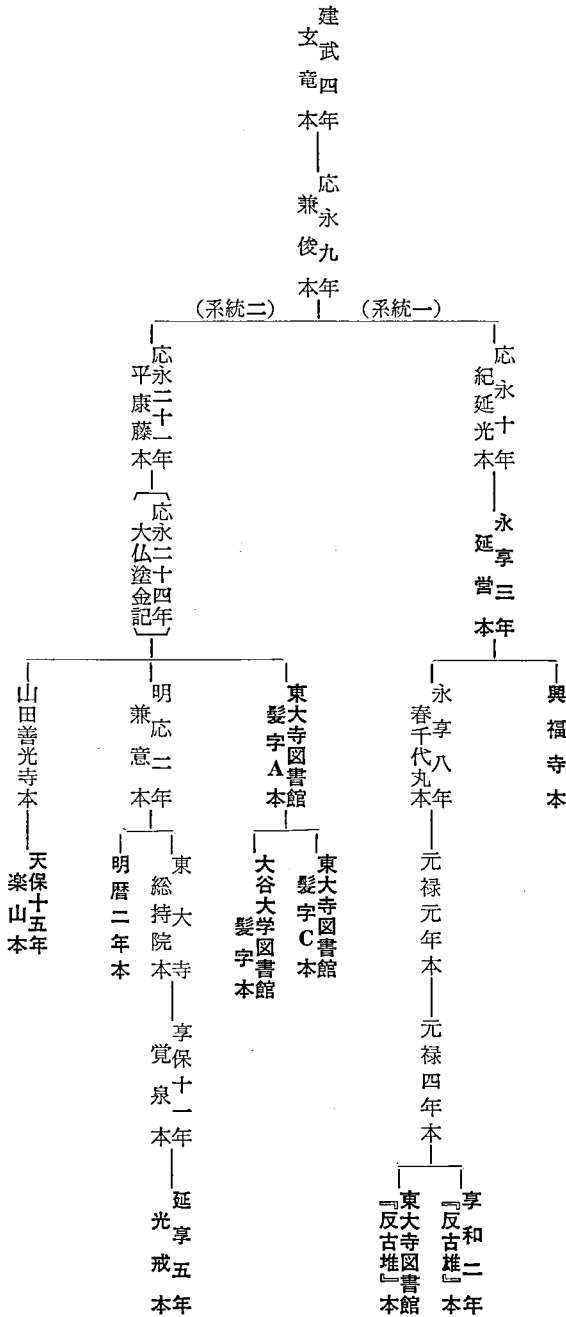
上來『東大寺縁起絵詞』の諸本につきながめてきたが、ここにそれらをまとめむすびにかえたい。

『東大寺縁起絵詞』は建武四（一三三七）年玄竜によって編まれたと考えられるが、その後六十五年を経過した応永九（一四〇二）年にはじめて東大寺僧兼俊により写された。翌十（一四〇三）年と同二十一（一四一四）年に紀延光と平康藤が、右の兼俊本を書写したことによって、ここに『東大寺縁起絵詞』は雁行せる二つの系統をみるにいたった。この両系統が世間でいういわゆる異本にあたるものでないことは自明と思うが、しかしこの事実が『東大寺縁起絵詞』の各本をみる上で重要な視点となるから大いに留意しなければならない。しかしてはじめの応永十年紀延光本の系統一をひく写本としては、永享三（一四三一）年延営本（東大寺竜松院蔵）、延営本の写し興福寺本（興福寺蔵）、永享八（一四三六）年春千代丸本、元禄元（一六八八）年本、元禄四（一四九二）年本、享和二（一八〇二）年『反故雄』本（大谷大学図書館蔵）、および『反故雄』本（東大寺図書館蔵）等々があり、わけても永享三年延営本は原本成立後わずかに九十四年目の写本であるため文体もオリジナルで、最古最善の写本としてきわめて価値高く、また「大仏殿絵詞目録 上・中・下」も本系統の『反故』本に発するなど注目すべき異色ぶりを呈する。これに対する応永二十一年平康藤本に由来する系統二のものには、室

町末期の髪字A本(東大寺図書館蔵)、江戸中期の髪字C本(東大寺図書館蔵)、明治以降の髪字本(大谷大学図書館蔵)、明応二(一四九三)年兼意本、明暦二(一六五六)年B本(架蔵)、東大寺総持院本、享保十一(一七二六)年寛泉本、延享五(一七四八)年光戒本(東大寺図書館蔵)山田善光寺本・天保十五(一八四四)年、樂山本(多和文庫蔵)の各本があり、いずれ系統一に劣らぬ流布ぶりを示している。特色としては応永二十四(一四一七)年九月足利義持によって行われた東大寺大仏塗金に関する記録と和歌が付されることと、十卷ずつを上・下に分巻明記す

ること、ことに塗金の記事はその史実を直接見聞した人物によって書かれている点で貴重な史料となるのである。また髪字A本は延管本にづく権威ある古写本としてこれまた価値あるものといえよう。
『東大寺縁起絵詞』にはこのほかどちらの系統に所属するのか不分明な本も若干あるので、それらをあわせると中世近世においては意想外に流布していたことがしられ、これが忘れられるのはむしろ近代に入ってから之感が深いようである。最末に諸本の系統樹を掲げ本稿の結びとしたい。

『東大寺縁起絵詞』諸本系統樹
(太字は現存本)



目 録

凡 例

一、本目録は『東大寺縁起絵詞』全二十卷百七十段のそれで、大谷大学図書館蔵の『反故雄』と東大寺図書館蔵の『反故堆』を底本とする。

一、底本の目録名は「大仏殿絵詞目録上・中・下」となっており、上は第一卷より第九卷までの計九卷七十三段、中は第十卷より第十四卷までの計五卷五十三段、下は第十五卷より第二十卷までの計六卷四十四段で上・下が『反故雄』、中が『反故堆』にもとづいている。

一、底本の宛字・衍字・誤字・脱字等はそのまま温存したが、段落は正確を保しがたい箇所があるので、新たに通段と各巻段を算用数字で明示した。

一、通段 64・65・122・130・154 の目録は底本に欠脱するも私に補い（ ）に入れた。

一、各項下の数字は、翻刻本文の頁数である。

大仏殿絵詞之目録^(一)上

第一卷

1	(1)	東大寺起之事	八宗当寺ヨリ日域弘事	上・一才
2	(2)	聖武天皇前生事		上・三ウ
3	(3)	大伴屋棲連公事		上・四才
4	(4)	平郡之翁九事		上・五才

『東大寺縁起絵詞』の成立と諸本

第二卷

5	(1)	良弁僧正生国之事	上・五才
6	(2)	金鷲仙人之事	上・五ウ
7	(3)	聖武帝仙人菴行幸事	上・六才
8	(4)	行基伊勢參詣事	上・六才
9	(5)	聖武帝知識寺行幸事	上・七才
10	(6)	大仏建立勅定事	上・七ウ
11	(7)	金鐘寺建立之事并諸宗祖匠当寺本所事	上・八才
12	(8)	八幡大菩薩託宣事	上・九ウ
13	(9)	大神宮勅使之事	上・九ウ

第三卷

14	(1)	大仏殿營造之事	上・十才
15	(2)	久米仙人之事	上・十才
16	(3)	造営之始寄特事	上・十ウ
17	(4)	流岡山之事	上・十一才
18	(5)	良弁辛国争之事	上・十一才
19	(6)	天狗之社建事	上・十二才
20	(7)	千手院河之流事	上・十二才
21	(8)	良弁石山寺建立事	上・十二ウ
22	(9)	下野国金崩之事	上・十三才

第四卷

23 (1) 陸奥国ヨリ始金ヲ奉事

上・十三ウ

40 (1) 大講堂ニテ一万僧供養事

上・二十三オ

24 (2) 美濃国雄綱^{ヲフシ}寺事

上・十四オ

41 (2) 聖武^{イマヤ}童陵於築給事

上・二十三ウ

25 (3) 大仏奉鎔事

上・十四ウ

42 (3) 摂津国河辺郡於大仏寺領之事

上・二十四オ

26 (4) 宇佐宮ヨリ八幡勸請事

上・十五オ

43 (4) 実忠和尚之事

上・二十四ウ

并駟^{イマヤ}客門因縁之事 鼓坂因縁之起事

第五卷

27 (1) 諸国ヨリ奴婢大仏ニ施入事并樂人大路ニ居事

上・十六オ

44 (5) 大仏材木引牛吼事

上・二十五オ

28 (2) 波羅門大唐ニ渡事

上・十六ウ

45 (6) 皇后京法華寺立事

上・二十五ウ

29 (3) 波羅門来朝之事

上・十七オ

46 (7) 東南院経蔵之事

上・二十六オ

30 (4) 百歳老翁二人事

上・十八オ

47 (8) 大仏殿第二度供養事

上・二十六オ

31 (5) 菅原寺之起事

上・十八ウ

48 (9) 紫磨金院建立事

上・二十六オ

32 (6) 大仏殿洪鐘鎔事

上・十九オ

49 (10) 中門之峰出事

上・二十六ウ

33 (7) 大仏開眼供養事

上・十九オ

50 (1) 実忠和尚笠置之竜宮ニ入事

上・二十七オ

第六卷

34 (1) 仏哲和尚菩薩倍呂拔頭寺舞ヲ伝事

上・二十ウ

51 (2) 二月堂勤行之事

上・二十七ウ

35 (2) 五百羅漢工匠ニ化事

上・二十一オ

52 (3) 神名帳ヲ読テ神祇勸請事

上・二十八オ

36 (3) 鯖壳翁導師事

上・二十一ウ

53 (4) 天狗集リ行法勤事

上・二十八ウ

37 (4) 天照皇太神宮窺神ト成テ奇瑞顯給事

上・二十二オ

54 (5) 同観音ヲ信奉往生スル事

上・二十九オ

38 (5) 良弁僧正母良弁尋事

上・二十二オ

55 (6) 同依靈驗観音盜取事

上・二十九ウ

39 (6) 富墓之宮之御事

上・二十二ウ

56 (7) 同堂過去帳ヲ談上ル事

上・二十九ウ

第七卷

57 (8) 同堂香水之事

上・三十オ

58 (9) 香水ヲ吞病立所愈事

上・三十ウ

59 (10) 治承年堂炎上なき事

上・三十一オ

第八卷

60 (11) 練行衆之粥ヲ喰瘡出事 上・三十一ウ
61 (12) 観音領地者不信事 上・三十二オ

第九卷

62 (1) 竜興寺鑒真和尚事 上・三十二ウ
63 (2) 鑒真日本ニ渡時弟子留事 上・三十三オ
64 (3) (亀、舍利を負ひ、和尚に奉る事) 上・三十三ウ
65 (4) (和尚、本国に吹き返され明州の青王寺に住す事) 上・三十三ウ
66 (5) 和尚惡風逢本国帰事 上・三十四オ
67 (6) 戒壇之起之事 上・三十四ウ
68 (7) 鑒真重而日本来事 上・三十五オ
69 (8) 和尚ヲ真偽和尚と云事 上・三十六オ
70 (9) 和尚戒壇ヲ築給事并戒法始弘行事 上・三十六ウ
71 (10) 戒壇院供養之事 上・三十七ウ
72 (11) 剃髮僧尼寺之軌則稟事 上・三十八オ
73 (12) 法皇受戒之翌日食堂ニ御幸之事 上・三十九オ
并中之大門御拝之岡之事

大仏殿絵詞目錄中

第十卷

74 (1) 叡山円仁東大寺戒壇ニテ比丘戒ヲ受事 上・四十オ
藥師寺常詮此壇之土請乞夏

75 (2) 善無畏三藏本朝ニ来東山ニ居住之事 上・四十ウ
76 (3) 空海東大寺戒壇院ノ具足戒受事 上・四十一オ
77 (4) 空海大仏之宝前ニテ誓願夏并久米道場之経 上・四十一ウ
78 (5) 空海八幡大井奉拜夏并真影ヲ奉写事 上・四十二オ
79 (6) 空海入唐之夏 上・四十二ウ
80 (7) 同久米東塔院住給夏 上・四十三オ
81 (8) 空海ニ東大寺別当職ヲ給夏并深井坊因縁 上・四十三ウ
并空海門弟此戒壇ニテ受戒可受事
82 (9) 空海於東大寺灌頂道場建立之夏 上・四十四ウ
83 (10) 南院ニ金光明四天王護国之寺之額ヲ掛給事 上・四十五オ
84 (11) 同宗之長官ニ備人当寺別当補夏 上・四十五ウ
85 (12) 般若心経秘釈ヲ可奉由シ被下勅定事 上・四十六オ
86 (13) 高野西禪院明寂上人真言院ニ居住夏 上・四十六ウ
87 (14) 治承之回祿ニ南院炎上并重源造立夏 上・四十七オ
88 (15) 大勧進聖守上人二度真言院建立之夏 上・四十七ウ
第十一卷

89 (1) 齋衡二年大仏御頭落給事并修複事 下・一オ
90 (2) 西室延喜講師大聖文殊奉逢事 下・二オ
91 (3) 解除会之事 下・二ウ
92 (4) 大講堂三面之僧坊炎上之事 下・三オ
93 (5) 執金剛神之前ニ七大寺之諸僧祈請之夏 下・三ウ

第十二卷

94	(1)	三論宗之夏	下・四ウ
95	(2)	聖武帝此宗崇給事	下・五ウ
96	(3)	欽明帝時始百濟国ヨリ仏法ヲ伝事	下・六オ
97	(4)	勤操ヲ被召定官於事并律師願曉別当補夏	下・七オ
98	(5)	聖宝僧正之夏	下・八オ
99	(6)	聖宝西室ニ居住事	下・八ウ
100	(7)	尊師聖宝東室住居之事并官符被下事	下・九オ
101	(8)	聖宝賀茂祭之日大路ヲ渡事	下・九ウ
102	(9)	上座聖宝之勸ニ入事	下・十ウ
103	(10)	尊師聖寶寄特アル事并醍醐峯開事	下・十ウ
第十三卷			
104	(1)	一乗菩提之両峯之事并役行者之夏	下・十二オ
105	(2)	聖宝龜之強力ヲタメス事	下・十三オ
106	(3)	真如法親王修理東大寺大仏司大法師位被受	下・十三オ
107	(4)	虚空藏寺之事	下・十三ウ
108	(5)	名香積寺之事并東南院ヲ建立之夏	下・十四オ
109	(6)	勸賢七大寺惣檢校夏	下・十五オ
110	(7)	中之嶋池ヲ築給事	下・十六オ
111	(8)	尊師普明寺ニ於テ寂ス并宝龜ヲ立事	下・十六ウ
112	(9)	同尊師延徹ニ如意ヲ伝給夏	下・十七オ

113	(10)	白川院高野臨幸時以東南院為行宮事	下・十八オ
114	(11)	慶信院覺樹僧都之事	下・十八ウ
115	(12)	妙音寺治承回祿ニ炎上并觀音像之夏	下・十九オ
116	(13)	根本院主坊大經藏治承炎上ニ免事	下・十九ウ
117	(14)	建久供養ニ頼朝東南院寄宿之夏	下・二十オ
第十四卷			
118	(1)	尊勝院濫觴之夏	下・二十ウ
119	(2)	同院嚴宗之根本夏	下・二十一オ
120	(3)	法藏僧都室事	下・二十一ウ
121	(4)	閻王法藏敬唄事	下・二十二オ
122	(5)	(法藏僧都、閻魔王宮に參り地獄で母に会ふ事)	下・二十三オ
123	(6)	法藏法華經頓写之事	下・二十三ウ
124	(7)	同僧都梵天帝釈之請預事	下・二十四オ
125	(8)	信源得業事	下・二十四オ
126	(9)	仏名講經講セラル夏	下・二十五オ
大仏殿繪詞目錄下			
第十五卷			
127	(1)	大仏広目天之前ニテ雨越祈事	下・二十六オ
128	(2)	盧舎那像結縁し奉る人三惡道ヲ免事	下・二十六オ
129	(3)	伊賀国男大仏殿丹来公役ヲ勤事	下・二十六ウ

130 (4) (同じき男蘇生して、妻女に語る事)

131 (5) 当寺華嚴宗僧疾病免事

132 (6) 能恵得業事 大般若經供養事

133 (7) 八幡之御領妨志るし有事

134 (8) 重源上人湛慶宿所ニ行事

135 (9) 重源上人理真已講と物語之事

第十六卷

136 (1) 重衡南都発向之事

137 (2) 諸寺杜炎上

138 (3) 入道淨海熱病受事

139 (4) 頼朝御書之事

140 (5) 重源上人諸国奉加事

第十七卷

141 (1) 平六左衛門尉時忠事

142 (2) 宋陳和卿事

143 (3) 雷神大仏殿ニ落事

144 (4) 伊勢国_{ヨリ}水銀献事

145 (5) 大仏殿開眼供養事并寄瑞之事

146 (6) 御供養之後大衆延年舞事

147 (7) 重源大神宮詣宝珠越得事

第十八卷

148 (1) 重源宋人陳和卿周防国杣入事

149 (2) 周防国杣山之毒蛇去事

150 (3) 大仏傾給事并建久法皇土ヲ運給事

151 (4) 大仏殿材木杣出須事

152 (5) 重源周防国之殺生ヲ留る事

153 (6) 材木引時宗盛可牛自然来事

154 (7) (大仏殿四天王像の御衣木、増長天と化す事)

第十九卷

155 (1) 建久元年大仏母屋之柱二本始立事

156 (2) 上棟後白川法皇御幸事

157 (3) 同六年三月十日供養事

158 (4) 法皇勅書之趣之事 供養之結縁ニ被引皆浄土ニ生る事

159 (5) 陳和卿頼朝被召事

160 (6) 同頼朝被送ニ金銀寺_(_{イニ})

161 (7) 貞慶上人重源上人夢合之事

162 (8) 浄土堂仏舍利之事

第二十卷

163 (1) 四天王供養之事

164 (2) 後鳥羽院東南院御幸

165 (3) 晦日御供養の事

166	(4)	仁和寺鳴滝之住僧顯俊事	下・四十四ウ
167	(5)	造寺長官左大弁行隆事	下・四十五オ
168	(6)	貞永元年東塔雷火之事	下・四十六ウ
169	(7)	東大寺八幡託宣之事	下・四十六ウ
170	(8)	北京慶盛といふ僧之事	下・四十七ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

凡 例

本文は、故筒井英俊師蔵『東大寺縁起絵詞』の全文の翻刻である。翻刻は共同研究者の小山正文がかつて筒井師の許可を得て撮影した紙焼き写真によって行った。翻刻にあたっては以下の方針に従った。

一、本文一行を各一行にあて翻刻した。

一、用字は可能なかぎり現態に従った。基本的には通行の字体に従ったが、通行体が正字体と著しく異なっているものについては、用いられている字体にしたがった。誤用、衍字、脱字などがある場合もそのままとし、別にその旨を示さなかった。

片仮名の複合字、ノリシテ、フリコト、玉フリタマフなどはそのままとした。

一、片仮名の大きさについては、本文中央に書かれた比較的大きなものと、行内右寄せに書かれた小字のもの、解題に記した後筆と思しきものと等大の行外の振り仮名、送り仮名とがある。私に判断して、行内の二種類と行外のそれとにわけて示した。

一、本文に施された朱点、読点はこれを略したが、合点は残した。

一、底本には、虫損等で判読不能の箇所が存する。その場合 で示し、興福寺蔵本によって判読できるものについては、その中に文字を入れて示した。

一、本文欄外の「第一巻」「上・一オ」等はそれぞれ当該の本文が原文の第何巻目であり、各冊の第何丁目の表または裏であることを示したものである。

一、本文各段上の算用数字は、目録に示した通番である。(一)に入れているのは、底本では段落にわけられていないが第二系統の本によって段落が示されているところである。

一、本文中(一)に入れた文字は底本には絵の指示がなく、第二系統の本によって補なったものである。

東大寺縁起繪詞

第一卷

1
夫南閭浮提大日本國惣國分寺東大寺ハ四

聖同心ノ草創三代勅願ノ花界也一十六丈金

容霞ノ峙ノ耀ノ數間重閣ノ月殿雲ヲ分テ聳タリ本

願皇帝ハ救世觀音ノ一化也普門ノ功德ヲ開テ微願

晨昏ニ廻知識行基ハ。覺母ノ文殊再誕也權扉

應用ヨリ出テ含識ヲ迦通ニ導菩提僧正ノ普賢

蒼波ヲ渡リテ蓮眼ヲ開良弁僧正ノ弥勒タル金光

放テ玉牀ヲ照今此四聖蓋是花藏男會四行

薩埵靈山淨土上足并也又供養ノ講師隆尊ハ

清涼院

實英

上冊 表紙

上表

第一卷

上二・オ

第一卷

上・一ウ

施无畏者ノ垂跡 吳朝ノ戒師鑒真。増正。住ノ薩
埵也化現跡ノ叟カ講匠ト成シ花文ヲ春風開瘳
瘵ノ賤男カ聖王ヲ礼セシ梵名ヲ夏日ニ唱キ宇佐ノ尊神
自託擁護ノ和光ヲ耀シ補陀ノ大聖ハ新来掲焉利
益ヲ施ス天人ハ花ヲ散シ地神金ヲ出ス或ハ五百巧匠ハ三明
羅漢也假ニ僧繇ノ形ヲ改メ。数万ノ役夫ハ八埏ノ冥衆
也正ク俗案ノ質ヲ示ス或ハ仙人柱ヲ飛ス有化牛材
運有キ天照大神ハ厨院ニ顕テ僧食ノ生熟ヲ教ヘ地祇
明神ハ膳厨ニ誓テ塩梅ノ浅深ヲハカリキ則伊勢大神
宮ノ御本地ヲ顕テ奉テ朝家取第一ノ護国寺トスル
故也則中尊遮那脇士観音虚空蔵ノ三尊ハ

第一卷

二二四

上・二オ

天照太神相殿兒屋根太王三所也日本太祖
本地ヲ以テ惣國分寺ノ本仏トス叙襟コトニ深故アル
者敗因茲嘉瑞誠多靈感非一抑本願聖武
天皇金銅銘云以二代ノ国王一為我寺檀越一若我寺
興復天下興復若我寺衰弊天下衰弊復誓
其後代有不當之主邪賊之臣一若犯若破隨而
不レ行者是人必得下破ニ辱十方三世諸佛并一切ノ賢
聖一之罪ト終當下墮ニ大地獄無數劫中一永无出離上
十方一切諸天梵王護塔大善神王及普天率土
有勢无勢天神地祇七庙尊靈并佐命立功
大臣將軍靈共起ニ大禍一威子孫一若不犯一觸敬勤

永行 者世々累福一終隆ニ子孫共出ニ聖城一早登ニ覺岸ニ

云万機理乱四海ノ安危此寺ノ興衰ニヨリ今生ノ禍

福來世ノ昇沈偏○人ノ信毀ムクニ後葉ヲテラス龜鏡

□柑ライサムル風俗也吾朝惣國分寺トノ金光明

四天王護國之寺ナツク尤故アル者歟ニ明典籍

漢土ヨリ東大傳ヘ八宗ノ真文ハ當寺ヨリ日域ニ弘ム

源誠ニ此砌ハ法水ノ教○禪林ノ翹楚ナリ凡厥堂宇ノ

建立ミナ冥顯ニカタトリ尊傷ノ安置何レモ國家ノ標

相也一朝神祇祲柱ヲ分テ驚衛ヲナシ八幡大井瑞籬

シメテ鎮護ライタス普賢无盡ノ行ヲ修セサルニ自花藏ノ

宝刹ニマウテ文殊大智ノ覺ヲ開カサルニ親リ遮那ノ境

第一卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・二ウ

界ヲミル眼ヲアケテ瞻仰スレハ忽十惡ノ業網ヲダチ頭ヲ但テ

泰敬スレハ永三途ノ苦輪ヲハナル諸聖合應ノ力アラハ我等

爭此大利預ルヘキ罪霜ヲモキ輩ハ聖容ヲ海外ノ岳思

執雲深類ハ知見ヲ臺上ノ依正ニヘタツ隠顯時ニカワリ

大小人随フ感應マチノ見テ舊記誠シケレハ適

万水ノ一滴ヲ汲テ露黙ラウツシ僅ニ九牛ノ一毛ヲ取テ

筆端ニ顯ス只記録ニ任テ言葉ヲカサルニアラス八音皆

法身ノ說ナレハ万善同佛界ニ歸ス童子探畫ノ遊終覺

路ニ趣ク緇素見聞ノ戲ノ果海ニ至ル縁トセンサテ人王四

瑞十五代天聖國押開豊櫻彦命亦ハ勝宝感神

聖武天皇ト申ス此御門先ノ世ニ流沙ノ渡シ守ナリシ時花

第一卷

二二五

上・三オ

第一卷

上三・ウ

第一卷

上・四オ

敵ノ良弁僧正前生ニ晨旦ヨリ仏法ヲ求カタメ舎

衛國へ趣流沙ヲ渡シトスルニ船ノ功賃ナクテ空日月經

船師求法志ヲ哀テ彼僧ヲ渡シ其時誓テ曰船師ハ此

善因ニムクヒテ一國ノ王位ニ備ルヘシ我ハ同ク其國ニ生テ師

檀ト成テ大伽藍ヲ立テ、仏法ヲ弘メ衆生ヲ渡スヘシト契

侍ヘリキ

第一給アルヘシ

2

推古天皇治十二年甲子八月上宮太子靈夢ヲ感給

桑ノ造川勝等ヲ率テ楓野ニ御遊行アリシ時泉川北ノ邊

宿シ給其時左右ニカタリ給ク我夢ノ後二百五十年ニ一ノ

尺氏有テ道ヲ修行シ寺ヲ此地ニ立ヘシ彼釈氏我後

3

推古天皇卅三年冬十二月八日太伴屋樓連公ト云

者死ノ異香芬馥セリ七日ハ是ヲ置テ讚詠スヘキ由勅定

クタサレキ然ニ三日アリテ蘇生ノ曰五色ノ雲アリキ虹立渡

似タリ夫ニ付テ雲ヲ分テ行ニ香ハシキ事名香ヲ焼カ如道

邊ニ黄金ノ山アリ甕シ給シ聖德太子ト共ニ峯ニ登ル其

第二給可有

聖字アルヘシトナン聖德太子聖武天皇聖宝僧正コレ也

王ト成テ南ノ岡ニ精舎ヲ立テ常ニ此國ニ生テ仏法ヲ弘メ三

事兼テ示給ケリ又同天皇治廿五年九月聖德

身ナルヘシトナン是則聖武天皇トノ當寺ヲ造リ給ハン

太子御遊行ノ時佐保川ノ北ニ立テ誓ヒ給ハク我來世ニ帝

峯ニ一ノ比丘アリ太子敬礼ノ曰是東宮ノ童也八日

鉛鋒ニアフヘシ願ハ仙樂ヲ服セント比丘自環玉一ヲ取テ是ヲ飲

奉ル其時太子南无妙德菩薩ト唱ヘ給事三度又

太子ノ給汝速ニ家ニカヘレ我モ宮ニ歸リテ仏ヲ造ラント示

給此仰ヲ聞テ歸侍リト云フ八日ヲ經テ鉛鋒ニ逢フヘシ

ト云フハ入鹿カ乱ニアタレリ八日ト云ハ八年也一玉ヲ飲

云ハ難ヲ免ル藥也金山ト云ハ五臺山也比丘ヲ妙

徳ト云ハ行基并文殊是也東宮ト云ハ日本国也

宮ニ返テ仏ヲ造ラント云ハ聖徳太子又聖武天皇ト

生テ大仏ヲ造給フ也

第三繪有ヘシ

第二卷

永享三年延宮本「東大寺縁起繪詞」翻刻

上・四ウ

4 舒明天皇ノ御宇平郡ノ翁丸ト云フ一人ノ老人聖

徳太子ニ奉仕セシ人也受病ニ死門ニ入ル一日ヲ經テ後

蘇生ノ曰ク我唐土ノ五臺山ヘ詣タリツルニ太子彼山ニ

ヲワシマシテ云我又日本ニ歸テ大伽藍ヲ立ント思フ汝早ク

本國ニ還テ相待ヘシトナン凡流沙ノ契ト云太子在世御時

并ニ薨御ノ後ト云度々告示シ給ヒ終ニ无二ノ靈像ヲ治

鑄シ給ヘル事ヲホロケノ御願ニアラザリケリ

第四繪有ヘシ

第二卷

太郎大夫時忠也云々 重ニテ無ト 高野誠蓮院 相模國人ニアト也

5

花藏ノ良弁僧正ハ相模國大隅郡漆窪ト云可ノ漆

部氏人也着服セントテ母ノ夢ニ一人ノ沙門来テ向居ルト

第二卷

上・五オ

第二卷

上・五ウ

見ヘケリ^{ミヘケリ}持統天皇治三年己^{ミチツノミチノ}誕生^{タマヒナレ}ス嬰兒ノ^{オウゴノ}時金色ノ^{トキコニシキ}

驚取^{オドロキ}テ雲ヲ^{クモヲ}凄^{シビ}キ西ヲ^{ニシヲ}指^{サシ}テ飛去^{トビユク}ニキ

第一繪有ヘシ

6

當寺ノ^{トウジノ}昔深山ナリシ^{マカシニシ}時彼鷲大ナル^{トキカノワシヲ、イ}杉ノウツホナル中ニ其^{スギノウツホナルナカニミ}

子ヲ^{コヲ}置^{オキ}テ養^{ヤシ}フ年月ヲ^{トシノフ}經^{フル}ル程ニ^{ホトニ}良人ト^{ヤ、ヒト}成^{ナツ}リテ木ノ下ニ^{キノノカミ}

草ノ^{クサノ}庵ヲ^{イナリ}結^{ムス}テ住^{スミ}テ其名ヲ^{ソノナ}金鷲仙人ト^{キンリウセンシ}云^{イフ}執金寸神ノ^{シツキンサンジン}

像^{ゾウ}ト^ト本尊^{ホンズン}ト^ト花嚴經ヲ^{ケガンキョウ}誦^{トクシユ}誦ス側^{カタワラ}ナル石ニ上^{イシニノボ}リテ王城^{オウシヤウ}

向^{ムカヒ}ヒツ、金輪聖王天長地久ト^{キンリンセイオウテンチョウヂク}唱^{ナツ}フ其聲遙ニ^{ソノコエハルカ}寂聞^{エイブン}

達^{タツ}ス紫雲之空ニ^{シユンノソラニ}聳^{ソビエ}ク金色光神像^{キンシキハカリシゾウ}躍^{ノボ}リ差^{サシ}テ皇^{クワウ}

居^イテ照^{アサ}ス天皇恠^{オホアヤシキ}給^{タマヒ}侍臣驚^{シヤウジンオドロキ}テカシコヘ勅使^{チョクシ}遣^{ツカサ}ハサル御

使^シ行^イテ委^{クハシ}ク仙人ト^{センシ}問答^{モンタウ}シテ其有様ヲ^{ソノアタリ}奏^{ソウ}シ侍^{ヘシ}リキ

第二卷

上・六オ

第二繪有ヘシ

聖武天皇ノ^{セイムテノ}幸^{ユキ}有^{アル}テ仙人ニ^{センシニ}其故ヲ^{ソノユヱ}問^{トイ}給^{タマフ}フニ^ニ流沙契ヲ^{リウサケヲ}

申^{マウシ}宣^{ノボ}テ此所ハ^{コノトコロハ}靈地也伽藍ヲ^{レイチナリカラン}建^{タテ}テ給^{タマフ}ヘト奏^{ソウ}シ天皇宿生ノ^{オウシユクシヤウ}

契ヲ^{ケヲ}思^{オモ}食出^{シキデ}テツ、一ツ御與ニ^{ミコニ}セテ還^{クハシ}御^{ミコ}。後仙人ノ^{ノチノセンシ}出家ヲ^{シュツガ}

進^{スベ}メ給^{タマフ}ヘリ流沙ノ^{リウサ}契ヲ^{ケヲ}能^{ヨク}ク^ク弁^{ワキマ}ヘ又鷲ニ^{ワシニ}被養^{ヤシワレラル}一^{ヒト}故ニ^{ユヱ}諸ノ^{モロモロ}鳥類ノ^{チウリ}

轉^{ウマツル}ヲ聞^{キコメ}知^チテ鳥ト^{トリ}物ヲ^{モノ}語^{カタリ}リ云^{イフ}フ此故ニ^{コノユヱ}其名ヲ^{ソノナ}良弁ト^{リョウベン}ソ名ケ^{ナツ}

給^{タマフ}ケル彼仙人ノ^{カノセンシ}俗服ハ^{ゾクフク}尊勝院ノ^{ズンシヤウイン}經藏ニ^{キヤウゾウニ}有^{アル}リ

第三繪有ヘシ

行基并^{キヤウキナヒ}聖武天皇ニ^{セイムテノミカドニ}奏^{ソウ}申^{マウシ}云^{イフ}非神明御計ニ^{ヒシヤムミオホケツニ}此御願ヲ^{コノミカドノカネ}

難^{トク}遂^{タツ}早天照大神ニ^{ハヤテニテミコトノヲ}參^{マヒリ}テ祈禱^{イノチ}ヲ致^{イダス}ヘシトナン伊勢ノ^{イセノ}國^{クニ}

五十原ノ^{イツハラノ}御社^{ミヤ}遊^{アソビ}リ南^{ミナミ}西^{ニシ}ノ木ノ下ニ^{キノノカミ}居^イラトメテ七日七夜^{ニチノナナヨ}

祈念ス神ハ往古ノ如来衆生利益ノ為ニ跡ヲ此土ニ垂レ

給ヘリ我行基ハ又尺迦分身ノ御弟子トシテ化度利

生ノ為ニ七度此界ニ生ス生身ノ如来ニ別奉ルト云ヘトモ

未離ニ遺身ノ舍利ニ可持御舍利一粒ヲ奉ル願ハ納受

垂テ可願ヲ成就シ給ヘト申天照太神示現シヲハ

シマシテ云

實相真如之日輪照ニ生死長夜之闇一本有常住之月輪

掃ニ無明煩惱之空ニ我遇ニ難遇之大願一於闇夜如得ニ之燈

亦受難受之宝珠一於度海一如得之船一造聖武大仏殿一故

慶豐太神宮之事善哉々々為善哉神妙々々々自珞者

吾垂跡地神靈富相應可安一志飯高施福衆生ニ故云

第二卷

上・六ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

行基并夢サメテ歡喜ノ泪ヲ流シ託宣ニ任テ飯高郡ノ

地中ニ仏舍利ヲ納奉テ都ヘ帰リ此由ヲ奏ス奥州行テ砂

金ヲ得勢州ニ至テハ水金ヲ取攝州ニシテハ赤銅ヲ求メ

タル皆神明冥感也

第四繪有ヘシ

9

聖武天皇良弁ノ申勸ニ依テ大伽藍建立ノ御願ヲ發シ

古佛遮那ノ靈像ヲ叙覽ノ為メ河内國大縣郡知識寺

雅古天皇御願金銅八丈盧舍那今云太平寺へ行幸成ツ彼盧舍那仏ヲ拜給テ

其像ヲ本ニテ大仏ヲ可奉鑄ニ之由勅定有テ知識ノ

宣ヲ天下ニ可被下一叙慮ヲ廻シ給キ

第五繪有ヘシ

第二卷

上・七オ

第二卷

上・七ウ

10

當寺造立ノ為行基ニ宣ヲ被下ニ其勅書云

勅朕以薄德忝承大位志存兼濟一勤撫人物

雖下率土之濱已霑中仁怒上而普天之下未給中法

恩誠欲下賴三宝之威靈乾坤相承修万代之福

業一動植咸榮上爰以天平十五年歲次癸未

十月十五日發井大願一奉造二虛。仏ノ金銅像一

軀盡國銅而鑄像一削大山以構堂一廣及法界。

朕知識一遂使下同蒙二利益一其到中井上夫有天下之

富者朕也有二天下之勢一者朕也以此富勢一造二

彼尊像一事也易成二正也難至一但恐徒有勞人

豫无能感諸知識發至誠心各食招福宣每

第二卷

上・八オ

日三拜虛遮那仏自當存念各造虛舍那仏ノ

像ヲ如更有人願持二一校草一合土二造下像上者勿

禁勿障一同進百姓二携令加造云行基并從

承二勅宣一知識輩材木五万一千百九十人金

三十七万二千七十五人役夫一百六十六万五千七

十一人此外雖二事繁不違二羅縵二從其以來

造二東大寺一勸進職ヲヲカル則神龜元年甲子大

佛殿木作被始

第六繪有ヘシ

11

大伽藍建立為祈祷天平五年癸酉良弁僧正勅

金鐘寺亦云金光寺被立不空羂索觀音并

執金寸神像良弁童子時
化現本尊ヲ安置シテ御願ヲ祈

良弁花嚴ケ一宗乘レ弘通セト誓願ヲ發ス處トコロニ

夢中ニ好相ヲ得タリ。紫モ衣モ青裙モ僧東方ノ空ゾラヨリ

下テ汝ナニチコノ此一乘シツ講演カウエンセント思ヲモヘハ嚴智師コンチシヲ囑クツセヨト

云フ夢覺ユメサメテ元興寺クワンコウジノ嚴智コンチノ許行モトニユイテ頂礼チャウライ

囑請クツテイス。嚴智嚴智云我ハ名ナハ嚴智コンチナリト云ヘトモ心アハスハ非コ嚴智コニ花

嚴香象大師ノ弟子シシ新羅シンラノ審祥シンシャウ大和尚タイワシヤウ是嚴コレ

智也チナリト云フ天平十二年庚辰十二月十八日聖武天皇

四十御賀カノシシヤウシニ彼審祥シヤウシ師シヲ請アツメ高僧コンゴウシニヲ集ツテ金鐘コンネウ寺シ

花嚴經ケコレキヤウ講カウセシ時トキ此コノ雲從ウンソウテ祥瑞シヤウスイヲ顯アラハシキ敬感エイカンノ

餘アツリ花嚴ハツノ別供ベツクヲ施入セニウシ給タマイシカハ有智高德ウチカウトクノ徒トタエス

第二卷

上・八ウ

五教圓宗ノ奥旨ヲ弘弘メメテ只花嚴ノ一宗ノ異朝ヨリ

始ハシメテ此寺コノニ傳フタヘルノミニ非アラス行基キ并ナニ良弁ヲ僧正フナシラ同シ法

相宗ヲ此砌コノミキリニ弘ヒロメメ晨旦シンタンノ鑒真カンシン和尚ワシヤウハ天台タイナニ并ヒナリ律

將シク宗ヲ請シヤウライ來ホシテセリ本朝ホンテウノ弘法カウ大師ハ秘密ヒミツ真言ヲ教ケウ

法ヲ此寺コノニ傳持デンチノ三密ミツ壇場タンヤウヲ建立コンリキス花嚴ケコレノ長載サイハ

因明インメイ立量リツリヤウノ軌則キソクヲ此寺コノニ開ヒラキツク俱舍クセヤウ成實テイジツノ二宗ニ

普報フハウ賢融ケンユウノ兩德リウタク相承シャウショウス此コノ諸宗シヨノ祖匠ソシヤウ皆當ミナタウ

寺ヲ本町ホンチヨトス三論サンロン一宗ハ弘法サイレウ寂初シヨノ傳來テイニテ有アリシ

程ホトニ余ヨリ寺ニ元モトハ習學シヨウガクセシカトモ專寺モウニ被移セリテ後ノチハ

早ハヤク宗シヨノ本町ホンチヨト被定サタメラルニ八宗ハツカク兼學ケンガクノ趣ソム此コノ寺有アル也

第七繪可有

第二卷

上・九オ

第二卷

上・九ウ

第三卷

上・十オ

12

伽藍建立ノ事本願天皇殊ニ敬願深クノ神慮ヲ

伺給ハン為ニ勅使ヲ宇佐ノ宮ニ被立一八幡大井ノ御殿ノ

中ニ御首有テ御託宣侍。御託宣コラフマカリ。我護国家之志。如戈

鉦楯早引率國內一切神祇冥衆共吾君之

知識云

第八繪有ヘシ

13

天平十四年十一月三日同祈祷ノ為左大臣正二位

橋朝臣諸兄勅使トノ伊勢大神宮ニ参ス同十一月十

五日夜天皇御夢ニ玉女金色ノ光明ヲ放テ申云我朝

神国也最ニ神明ヲ欽仰スヘシ。大日本地ヘ盧舍那仏

也衆生此理ヲ悟テ將ニ仏法ヲ皈依スヘキ也我ハ是天

照大神則日天子也君大日如来ヲ作テ恭敬シ給ハ

我ヲ崇ナルヘシ更ニ何ノ疑カアランヤト示給ヘリキ

第九繪有ヘシ

第三卷

14、天平十七年乙酉八月廿三日天皇良弁行基相共ニ

此地ヲ撰テ大佛ノ營作ヲ始メラル此時三千八百人ヲ度ノ

出家セシメ給フ聖武天皇光明皇后。御袖ニ土ヲ

運テ自壇ヲ築給キ

第一繪可有

15、葛城山仙人名山ヲ飛廻テ吉野山ニ到時久米河

邊ニ女人衣ヲ洗其股ノ白キヲ見テ俄ニ愛欲ヲ發ノ

通力^{ツクリキ}失^{ウシナフ}テ女^メノ傍^{カタクラ}ニ落^{ワチ}ニケリ女^メ哀^{アヘレ}テ手^テ洗^{クライ}ニ乗^{ノセ}テ戴^{イダヘキ}テ

家^イニ帰^{カヘリ}ッ、隠^{カクレ}養^{シナフ}フ遂^{ツイ}ニ夫婦^{フウフ}成^{ナリ}ニケリ世^セ務^ムニ交^{マシ}テ

在地^チノ役^{ヤク}ニ随^{シツカフ}フ時^{トキ}謀^{ハカリ}事^{コト}人^{ヒト}ニ勝^{スベシ}タリケレハ村^{ムラ}人^{ヒト}賓^{ヒトモナリシテ}

刀^ト祢^ネ職^{シヨク}ニ補^フス久^ク米^メ郷^{カウ}民^{ミン}着^{シヤク}到^ト時^{トキ}前^{マヘ}仙^{セン}人^{ジン}久^ク米^メ

宿^ト祢^ネトソ書^{カキ}侍^{ヘン}ケル

第二繪有ヘシ

越前國古瀬庄戸崎、云者、牛也云々

16、當^{タカ}寺^シ造^シ營^{エイ}ノ為^{タメニ}諸^{シヨ}國^{コク}ニ勅^{チヨク}ノ人^{ヒト}夫^{ソノ}ヲ催^{モヨブ}シ牛^{ウシ}馬^{ウマ}ヲ集^{アツメ}土木^{ドム}ノ

功^{コウ}ヲ成^{ナス}ス其^{ソノ}時^{トキ}力^{リキ}土^{ツチ}變^{ヘン}化^ケノ牛^{ウシ}来^{キタ}テ材^{サイ}木^{ボク}ヲ引^{ヒク}又^{マタ}久^ク米^メ郷^{カウ}ノ

人^{ヒト}夫^{ソノ}造^シ寺^シノ行^{ユク}事^{コト}ノ許^{ヨリ}ニ到^{イタル}彼^{ソノ}造^シ寺^シ官^{カン}太^{サイ}宰^{サイ}帥^{シュ}佐^サ伯^{ハク}

宿^ト祢^ネ今^{イマ}毛^モ人^{ヒト}ヨキ相^{サウ}者^{シャ}ナリケレハ此^{コノ}刀^{タテ}祢^ネ見^ミテ汝^{ナレチ}タ、人^{ヒト}ニ非^{ナラ}ス

御^ミ願^{ガン}ヲ感^{カン}ノ權^{ケン}者^{シャ}ノ来^キレルカ此^{コノ}柱^{ハシラ}ヲ引^{ヒキ}ヘシト云^{イフ}フ仙^{セン}人^{ジン}イト

第三卷

上・十ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

恥^チタル氣^キ色^{シキ}也^{ナリ}其^{ソノ}砌^{セキ}ヲ退^ヒテ昔^{ソノ}ノ修^{シュ}行^{ギョウ}ヲ臆^{オソ}念^{ニン}テ偷^{トウ}護^ゴ

法^{ホフ}ノ天^{テン}衆^{シュウ}ヲ勸^{カン}請^{セイ}セシカハ柱^{ハシラ}忽^{トコニ}空^{カラ}ヲ飛^{トビ}テ造^{ゾウ}營^{エイ}ノ可^コ到^ト

第三繪有ヘシ

17、伊^イ賀^カ國^{コク}ヨリ材^{サイ}木^{ボク}ヲ下^シサントスルニ泉^{ミヅ}川^{カハ}ノ南^{ミナミ}三四^{シヨウ}町^{チョウ}計^{ケイ}ノ

間^{アイ}ニ大^{ダイ}ナル岩^{イハ}ヲオホヒ塞^{フサカ}テ河^{カハ}ノ流^{ナガ}レ石^{イシ}ノ下^{シタ}ヲク、リテ筏^{イカダ}モ舟^{フネ}モ

不^カ通^{ヘス}朝^{アサ}議^ギ是^{コレ}ヲ煩^{ワヅラフ}ヒシトキ時^{トキ}良^{ラウ}弁^{ベン}僧^{ソウ}正^{セイ}宣^{セン}旨^シヲ奉^{タテマテ}テ

笠^{カサ}置^キ寺^シノ千^チ手^テノ岩^{イハ}屋^ヤニ籠^{コモ}テ千^チ手^テノ法^{ホフ}ヲ行^{ユク}セシカハ

雷^{ライ}神^{ジン}下^シリテ岩^{イハ}ヲ摧^{クサ}破^ヤテ河^{カハ}ノ道^{ミチ}開^{ヒラ}ケテ筏^{イカダ}ヲ下^シス

事^{コト}无^{ナシ}煩^{ワヅラフ}ヲイナレ

第四繪有ヘシ

18、當^{タカ}寺^シ昔^{ソノ}深^{フカ}山^{サン}ナリシ時^{トキ}大^{ダイ}仏^{ブツ}殿^{デン}ノ正^{セイ}面^{メン}東^{ヒガシ}ハ良^{ラウ}弁^{ベン}僧^{ソウ}

第三卷

上・十一オ

第三卷

上・十一ウ

正ノ可領^{リヤウ}正面^{マシロシヘ}西^ヘ辛國行者進^ノ止^ニ心也而^シ天皇偏^{ヒトヘニ}

良弁^キヲ皈依^エシ給^{タマフ}テ伽藍^{カラン}ヲ立^{タテ}ント御^{マシマ}ス爰^{コニ}辛國行者

憤^{イキトリツアカク}深^コノ僧^{ソウ}ヲ皈依^{キエ}シ給^{タマフ}ハン事^{コト}驗^{ゲン}德^{トク}ニ依^{ヨス}ヘシト奏^{ソウ}ス天皇

兩人^ニヲ召^メシ向^{ムカフ}ヘラレシ時^{トキ}辛國方^{ノカタ}ヨリ劍^{ケン}ヲ飛^{トビ}シ良弁^{リョウベン}尉^ヱセント

ス良弁^{リョウベン}方^{ノカタ}ヨリ念珠^{ネンシュ}ヲ取出^{トリダシ}ツ、劍^{ケン}ヲ卷^{マク}マロハカシツ又^{マタ}辛國

行者^{ノリ}方^{ノカタ}大ナル蜂^{ヘチ}現^{アラハレ}テ良弁^{リョウベン}ヲサ、ントス又^{マタ}良弁^{リョウベン}方

大^ナ鐵鉢^{テツペツ}ヲ飛^{トビ}来^キテ蜂^{ヘチ}ヲ打^{ウチ}拂^{ハラヒ}辛國^{セム}ヲ責^{セマ}シカハ行者^{ノリ}力

彼鐵鉢^{テツペツ}中^{ナカ}ニ封入^{フウジュ}一里^{イツリ}斗^ト南^{ナン}飛^{トビ}行^{ユク}其所^{コノトコロ}鉢^{ペツ}伏^{フツ}ト云

ナクテ退^{ノソノム}ス其^{ソノ}後^{ノチ}大^{オホ}ニ怒^{イカ}テ本尊^{ホンソン}俱^ク梨^リ伽羅^カ明^{メイ}王^{オウ}

足^{アシ}ヲアワセ土^{ツチ}ノ底^{ソコ}被^フ埋^メツ、寺^{テラ}ノ為^{タメ}魔障^{マショウ}ヲ成^ナス彼道

場^{チヤウ}ノ礎^ソ石^{シキ}辛國^{シンコク}ノ塚^{ツカ}トテ大^{オホ}仏^{ブツ}殿^{テン}ノ西^セノ側^{カタヘ}ニイマダアリ

第五繪有ヘシ

第三卷

上・十二オ

19 日本國^{ニッポン}大^{オホ}天狗^{テング}集^{ツミ}テ評^{ヒョウ}定^{テイ}ノ種^{タネ}々^ニ御願^{ミガン}ヲ妨^{サマシ}ケン^トス良

弁^{ベン}僧^{ソウ}正^{セイ}咒^{ジュ}力^{リキ}降^カ伏^{フツ}セシカハ天狗^{テング}皆^{ミナ}治^チ罰^{バツ}セラレテ邪心^{ジャシン}ヲ

翻^{ヒラカヘ}シ仏法^{ブツポフ}ニ皈^キメケリ僧正^{ソウセイ}ノ前^{マヘ}ニ群^{ムラカカリ}来^キテ我等^{ワガレタチ}今^{イマ}ヨリ後^{ノチ}魔

障^{シヤウ}ヲ不^フ可^カ成^{セイ}聖^{セイ}人^{ニン}治^チ罰^{バツ}ヲユルシ給^{タマフ}ヘ永^{ナガク}當^{トウ}寺^ジノ守^{シユ}護^ゴ

神^{シン}ト成^{ナリ}ント云^{イハ}ヒシカハ僧正^{ソウセイ}是^{コレ}カ為^{タメ}ニ杜^ツヲ造^{ツク}テ与^ユフ天狗^{テング}杜^ツ云^{イハ}是^{コレ}也

第六繪有ヘシ

20 當^{トウ}寺^ジ東^{ヒガシ}ノ山^{ヤマ}ヲタムケ山^{ヤマ}ト云^{イハ}フ又^{マタ}ハツ、ヲ尾^ビ云^{イハ}ヘリ此^{コノ}山^{ヤマ}ノ底^{ソコ}

大^{オホ}蛇^{ヘビ}アリ此^{コノ}蛇^{ヘビ}若^{ニハ}出^デ行^{ユク}カハ伽藍^{カラン}モ皆^{ミナ}流^{ナレ}損^{シム}ラヘシ聖武^{セイブ}天皇

行^{ユク}幸^{カウ}アリテ彼蛇^{カノヘビ}ニ宣^{セン}命^{メイ}ヲ含^{フク}メ永^{ナガク}當^{トウ}寺^ジヲ可^{ヘシ}守^{マホル}不^フ可^カ出^デ

トテ封^{フウ}シ給^{タマフ}ケリ其^{ソノ}蛇^{ヘビ}ノ口^{クチ}ヨリ水^{ミヅ}ヲ出^デス千^チ手^テ院^{イン}河^カト云^{イハ}ス

飲^{イン}者^{シャ}心^{シン}武^ブ成^{セイ}ルト云^{イハ}ヘリ平^{ヘイ}將^{シヤウ}門^{モン}大^{オホ}矢^ヤ左^サ衛^{エイ}門^{モン}尉^ヱ致^チ

恒此哥コトコヨリ皆出タル者モノトカヤ

第七繪可有

21 大仏ノ御身ミミ可奉塗マツル一金此朝ナカリシカハ大唐ヘ尋トスルニ

八幡大井御殿ノ内ヨリ御託宣云黄金オウゴン此國コク可出由

示給シメタマフ天皇良弁ニ仰テ金峯大井ニ御祈禱精

有云彼山ハ是黄金也別テ給テ仏像ニ奉塗トナン

蔵王良弁ニ示給ハク此金ハ我進止ニアラス弥勒出世ノ時

大地ニ可被鋪ヘキ者也我ハ唯守護計也但近江國栗

本郡湖邊ニ一ノ山有リ大聖如意輪垂跡可也彼ニテ

祈ラハ必ス可出来トナン夢サメテ彼山ニ到時一人ノ翁大ナル

石ノ上ニ居テ魚イサ釣ル良弁恠テ汝ハ誰人ソヤト問給フ答テ曰

第三卷

上・十二ウ

我ハ當山地主比良明神也此哥ハ觀音跡ヲタル、

可也多ノ衆生ヲ利益スヘシト云テ失ニケリ良弁其

跡ノ石ノ上堂ヲ建テ如意輪執金寸神金剛蔵王ノ形

像ヲ安置シ如意輪ノ法ヲ修シムシテ黄金ヲ折石山寺是也

第八繪有ヘシ

22 圓浮提ノ北ニ高二十五由旬金ノ山。地蔵并彼山神

化ノ□落縣陸奥國ニ黄金ヲ出ス又同國ニ北山ト云川アリ

鞠ノ程ナル黄金流行人集テ取ントスレハ立返テ上ヘ流ル上ヲ

立切テ取トスレハ又下ヘ流猶取ントスルニ底ニ沈テ流ル強

是ヲ取トスルニ底ニ聲ノ有テ毎年ニ一度年貢

海龍王ニ奉ル金也輒人耍ニ不可侵一云此時集タル人云

第三卷

上・十三オ

第四卷

上・十三ウ

取^{トル}ントスル事宜^{セシ}旨^ミニ依^ヨテ大仏^{ダイブツ}ニ為^シ奉^{ホウ}塗^ス也全私^{ゼンシ}

其^{ソノ}時水底^{ミヅソコ}ニサテハ無力^{ムリキ}ト云^{イハ}テ後安^{ゴアン}被取^{ヒキ}ニケリ又天平十九

年十二月下野^{シモツノノクニ}國^{クニ}山崩^{ヤマクラゲ}金流出^{ナカレウツ}奏^{ソウ}今^{イマ}其^{ソノ}可^カフ金^ネ云^フ

第九繪有ヘシ

第四卷

23

天平廿一年^ヒ巳^シ陸奥^{リクオ}ノ守從五位下^{シヨウジイノ}百濟王^{ヒヤクサイノ}敬福^{キョフク}陸

奥^ノ國^{クニ}小田郡^{コタノ}郡^ノ始^{ハジメ}テ黄金九百兩^{クワンゴンニヤウ}ヲ奉^{ホウ}ル天皇我國重^{ミカドノニケル}

宝出来^{ホウイキキク}ル事^{コト}ヲ悦^{ヨロコビ}給^{タマフ}天平ノ年号^{ネンカウ}ニ勝寶^{セウホウ}二字^{ニジ}ヲ副^{ソコナ}

改元^{カイエン}アリシ時^{トキ}中納言^{ナカノリ}大伴家持^{オホトモイモトキ}哥^カヲ奉^{ホウ}リキ

皇^{スヘ}ノ御代^{ミヨ}サカエナシマナル陸奥山^{リクオノヤマ}ニ金花^{コノハナ}サク

第一繪有ヘシ

二三六

第四卷

上・十四オ

24 天平十九年^ヒ九月廿九日^{クニノヒタチ}ヨリ始^{ハジメ}テ大佛^{ダイブツ}ノ鑄形^{コウガタ}ヲ造^{ツク}リ鑄奉^{コウホウ}ル

事^{コト}七ケ度也シカト思^{オモ}フ如^{イカ}ク鑄奉^{コウホウ}ル事^{コト}不叶^{フセ}シカハ巧^{タクミ}ノ及^ヲハサルカ

復^{フタヘ}魔障^{マショウ}ニヨレルニヤト朝議^{テウギ}是^{コノ}煩^{ワザライ}能^{ヨク}鑄奉^{コウホウ}ルヘキ者^{モノ}也^{ナリ}有^ヒ

諸國^{シヨク}へ勅宣^{テウケン}ヲ被^ヒレ下^ゲシ時美濃國^{ミノクニ}英雄^{ユウユウ}總^{ソウ}ト云^{イハ}テ可^カニテ御使^{ミツリ}勅^{テウ}

定^{サダ}旨^ミヲ述^{ノボ}ルニ何程^{ナニノハカリ}仏^{ブツ}ソト人間^{ニヤウ}ケレハ小童部^{コドウブ}アマダ草薙^{クサカサ}牛^{ウシ}

飼^{カウ}ナトシテ集^{アツマ}リタリケル中^{ナカ}ニ一人小童^{コドウ}走出^{デスデ}タイサ其^{ソノ}可^カレ奉^{ホウ}

鑄^{コウ}程^{ハカリ}ノ本^{ホン}仏^{ブツ}書^{ショ}テ見^ミセントテ還^{ヘル}ナル河原^{カワハラ}へ行^{ユク}テ牛^{ウシ}ヲ追^{オウ}テ杖^{ツヱ}

砂^{イサコ}ノ上^ヘニ曳^{ヒキ}テアチコチマワリアリケルヲ見^ミル人^{ヒト}不思議^{フシギ}

事^{コト}スル者^{モノ}哉^{ナリ}思^{オモ}フケリ勅使^{テウシ}恠^{アヤシ}ミテ行^{ユク}テ見^ミニ相好^{サウコウ}田滿^{タマン}ノ

盧舍那^{ルシャナ}ノ像^{ゾウ}ヲ一町計^{イツチヤウヘカリ}ニ書滿^{カキミタマフ}ル其^{ソノ}時勅使^{テウシ}此童^{コノコ}ヲ

者^{モノ}ノ非^{アラス}ト思^{オモ}フテ相具^{アイク}シツハ上洛^{ジョウラク}ノ事^{コト}由^{ヨリ}ヲ奏聞^{ソウモン}セシカ此童^{コノコ}

朝廷ニ召テ從上ノ五位ニナサレケリ此童ノ父美濃國

雄総寺ト云寺ヲ立テ金銅千手觀音ノ像ヲ鑄

奉テ我子ノ仏ヲ鑄奉ラン事ヲ祈侍

第二繪有ヘシ

25

天平勝寶元年己十月廿四日第八度到大仏

奉レ鑄セシ時美濃國ニテ沙ノ上ニ仏像書シ童為ニ祈

鑄大會ヲ行給ト奏ス依之一万人ノ僧侶ヲ廻シ齊

會ヲ設給ヘリ是ヲ鑄奉ルニ御頭ノ銅不足ナリ何程

金ヲカ可レ加ト煩イ沙汰有ニ此童衆僧ノ香呂□

鑄ノ中ニ入能程ナルヘシト申香呂悉五百ノ鑄ノ中

ヘ投シカヘ不足ナリ餘モセヌ御願マニ奉鑄テ此鑄ノ

第四卷

上・十四ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

東方ヨリ金色ノ光遠ク指入リ帷テ之ヲ勅使ヲ遣光ノ

末ヲ尋行程ニ美濃國雄総寺ノ千手觀音ノ眉

間ヨリ此ノ光ヲ指給ヒケリ
一寸法事 三尊 四天等

第三繪有ヘシ

26

天平廿年右兵衛督藤原朝臣ヲ勅使トノ宇佐

宮ヘ啓請シ奉リシニ御殿ノ中ニ御聲有テ訖宣云我花

洛ニ跡ヲ垂テ晝夜ニ大仏ヲ礼奉ラントナンサテ天平勝

寶元年十月己參議從四位上石河朝臣手

足侍從々五位下藤原ノ魚名等ヲ御使トノ宇佐ヨリ

迎ヘ奉リ同キ年十二月庚辰平城宮梨子原宮遷

給サレハ類聚國史云八幡大井ノ御訖宣云向レ京

第四卷

上・十五オ

第四卷

上・十五ウ

為^ヲ拜^カニ大^サ仏^ツ也參^サ議^ギ從^シ四^シ位^イ上^イ石^イ河^ワ朝^ア臣^シ手^テ足^ツ待^マ從^マ

々^シ五^フ位^チ下^ヲ藤^フ原^チ朝^ア臣^シ魚^イ名^ナ等^ト以^テ為^ス迎^ケ神^シ役^ト路^ロ

次^シ諸^ノ國^シ庄^シ。發^ハ丘^ツ土^ツ一^ニ百^ニ人^ノ以^テ上^ニ前^ニ後^ニ驅^ク除^ク又^モ可^シ歷^ス

之^ノ國^ニ禁^ム斷^ス致^ス生^ニ其^ノ從^ニ人^ノ供^ニ給^ス不^レ用^ス酒^ニ肉^ニ道^ノ路^ヲ

清^キ掃^セ不^レ汚^カ穢^カ一^ニ二^ニ月^ノ遣^ハ五^ニ位^ノ十^ニ人^ノ散^ハ位^ニ廿^ニ人^ノ六^ニ衛^ノ府^ヲ

舍^ノ人^ノ各^ノ廿^ニ人^ノ迎^ハ八^ニ幡^ノ大^ニ菩^ノ薩^ノ於^ニ平^ノ郡^ニ是^ニ日^ニ入^リ京^ニ耶^ハ

於^ニ宮^ニ南^ニ梨^ノ原^ニ宮^ニ造^ル新^ニ殿^ニ以^テ神^ノ宮^ニ請^フ僧^ノ四^ノ十^ノ口^ノ悔^ス

過^ク七^ニ日^ノ云^ハ同^ニ月^ノ當^ニ寺^ニへ影^ヲ向^シ給^フ西^ニ面^ノ北^ニ門^ヨリ入^リ御^ス

加^カ様^ニ致^シ生^ツ誠^メ正^ク寺^ノへ御^ヲ影^ヲ向^シ有^シ門^ナレハニヤ轉^ス

害^{ガイ}ノ門^ノト申^ス門^ノ中^ノ坂^ニ人^ノ鼓^ヲ打^ツシカハ此^ノ所^ヲ今^ニ鼓^ス

坂^ノト云^フ此^ノ日^ニ聖^ノ武^ノ天^ノ皇^ノ并^ニ孝^ノ謙^ノ天^ノ皇^ノ光^ノ明^ノ皇^ノ后^ヲ

第五卷

上・十六オ

大^ノ佛^ノ殿^ニ兼^テ臨^リ幸^スアリ一^ニ万^ノ僧^ノ會^ニ被^レ行^ク天^ノ下^ニ泰^シ

平^ノノ文^ノ字^ノ内^ニ裏^ニニフ^リリニケ^リ此^ノ時^ニヨリ當^ニ寺^ニ跡^ヲ垂^テ

四^ノ海^ノ理^ヲ乱^ス鎮^ニ衛^ニ八^ノ宗^ノ教^ヲ法^ヲ擁^ニ護^ニシ給^フ

第四繪有ヘシ

第四繪

第五卷

27

天^ノ平^ノ勝^ノ實^ノ元^ノ年^ノ九^ノ月^ノ十^ノ七^ノ日^ニ大^ノ納^ノ言^ノ正^ノ二^ノ位^ノ藤^ノ

原^ノ仲^ノ磨^ノ勅^ヲ承^テ五^ノ畿^ノ七^ノ道^ノ諸^ノ國^ノ國^ノ等^ニ仰^テ

形^ノ容^ノ端^ノ正^ノ之^ノ奴^ノ婢^ヲ可^レ買^ニ進^ニ之^ノ由^ヲ宣^ス下^ニアリ同^ニ二^ノ年^ノ二^ノ

月^ノ廿^ニ二^ノ日^ニ太^ノ上^ノ天^ノ皇^ノ々^ノ帝^ノ皇^ノ后^ノ當^ニ寺^ニ臨^リ幸^ス有^テ一^ノ

万^ノ町^ノ水^ノ田^ノ五^ノ千^ノ烟^ノ封^ノ戸^ノ并^ニ諸^ノ國^ノ可^レ進^ニ奴^ノ婢^ニ二^ノ百^ノ人^ヲ

施入^{セニウ}シホハシマス寺家^{ウケトウ}請取^テ轉吏^{カシリ}ノ物^{モノ}ヲハ上下ノ職掌^{シヨクシヤウ}

シ良匠^{リヤウシヤウ}輩^{ノトモカラ}ヲハ造寺^{サウシ}ノ巧^{タクミトシ}舞樂^{カクノキヨク}曲^{フタウ}ヲ傳^{ツタフ}ル類^{タカクイ}ヲハ左右^{サウウ}

伶人^{レイシ}トス南大門^{ナンダウ}ノ前^{マエ}ナルニヨリテ朱雀^{シュウサク}ノ大路^{オウダウ}ト名^{ナツケ}テ彼^{カニ}

コニ被^{アカレ}シ置^{ヨリ}子^{ソク}々^{々々}相續^{ソクゾクシ}テ今^{イマ}ニ不^タレ絶^{ヘス}

第一繪有ヘシ

28

大佛供養^{オホボツクヤウ}ノ御為^{カネ}兼^{カネ}テ御請^{ヨシヤウ}定^{チヤウ}有^{アリ}キ其請^{ソノレヤウ}書^{シヨ}云^{ニイヘク}

行基大德^{キョウキ}

右奉^{ウシタメニ}ニ為^カ大佛供養^{オホボツクヤウ}一講師^{カウレ}願請^{クワンシヤウ}如件

年月日

辭書^{シシヨ}云^{ニイヘク}

沙門行基謹言

第五卷

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・十六ウ

不堪奉仕大佛會講師事

右從^{ヨリ}南天竺^{ナンテンシユ}ニ可^カ來^キ普賢菩薩願相待可^カレ被^{アカレ}ニ請用

講師者云

年月日

南天竺^{ナンテンシユ}迦毗羅衛國^{カピラセキ}婆羅門僧正^{ハシニヤカクタイ}般若提^{ハネ}ト云

人文殊師利菩薩^{ンベシ}ヲ奉^ン拜^{ハイ}一トテ天竺^{テンシユ}ヨリ大唐^{タウ}ノ五臺山^{グタイ}ヘ

上^ウル老翁^{ラウワウ}有^{アル}テ云^{シユ}文殊^{モンジ}ハ衆生^{サウシヤウ}濟度^{キタク}為^ニ耶婆提國^{ヤバタイ}

イマスト云^ハヘリ菩提^{ハチ}此告^{コノツケ}ニヨンテ日本^{ニッポン}ヘ趣^ス

第二繪有ヘシ

29
行基^{キョウキ}奏^{ソウ}曰^{イハク}天竺^{テンシユ}ノ上人^{オウジン}來^キントス行^{ユイ}テ可^カ迎^{ムカフ}□^ナン則^{スナハチ}二百

人僧^{ニナヒニシ}并^ニ治部^{チベ}文番^{モンパン}雅樂^{ヤラク}三司^{サンシ}ヲ率^{ソツ}レテ攝津國^{セツノクニ}難波津^{ナンハツ}

第五卷

上・十七オ

二三九

第五卷

上・十七ウ

行テ香ヲ焼花ヲ備海邊ニ浮テ梵僧ヲ請ス香花

凌波ヲ綾テ西ヲ指テ行ノ海上ヲ見ニ千万率都婆アリ人

恠ヲ成ノ香花船ヲ廻ノ梵僧ヲ迎ヘ奉ル南天竺婆

羅門カノ十弟子此天竺ニ婆羅門仏哲以下ヲ率

第三ノ船ニ立給ニ婆羅門。衆ノ中ヲ分テ。菩薩ノ手ヲ取テ哥ヲ

詠セシカハ又返歌有ヘシ

迦毗羅衛昔ワカレシ日ノ本ノ文殊御良アヒミツル哉

行基并返哥

靈山ノ尺迦御前契テシ真如クチセス今日ミツル哉

今此詠哥ニ尺迦ノ御前ニ契テシト侍ルハ普賢文殊ノ二苦

薩理智一双ノ脇士トノ此寺ノ。建テ本師如来ノ形像ヲ

第五卷

上・十八オ

造リテ末世ノ衆生ヲ済度セン事ヲ尺尊在世ノ時靈

山會座ニテ兼テ契置キ給ケルナリ

第三繪有ヘシ

30 爰百歳老翁二人有ケリ一人ハ生テヨリ目不見一一人ハ

生テヨリ不立足ニ共ニ物云事ナシ行基菩薩菩提

僧正ニ菩薩ト云樂ヲ傳フ聞之二人ノ翁目アキ足立テ

舞喜フ菩提僧正是ヲ見テ此二人ハ誰ソト問フ行基ノ

曰ク前世ニ忉利天ノ天人ニテ靈山ノ同聞衆ナリシ故ニ今

日聖人ヲ見奉テ舞侍也ト云婆羅門鍬石ノ香

呂五具菩提子ノ念珠十貫多羅葉ノ梵字百故

佛舍利二千粒種々ノ宝物多ク行基ニ獻ス傳天皇奉

第四繪有ヘシ

31 行基菩薩婆羅門ヲ迎都ヘ入シ時菅原寺ニ立チル寄

大倭ノ國看云翁アリ是婆羅門前世童子也

先立テ此國ニ生ル齡七十ニ及マテ不言此翁菩薩容ヲ

奉ル見ニ事ヲ聞テ菅原寺ニ行テ菩薩ニ申テ曰ク供物

ヤ、備ヘレリ但音聲有コトナシト云フ翁二人子ヲ共テ

罷リツ、飯食終テ笞机ヲタ、キ婆羅門詠哥ヲ歌

爰小兒等立テ舞菩薩ト婆羅門國看涕泣スルコト

良久其時來集ル道俗イマタ事ノ由ヲ不知一或ハ咲

含或ハ涙ヲ流シケリ彼此皆權者ノシハサナリ凡夫ノ非可知

第五繪有ヘシ

第五卷

永享三年延宮本「東大寺縁起繪詞」翻刻

上・十八ウ

32

天平勝寶四年壬辰正月八日コウカネノカタチヲイ鑄形造鑄同年三月

七日鑄ヲハリヌ同四月八日天皇臨幸ナリテ叙覽有

鐘樓ヲ造リ鐘ヲ釣ルニ其梁ウツヘリ不堪ノ度々折レ侍リケレハ

朝議煩テ尼俱陀樹ヲ梁ニ作リ宣命ヲ含メ位記イヲ

給テ。不折一成ニケリ

五位官ナサレテ
大鐘量ハ四万八千量也
タチマワリ寸法等ノ事

第六繪有ヘシ

33

聖武天皇大佛開眼奉為天平勝寶四年三月

廿一日開眼師以下諸師ノ請定ノ勅書ニ云

皇帝敬請

菩提僧正普賢化身

以四月八日設齋アハ東大寺ニ供養虛舍那佛ニ敬欲

第五卷

上・十九オ

第五卷

上・十九ウ

第五卷

上・二十オ

開无邊眼^{ワカレハタタスヒシヲオキヌ}朕身疲弱^{ミヅカシ}不便^{フビ}起居^{キョ}其可代朕^{カニシテミ}執筆^テ

但和上一人而已^{ノミ}仍請開眼師^{ミツル}乞勿辭^{ナクハスル}攝受^{セツ}敬白

皇帝敬請

隆尊律師^{觀音化身}

以四月八日設齋東大寺^ニ欲講花嚴經^ニ其理甚深^ニ彼旨

難究^ニ自非大德^ニ轉聞多識誰能開東方廣妙門^ニ乞

勿辭攝受敬白

咒願師大唐道璿律師

^{花嚴菩薩象大師弟子普賢化身}

都講景靜禪師^者請書如右使^ヒ若差五位^ス

天平勝宝四年^{壬辰}三月十四日大仏^ニ始^メ金^ヲ塗^リ奉^ル未終

事同四月九日開眼供養^{アリ}開眼師南天竺菩提

僧正講師元興寺隆尊律師咒願師大唐道璿

律師都講景靜禪師^讀講師延福禪師梵音二百

人維那^イ一人錫杖三百人唄^イ十人散花師十人定者

廿人納衆三百四十人甲衆三百四十人維那

六人其外衆僧沙弥等八千八百九十四人合一万

廿六人并僧正仏前^ニ進^ミ參^テ筆^ヲ取^テ開眼^シ奉^ル

其筆^ヲ網^ヲ付^テ參^リ集^ル諸人同^ク綱^ニ取^付ク皆開

眼^ノ縁^ヲ結^ハント也此時菩提僧正白衣^ヲ着^シ六牙^ノ

象^ニ乘^テ大會^ノ庭^ニ來^{ルト}見^ル人多^{カリ}リ^{ケリ}普賢大士化

現疑ナシ

第七繪有ヘシ

第六卷

34、天平勝宝四年大仏開眼供養ノ歳タルニヨリテ正月三日

ヨリ始テ十二月晦日至ルマテ天下ノ致生禁断アリ

海邊ニ釣ヲ垂レテ業トスル者人数ニ随テ日別ニ殊ノ初賜^{モミヲ玉ヘリキ}

凡供養ノ日ノ奇特不一ニ都ニ童有ケリ成長スルニ不言、

供養期近ク成テ始テ冠^{カワリ}束帶大鼓ノ鼓一ヲ乞フ父母

乍恠言マ、ニ是ヲ与フ其日ニ成テ冠シ裝束シ鼓ヲ腰ニ

指テ會場ニ臨道俗雲ノ如クニ集テ雷鳴ヲ成ス故大

會始行事不叶ニ彼男鼓ヲ抜キ出ツ、大鼓ヲ打シ

カハ忽ニシツマツ又則天皇御前ニ參リツ、南無阿梨

耶^改彼盧羯帝^{キヤケイ}燦鉢羅耶^{ハハ}菩提薩婆那ト

第六卷

上・二十ウ

永享三年延寧本「東大寺縁起絵詞」翻刻

唱ヘ礼シ奉テカキ消ッ様ニ失ニケリ文殊ノ變作ト云

傳タル復菩提僧正ノ弟子仏哲和尚行道ノ笛ヲ

奏ス天皇御感有万人奇異ト稱キ此人暗

婆国ニテ菩薩并陪呂^{イロヘトクノ}校頭等舞ヲ此朝ニ傳復タ

南中門木像ノ師子吼侍ケリ

第一繪有ヘシ

35、當寺造營ノ五百人木匠五百人羅漢也後ニ

神明祝^{ミコトノリシ}テ南中門前ニ社ヲ立テ五百余町ト云又大

仏ヲ鑄奉ル鑄師廿五人其功終テ後仏殿^{ハ文武}後玄

山ヘ入リテ皆空ヘ上リツ、西ヲ指テ飛失ニケリ是則廿五

井ノ化現トノ天皇ノ御願ヲ助成シ給ケリ其後彼山

第六卷

上・二十一オ

二四三

第六卷

上・二十一ウ

麓^{フミ}ニ寶殿ヲ造テ廿五町ノ大明神ト名テ崇メ奉レリ

第二繪有ヘシ

36 天皇花嚴會ヲ行給シ時行基井ヲ可為導師一

之由宣下アリシカハ井ノ曰^{ヘク}更ニ別ノ導師ヲ可被請ニ申

給キ然間此庭ニ寂前來シ人々大會導師スヘシト勅

定有シニ鯖^{サバ}云魚ヲ沽^{ニナヘ}ル翁來レリ天皇召留講師トシ玉ニ

魚ヲ机ニ並ヘ置テ荷ル杖ヲ東ノ軒廊ノ前ニ築立テ高

座ニ登テ梵語ヲ唱其聲ノ似^{クリノ}鳥轉^ム一高座上ニテ

忽ニ失ヌ彼魚ハ反ノ八十花嚴^經トナリ杖ハ生靈木ト成ニキ

櫻木ニ似タリ其木ハ治承ノ炎上ニ焼殘リタリシヲ東南

院ノ經藏ニ収テ今ニ侍リ

第六卷

上・二十三オ

第三繪有ヘシ

37 天照太神聖武天皇ニ示給誓三面ノ僧坊ノ僧食ノ

厨院ニ跡ヲ垂テ竈^{イヘ}殿ト被祝^{イヘ}一僧齋ノ熟未熟告仰

ラレントナリ凡伊勢太神ヲハ輒^{イハス}本朝中ニ別奉祝ニ可

ナシ而ルニ御願ノ鄭重ナルヲ感シ伽藍殊勝ナルニ帰ノ神

自進ツ、竈神成テ奇瑞ヲ顯シ給ヘル比類ナキ事也

又神明有テ此町ニ頭ハレ塩梅^{エンヘイ}ノ淺深ヲ計ヒ給ケリ依之

嘗見^{ナメ}ノ明神ト名付奉キ

第四繪有ヘシ

38 良弁僧正母子ヲ鷲被取^ム後東妻ヨリ出テツ、三十余

年國々ヲ尋求ニ行方ヲ不知ニ筑紫ヨリ淀津^トヘ至^{オケ}。諸^ト時

舟ノ中ニテ人ノ物語スルヲ聞ケルニ東大寺ノ上人良弁ト云人ハ

赤子ニテ鶴ニ被取タリケレ共モ依可為仏法、貫首ニ禽

獸ナントモ不成害ニ養侍リケリ今ハ別當ニ成テ明日拝

堂、節ヲ遂クヘシトナン側、ヨソナカラ此事ヲ聞我子ノ行末知ヌ

第五繪有ヘシ

39 良弁ノ母急キ東大寺ニ至尋ニ其日別當ノ拜堂トテ

南大門ニ寺官等衆會ヲ成シ供奉ノ輩々々見聞、

出家細索濟々其砌蔽重ノ子細ヲ難述門。脇ニ立

ヤスライシニ僧正進出ツ、女人ヲ礼ノ曰ク公ノ来リ給ヘン事ヲ

待テ今ニ拜堂セサリキ悦シキカナ今来リ給ヘル事ヨトテ僧正

老母ヲ具ノ参内シツ、此由ヲ奏セシカハ上皇哀

第六卷

上・二十二ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

給テ母子共ニ召迎テ汝貴哉僧正ノ生母トノ賤キ身

ナレ共帝王ニ膝ヲ並龍顔ニ近事ヨトテ自彼母ヲ礼シ

御キ母亦立テ良弁ヲ礼ノ悦哉依為。母ニ叙感ニ預事ヲ

ト云則彼母儀ニハ被下親王ノ宣ヲ富墓宮ト云ヒ又

ウタツカノ岡ノ宮ト云官舎ヲ給キ今宮殿ト云ハ是也

又彼母ヲ置テ日々行テ孝行ノ誠ヲ至シキ其可ヲ孝

養院ト云彼名テ今無改

第六繪有ヘシ

第七卷

40 天平勝寶年中天皇大講堂立テ一万僧御供養

侍キ其時親 天人十人空ヨリ飛下テ仏前ニ花ヲ奉ル

第七卷

上・二十三オ

二四五

第七卷

上・二十三ウ

天皇寂感ノ餘ニ始タル樂ヲ作テ奏スヘキ由勅定アリ笛

師常世^{トコヨシ}第^チ魚其庭ニシテ俄ニ十天樂ヲ造テ奏侍^キ

第一繪有ヘシ

41 聖武天皇當寺臨幸ノ次ニ佐保山ノ東ノ北ヲ御覽ノ

御陵^{ミツノ}スヘキ由宣下アリ翦敏大臣勅ヲ承テ天平勝

宝六年^{甲午}七月八日建眺望寺^{今云眉間寺}金色ノ阿弥

陀如来像^{聖武天皇御尊身}并天皇ノ御筆取勝王經

等ヲ安置シ奉テ同八年五月二日天皇崩^御。此地ヲ

御陵トセラレシヨリ以來天下寺門ニ災^{サイ}穢^イ有ントテハ

必此塚鳴動^{ツミメイト}ス彼八人ノ住侶皆往生シ侍リニキ延長

四年三月八日宇多天皇御幸應和二年九月十八

第七卷

二四六

上・二十四オ

日村上天皇臨幸其後堂會等永祚元年

八月十三日ノ大風ニ顛倒^{テントウシキ}天養二年正月伊賀上

人道舜昔ノ跡ヲ忍テ勸進造營^{シキ}安元二年三

月十六日申時彼上人往生素懷ヲ遂侍^キ此可代

々往生有縁勝地也毎年ノ勤行トノ山陵^{ミツノ}御讀經^{ミツノ}

當寺ノ寺官等彼眺望寺^{ミツノ}天皇御菩提^{ミツノ}祈奉^ル

第二繪有ヘシ

42 本願聖武天皇當寺御建立當初茅ノ人形^{ノソノカミナ}

作テ泉川ニ流シ此人形流留ラン可^ノヲ庄号^{ノイナ}寺領^ノス

ヘシト誓給シニ彼人形遙^{ヘナニ}攝津國河邊^{カヘナ}ノ郡^ノ濱^{ヘナニ}流レ

留リシカハ其可^ノヲ庄号トシテ永勅施入ノ寺領トス其地河海ノ

遊リ依為勝境一本願皇帝被立離宮一御遊砌

成リニキ彼地ヲ猪名庄名ケキ孝謙天皇御宇天平

勝宝八年丙申六月十二日四至堺繪圖ヲ被定一當寺印藏ニ

被納ニ西南ハ海ノ際日タナヲ被境一シカハ海水漸引多干渴

出来大物濱長洲等海邊居住民屋員多シ大

仏殿ノ材木西國ヨリ此濱ニ付シ時彼町ニテ木作キ大

物ノ濱ト云ヘルハ是ニヨルナリ

第三繪有ヘシ

43 良弁僧正資實忠僧正云人有云報恩聖武天皇

后光明皇后大講堂ヘ詣テ地藏井ヲカマセ給ッハ彼

像ニ愛欲ヲ發ノ此地蔵ニ似タル人ヤ有ト尋給ニ實忠ト

第七卷

上・二十四ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起繪詞」翻刻

云フ上人似奉レリト奏ス皇后悦テ温室ヲ構テ和尚ヲ

カシコヘ請セラレ皇后船ニツリ御ス程ニ聊マトロミ給ヌ

御夢ニ和尚ト

。交會見給フ驚キテ和尚ヲ御覽スルニ金色ノ十一面觀

音ヲ戴竊ニ彼神咒ヲ誦ス皇后飯命頂礼ノ凡夫愚

聖化ヲ不知ニ願ヘ我ヲ助救給ヘト發露懺悔シ給キ

第四繪有ヘシ

44 今此實忠和尚天竺ノ人ニテ能悉曇ニ達シタリケリ或時

寺ノ材木ヲ引雜役牛吼ケル音ヲ聞テ只今云事ハ用

途五文能誦涅槃不能引車ト吼也ト云其意前

生ニ當寺別當ナリ寺ノ錢五文ヲ油替テ涅槃經見

タリケリ其酬ニテ今生ニ牛ト成ツ車ヲ引由ヲ吼也ト云給

第七卷

上・二十五オ

二四七

第七卷

上・二十五ウ

第七卷

上・二十六オ

第五繪有ヘシ

45 光明皇后大仏堂内へ入セ給シ時正面ノ内ノ地俄裂

破^ヤレヌ其ヨリ以来女人堂内へ入事ナシ依之天平宝字

三年京法花寺ヲ被立^ムテ彼寺与當寺ニ之間十五

町南北エ鴨^{カモ}ノ毛^ケノ屏風ヲ被立^ムテ大仏殿御參ノ路トセリ

彼屏風ハ正倉院ノ勅封倉ニ被納^ステ今ニ有

第六繪有ヘシ

46 聖武天皇光明皇后万乗主トノ自土ヲ運ツ、仏壇築

国家ノ珍宝ヲ盡^キテ希代ノ伽藍ヲ立^シテ州縣ノ正税ヲ

寄テ三宝施供トシ給フノミニ非ス一代ノ經典ヲ集メテ

共ニ震筆^シヲクダシ半滿ノ教文ヲ授テ自露點^{ロテン}ヲ寫^クシ

給ヘリ同ク寺家ノ庫藏ニ納テ永釋門ノ龜鏡トス西天

東漢ノ間佛法崇重ノ明王雖多數ニ懸^カル^ル為^シシ難

有ニ事哉御筆^ミ經論ハ多東兩院上下ノ經藏ニ

今ニアリ

第七繪有ヘシ

47 天平宝字八年^{辰甲}五月五日大仏殿第二度ノ御供

養講師興福寺別當少僧都慈訓^{クニ}讀師大

唐楊州白塔寺法進法會儀式開眼ノ例ニ任テ嚴重

巍々タル事不及顯盡ニ

第八繪有ヘシ

48 當寺ノ別院紫磨金院ハ莊嚴殊勝ノ靈場也十三

重^シ宝^ツ塔^ヲ起立ス其影遠ク西海ノ波ニウツル漁父

垂^シ釣^ニ海士引^ル網^ニ報^ル塔婆ノ影ニ仍テ不得^ズ鱗^ヲ凡此

塔ト海ノ間多ノ山河ヲカサネ十餘里ノ道ヲ隔ツ彼海上

移^ル事非只事ニ雖難取信ニシテ三河入道寂照入唐

時清涼山へ昇ル一人ノ僧有テ池ニ向テ礼ヲ成ス寂照

其故ヲ問僧答テ云此池ノ面日本國近江國蒲生野

石塔現ス此故ニ礼スト云以彼ニ思之一日域江州ノ塔ノ影

漢朝清冷山ノ池ニウツル是皆塔婆ノ靈驗也

第九繪有ヘシ

49

淳^シ和^シ天皇御宇天長比大仏南中門大ナル蜂アリ是

辛^カ国^ノ行者ノ反化也多人ヲ差^サ致^シスニヨリテ住侶退散

第七卷

上・二十六ウ

永享三年延富本「東大寺縁起絵詞」翻刻

寺中荒廢^{ケル}セシカハ勅定ト一畝ノ瀧口皮衣ヲ着キ

目計アケテ蜂ヲ射落シ難ヲ留メキ

第十繪有ヘシ

第八卷

50

天平勝宝三年^{卯辛}十月實忠和尚竺置寺龍

穴^ケヨリ入テ北へ一里計過ルニ都率ノ内院也ケリ四十九院

摩尼宝殿ヲ巡礼ス其内諸天殊ニ集^ム十一面悔過

勤修スル所アリ常念觀音院ト云聖衆ノ行法ヲ拜ノ

此行ヲ人中ニ摸^ウシ行ヘキ由ヲ伺^ヒ聖衆告曰此所一晝夜

人間四百歳ニアタル然者行法軌則^ヲ千遍

行道ヲコタラス人中ノ短促ノ所ニテ更ニ難修シ又生身

第八卷

上・二十七オ

二四九

第八卷

上・二十七ウ

○ヲハシマ^ス。ス争人間輒^ス可摸^ス云和尚重申^テ勤行作法^ハ

急^キニシ千遍行道ヲ走テ數ヲ可滿誠ヲ致テ勸請^セ

生身何不来給^トテ是ヲ傳テ皈^リス

第一繪有ヘシ

51

實忠和尚攝津國難波津ニ行補陀落山向香

焼花備^テ海ニ浮ヘ懇誠ヲ抽^テ々祈請勸請ス彼闕^ア

伽之器遙南ヲ指^テ行^テ又皈来ルカクスル事百日計ヲ

経テ後終ニ生身ノ十一面觀音親リ補陀落山ヨリ

闕伽器乘来^リ給ヘリ和尚是ヲ當^ニ緒索院ニ

安置シ奉^ル今二月堂ト云フ凡夫肉眼機見ヘタツルカ

故輒^ク御身ヲ拝シ奉ル人無シ生身御身熾氣シテ

第八卷

上・二十八オ

今カハリ給ヘス効驗觀音ヲ被^ニ注^ニ東大寺二月堂

觀音肉身是ヲ被^ニ注^ニ天平勝寶四年^{壬辰}二月一日

始^テ大同四年至マテ六十ヶ年之間和尚彼生身ノ

御前ニテ二七ヶ日夜六時行法ヲ修ス都率^ニ八天練

行道場^ヘ降^リテ種々ノ神變ヲ現シ佛闍ヲ廻キ從其^ニ

天人影向ノ儀式ヲ摸^{セリ}

第二繪有ヘシ

52

實忠和尚二七ヶ日行法間初夜時終神名帳ヲ

讀^テ大少神祇ヲ勸請ス六十餘州諸神一万三千

七百余坐修練ノ砌ニ影向シ給ヘリ若狹國遠敷明

神ト云神御ス遠敷河領ノ魚ヲ取テ遲參ス明神

是ヲ難痛^{ナニキツク}テ其ヲコタリニ道場邊^{ミチノヘ}ニ香水ヲ出テ

可奉^{コホウ}之^ノ由^{ヨリ}ヲ懇^{コン}ニ和尚^ニ示給^シシカハ黑白^ニ二鶴^ツ俄^ニ藏^{ゾウ}

中ヨリ飛出^{トビデ}テ可奉^{コホウ}之^ノ由^{ヨリ}ヲ側^ニ樹^ツ居^ル其^ノ二^ニ跡^{アト}ヨリイミシク无^キ

類^イニ甘泉涌^キ出^デタリ石ヲ疊^ツテ闕^{トス}伽^ニ井^ニ彼明神遠敷^{カワノ}河^ニ

水ノ筋^{スジ}ヲ引^ヒテ觀音^ニ奉^{ホウ}ニケレハ忽^ニ河ノ水カハキニケリ其後ハ

無音河ト云フ今ニ彼遠敷^ニハ鶴ヲ仕者^{スル}也從^{シテ}其^ノ一^ニシテ

初夜時終^テ神名帳ヲ讀^ミメハ六十餘州^ノ大小^ノ神祇悉^シ

来^テテ法味ヲ受給^{ヘリ}

第三繪有ヘシ

53

六時^ノ行法嚴重ナル事ヲ天狗集^テ伺^ミテ二七^ニ日終^ニ練行

衆退散時入替學^ニヒ行セントス依^テ之^ノ十五日^ノ朝^ニ日來^ル

第八卷

上・二十八ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

行作法ヲ改^メテ咒師大道師異^ル略式^ニ日没初夜^ニ二時

行^フ事^{アリ}天狗^ノ行法正^ニ今有^{ソト}云凡^ニ今此行法昔^{ヨリ}

處々^ノ靈地^ニ欲^シン摸^ソ行^ニ是^ヲ傳^ハントスル人ハ即蒙^リ冥爵^ニ

失命^ニ又其可^ニ必疫病起^リテ已^ヒトケレハ無^ニ模^ニ行^可一大

聖ノ意樂誠ニ難量ニ事歟

第四繪有ヘシ

54

當寺^ニ實尹^{イシ}得業^ト云者^{アリキ}奉信二月堂^ノ觀音^ニヲ二

世利益ヲ祈申^キ然程^ニ被^カ侵病^ニ命終^リナントス偏^ニ祈^ル

臨終正念^ヲ自起居^テ此^ノ前^ニ三^ニ尺^ノ十一面觀音ノ像^イ

マス何^ノ仏師奉^ム造^ルリ相好圓滿端正微妙^ニ御^ニストテ悦^ビ

ツハ手ヲ合心^ヲ至^テナ礼^シ奉^ル餘人^ハ不奉見^ニ是^ヲ翌^ニ日^ニ

第八卷

上・二十九オ

二五一

第八卷

上・二十九ウ

正念ニ住シ端坐合掌シテ往生ノ素懷ヲ遂ニキ

第五繪有ヘシ

55 或一人僧此、觀音、靈驗、无類、御事ヲ信仰ノ餘取奉

思ケリ伺、取得販ル程ニ終夜、堂邊ナル木ノ本ヲ廻アリキテ

吾住處へ飯事ヲ不得一次日、朝當寺ノ職掌大膳国

延ト云者は見付テ取返シ奉ニキ

第六繪有ヘシ

56 彼行法式トノ第五日第十二日ノ初夜ノ行終上本願上

皇ヨリ下結縁ノ道俗ニ至ルマテ其名ヲ注ノ過去帳ト名付

ツ、是ヲ讀上テ成等正覺之由ヲ祈承元、比彼帳ヲ

讀ム僧衆慶カ前ニ青衣着、女人俄ニ來テナト我ヲハ

第八卷

上・三十オ

過去帳ニハ讀ワトシ給ヘルソト云テカキケツ様ニテ失ニケリ青衣ヲ

着シタリシカハ青衣、女人ト名付テ今ニ讀侍リキ

第七繪有ヘシ

57 興福寺僧有ケリ春日社ニ參テ夜深テマトロミタリケル夢ノ

内寶殿方ヨリ神人來テ大明神ハ二月一日ヨリ。東大寺ニ趣

諸堂ヲ巡礼シテ二月堂ニ參ヌ札堂へ入ラントスルニ堂内神名

帳ヲ讀ニ折シモ春日大明神奉ヲ読ニ最前聞信仰无

極ニシテ涕泣シキ又實忠和尚在生ノ時ヨリ遷化ノ後五百

余歳ノ間毎年二月一日ヨリ恒例ノ行法トノ二七ケ日夜

怠事ナシ十二日ノ後夜時ニ至リテ練行衆彼關伽井邊ニ

群レ至リテ向テ遠敷明神ノ社ニ井ノ水ヲ加持スレハ甘泉盈

満セリ是ヲ移取テ仏前ニ置ク天平勝宝年中ヨリ多

年ヲ經レトモイサキ潔シテ飲者衆病ヲ除ク八功德水ニモ勝

タリ康元々年修中ニ彼根本香水ヲ見ルニ日来

良薬、為ニ諸人ニ与ヘテ残少ク成ニケリ第七日ニ至テ纔ワツカニ

瓶ノ底ニ有シカハ八日ノ日中ノ時ニ練行衆評定シテ今ヨリ

後ハ此香水ヲ輒ク不可出ニ云然程ニ十日自然ニ瓶中ニ

盈シカハ諸人奇異ノ思ヲ成シテ只為利生普ク可与之

由又評定シキ其後ハ酌取トモ盡事ナシ

第八繪有ヘシ

58

六波羅ノ後藤左衛門尉同宿、女人有ケリ年来腹病、

受テ煩ヒツ、命終ラントシケルニ事ノ縁有二月堂ノ香

第八卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・三十ウ

水ヲ得タリケリ二盤ハカリハカリ飲之ニ即起居テ口ヨリ青

蛙ノ大ナルヲ吐出ノ病則能成ニケリ

第九繪有ヘシ

59

正嘉二年二月九日日中ノ行法終リテ後御堂内陳火ノ

付タル音シテ覺ヨリ煙立出ツト聞テ練行衆等内陳ヲ

開テ見ニ誠ニ火付テ仏壇并ニ新造、水引焼ヲ落タリ

諸人見ルニ是ニラ今年仏壇修理ノ古キ水引上ニ新水

引ヲ懸重タリ而ニ上ナル新キハ皆ヤケテ本ノ水引不焼又

仏壇ハ乍焼落テ前ノ造花ハ都テ不焼ニ觀音、御厨子ヲ

探奉ルニ聊モ燭燭ナシ大ニ此事ヲ恠ムニ或人云給師水

引ノ給師水引ノ繪ヲカキシニ葬家ノ内ヘ取入タリケリ

第八卷

上・三十一オ

第八卷

上・三十一ウ

第八卷

二五四

上・三十二オ

トナン是併守護ノ天等トカメ也今此堂ハ治承年

中ノ南都炎上時御堂ノ南端ニ火付タリシカ共俄ニ

風猛ク吹拂テ其火ツケチ侍キ事ノ奇特觀音ノ靈

驗昔ヨリ今ニ新ナル者也

第十繪有ヘシ

60

修中ニ練行衆粥食ノ殘ヲ或下僧不信ニノ魚ヲ具ノ

食シタリケレハ俄ニ遍身ニ瘡出ケリ癩病ナリケリ

程ナク死侍リス彼子ナリケル小童ハ行ホウ巍ニ腫

堅マリテ惣不能ニ道路ニ物ヲ乞ケリ異名ニホウハレト

云ヌ練行衆ノ中食ノ施食ヲ取テ奈良坂非人ニ与

癩病重苦ノ者時ヲ食スレハ其其苦痛タスカルト云ヘリ

61

弘安九年修中ニ下七日二月堂領貶原ノ下司男参

テ籠リタリケル夢ニ僧一人赤衣ノ童子一人ヲ具ノ内陳

ヨリ出テ汝多年ニ信ヲ至テ参籠返々神妙也公文

上総房不参事不思議也罰セシスルニテ有也ト云

此由ヲ雖語ト夢ハ左繩ト云フ不苦ニ更不参春日ノ

社ヘ其日ニケ度マテ水ヲアミ潔斎ノ参ケリ晝程ヨリ

物ヲ打カツク様ニ覺ケリサテ貶原ヘ販リテ癩ヲ温病

ヤム第五日自夢内彼下司語シ様ナル僧一人赤衣

童子一人枕ニ現テ汝二月堂領ノ乍為沙汰人ニ不

信ニシテ不參詣ニ明討ヲ与也命ヲ召サンスル事子細

ナシト云種々サワキ雖祈ニ一七日云フニ死ニキ雖末代

不思議嚴重無極者也

第十二繪有ヘシ

第九卷

62

大唐國楊州龍興寺鑒真和尚三學達五乘

明也天平五年^{西英}聖武天皇沙門榮叡普照

等勅大唐へ被遣ニ唐天寶元年^{壬午}十月本朝天平

十四年彼榮叡普照同學僧玄朗玄法遣唐

大使丹墀真人廣成等楊州大明寺へ行テ和尚

律ヲ講セシ處ニ至テ彼等同ク和尚ヲ頂礼ノ日我國上宮

第九卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・三十二ウ

太子ト申シ人薨シテ二百年ノ後日本ニ律宗弘マルヘシト示

給キ今其時代當レリ願クハ和尚。域ニ東流シ給ヘト云和尚

門弟等取留ケレハ和尚我ハ身命ヲ輕クノ佛法ヲ重クス早ク行テ
即請ニ趣ントスルニ。律ヲ弘メン大唐ト日本ト契殊昵ヒニ由

緒アリ一ニハ衡山ニ六生ノ行シ惠思禪師云フ人日本聖

徳太子生テ仏法ヲ弘メ給ヘリニハ日本ノ長屋王千帖ノ

袈裟縫テ吾朝千人僧ニ供養シキ其縁ニ四句ノ文ヲ

縫付タリ山川異域風月同天寄諸仏子共結

来縁云日本ハ仏法興隆有縁ノ國也我行ヘシト云ヘリ

第一繪有ヘシ

63

鑒真日本へ渡ントスルニ門弟等はヲ歎キ留不叶ニ袈

裟ニテ頭ヲ裏ミ顔ヲ隠ノ和尚ノ渡海ヲ留又祥彦等ノ

第九卷

二五五

上・三十三オ

第九卷

上・三十三ウ

門徒廿人同ク日本へ渡ラントセシ時沙門道枕^カ云今他國

へ行シ事弘法ヲ弘メン為也高麗國ノ如海へ浅学^{ニテ}徳

行无シ京ニ帰ヘシト云如海大ニ怒テ袈裟ニテ頭裹ミ郡^{クシ}

縣^{クニ}入テ道枕ヲ諱シ^{サカシ}渡海ノ障ヲ成キ大衆袈裟ニテ頭ヲ

64 裹ム事鑒真門弟ノ振舞ヨリ起レリトナム(第二繪)唐天

寶二年^未本朝天平十五年十二月和尚始テ船乗日

本へ趣キ給シニ風吹キ浪高ノ船ヤフレ和尚ハ烏丘草^{ホヘシヲフレヌ}

上ニ浮余人ハ水中ニ在リ可持ノ仏舍利ノ海ニ沈給ヘルヲ和尚

歎キ悲ミシ時龜舍利ヲ負和尚ニ奉ル

第三繪有ヘシ

65 和尚本國ニ吹飯^{フキカエサ}レテ明州青王寺ニ住ス此時北山ニ行テ迦

第九卷

二五六

上・三十四オ

葉仏ノ跡ヲ礼拝ス山ノ頂ニ至リテ仏跡ノ千輻輪相^{ワカミ}拜ヌ魚現

時々天樂アリ自彼ニ下テ聖衆中ノ護塔神ヲ礼ノ香タ

キ花ヲ散テ行道ス塔神井ノ中ヨリ出テ鰻梨魚ト成ル

彼魚時々反テ^{ヘト}鵠鳥ト成テ樹上ニ飛上ル井返入テ

魚トナル大方此魚へ信心人香花ヲ供養シヌレハ

出不信人へ求レ共見事不得^梁吳朝ヨリノ今有和尚

山海^{シノキ}ヲ凌シ程ニ諸州名所ヲ尋ネ巡礼ス其奇獨^特

多ク侍レ共難頭盡

第四繪有ヘシ

66 和尚依惡風ニ本國ノ岸飯^ニシカ共舟ツクロヒテ帆揚^{フム}

大風吹浪鹿クノ治^沈ナントセシ時棧香ノ籠引捨ント

スルニ空ニ聲有莫抛ミミ云フ此時四神王舟中ニ現

シ給キ三日蛇海シヤノウミ過三日飛魚海過五日ハ邊海ヘビ

過ク多日水ヲ不飲一歎シ時或ハ神靈池水ヲ化セシカハ

白魚船ヲ引テ陸ニ至リ或ハ冥衆時指テ甘雨ヲ降ケリ

第五繪有ヘシ

67 欽明天皇即位十三年尺迦遺法此国ニ雖傳二百

九十余年ノ間出家具戒之儀未備一事ヲ聖武天。

深歎キ被テ思食一大仏殿立ヲハシマス事偏ニ戒壇建立ノ

為也十地階級ニヨリテ報身能化異レ共戒波羅密ノ

教主ヲ撰スミ千葉臺上ノ尊像ヲ顯シ給ヘル事戒師ヲ吳

朝ニ尋ネ木刃シヤ此国ニ弘メント也依之唐天宝十一年

第九卷

上・三十四ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

王又遣唐使參議藤原朝臣清河從四位上。伴

宿祢胡。呂等延光寺ユキツ、和尚ニ謁ニ啓ニ勅請旨述

第六繪有ヘシ

68 大唐諸州道俗皆和尚ノ日本ヘ行給ハントスル事ヲ雖惜留ニ

仏法弘通志深ノ天寶十二年巳未十月廿九日又龍興寺

出テ江頭ニ至ル又彼ヨリ蘇州ノ莫泗浦黄ニ至ル同十二年十一

月十五日黃泗浦ヨリ出テ日本国ヘ向テ其時相從ヲ門弟

楊州白塔寺法進泉州超劫寺曇靜思託寺十

四人比丘尼智首等三人優婆塞廿四人也仏舍利

三十粒白檀千手像天台止觀等法門戒壇圖經

一卷此外仏像經論律藏書籍并中天竺大

第九卷

上・三十五オ

二五七

第九卷

上・三十五ウ

那蘭陀寺ノ戒壇ノ土種々ノ珍寶等ヲ持テ渡海^{凡イニ}急

旬月ヲ經サルニ日本國ノ西南堺ニ常畑山ノ邊ニ班竹山^{ヘンチク}ノ

モトニ船ヲ留ム後ニ得順風ニ多称國ノ野孤嶋ニ至ル唐

天寶十二年本朝天平勝寶五年^巳十二月廿

五日薩摩國ニ着ク同六年^午正月十二日^{丁未}太宰府

着ク都テ渡海ノ程ト本國ニ被^ルニ吹還^{ヘサ}ニ事五ケ度は

漢朝ノ神祇和尚ノ去事ヲ惜^{フシ}障^シヲ成給シカ共和和尚ノ悲

願深ニヨリテ始テ唐朝ヲ辞^サセラ^レ口^ロ口^口十二ケ年ニ來朝^ス此

時白衣服着タル老翁一人來テ和尚ニ申曰我ハ是和

尚ノ海ニ落シ入レ給シ仏舍利取テ奉リタリシ者也无邊

莊嚴海雲威德輪蓋大龍王ト云請雨經同聞衆

第九卷

二五八

上・三十六オ

三千世間ノ龍王ノ上首也仏舍利擁護誓深シ白色石ト

成テ止住^{和尚}シ給ハン可ニ現ノ守護シ奉ルヘシトナム則石ト成テ今ニ

招提寺^{シヨウテ}有

第七繪有ヘシ

69 同勝寶六年^午二月四日和尚始テ都ヘ入ル勅使正四位下

安宿王南閭門^{リョニテ}數万里路疲勞ヲナクサメテ東大寺ヘ

。入ル大仏殿ノ御前ニシテ良弁僧正和尚ヲ礼ノ曰是ハ大帝^{タイ}大上

天皇天下ノ人ヲ勸テ共良縁ヲ為^ニ結^{シメシカ}一金銅像ヲ造給ヘリ

大唐ニ懸ル大像有ヤト同^問和尚曰唐朝廣^{シト}雖更ニ

無シトナン和尚大仏ヲ礼拜供養讚歎行道^{タクワレ}給テ

勅使客堂ヘ入ル次日大唐道璿律師來テ同^問訊^シス

婆羅門僧正来テ問曰我唐崇福寺ニ三ヶ月住ス

和尚ハ彼コニテ律ヲ講給覺給ヤト曰フ和尚然ニ答フ大

臣以下百余人来テ礼拝ス又當寺ノ官倉院ヘウツシ入ル

正四位下吉備朝臣真吉備ヲ勅使トシ此寺ヲ造テ十

余年ヲ経タリ大仏西ニ戒壇ヲ立テント思フ事日夜ニ不

怠今和尚蒼波ヲ渡テ自遠ニ来レリ從今ニ後ハ授戒僧

律偏ニ大德ニ任ル由勅ニ喜ヒ勅シ給フ和尚一代経論皆

暗誦セシカハ勅定ニヨリテ一切経謬ノ文字ヲ直ス依之

真偽和尚ト云ヘリ

第八給有ヘシ

70 天平勝寶六年四月始テ虛舍那殿前和尚傳來ノ

第九卷

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・三十六ウ

戒壇院土ニテ壇ヲ築ク天皇登壇シ御テ并戒ヲ受給フ

次皇后御受戒次沙弥證修等四百。余人受戒ス又大僧

靈福等八十人戒ヲ受待キ凡ソ彼小乘戒律從昔最ニ

且ニ雖弘ニ并戒法ハ于今未傳漢土ニ依之真諦三藏

大乘ノ律藏ヲ漢朝ニ弘メシトテ南海ニノ船ヲ浮ルニ其舟忽

沈ニナントノ其時多ノ物ヲ海ニハネシカ共船猶不浮出一戒律經

書ヲ取シカハ船安ク浮テ進行キ并戒漢土ニ尚縁无キ事ヲ

三藏歟キ□又西涼州沙門法進等中天竺フ曇无

識三藏ニ逢テ并戒ヲ受ント望シニ漢朝ノ人ハ狡猾多ノ剛節

。クナシ非并戒ノ器トテ可授一其時。進悲テ之ヲ仏ノ前ニテ誓フ

成ツ。七日満ル夢中ニ弥勒并親リ戒ヲ授給ヘリ并戒本

第九卷

二五九

上・三十七オ

第九卷

上・三十七ウ

授給^ヲ皆是^ヲ誦得^テ夢醒^テ後ニ疊^ニ無識^{三藏語}

三藏其始相^ヲ感^ノ漢土ニモ人アリケリトテ為^メニ法進^ニ戒

本一卷^ヲ譯出^{ヤク}其文義夢^ニ得タル本ト同シ人ノ別行ノ地

持ノ戒本是也漢家ニモ昔ヨリ不傳^ニ井ノ律儀法進^ニ靈

夢^ニ始テ弘^{レリ}而ルニ暨^ニ真和尚朝時^ニ大仏殿ノ御^ニ

前ニテ始テ彼井ノ戒法ヲ弘^メ行^{ヒキ}吾朝^ニ珍事ナル者歟

第九繪有ヘシ

71 天平勝寶六年^{甲午}五月一日戒壇院^ヲ遷^{ツツシ}可被移立^ニ由

宣下アリ和尚可持ノ那蘭陀寺ノ戒壇^土ニ等^キ地味ヲ本

朝尋^ニネラレシニ今戒壇院^土其味同^ニヨリテ廿一ヶ國寄^テ

被ル造勅使中納言^{藤原タカフサ}。高房同七年九月造^ニ宇同^ニ。十^{七年}

第九卷

上・三十八オ

月十三日^{甲午}御供養導師權少僧都^{任大僧都}咒願

權少僧都^{補法務}請僧一百二十人道儀誠^ニ麗^{ウレシ}

第十繪有ヘシ

^{同七年十月廿日受戒ヲ行始祈事ノ心ヲ思ニ三世ノ諸佛道同不反ノ軌則トシ出世成道ノハシメニ千百億尺カ}

72 同廿日受戒ヲ被行始^ニ抑思^ニ事ノ心ヲ三世諸仏道同可

反^キ軌則^ト出世成道^始ニハ千百億尺迦^ニ皆千花臺上

ルサナノ御モトニ誦^テ十重六八ノ波羅提木刃^ヲ受傳^ヘ給^{ヘリ}

梵網經ニ千百億尺迦各棲微塵衆俱來至我可

能我誦仏戒^ト説給^{ケル}ハ此也今此大仏ハ第二地ノ能化戒

羅密ノ教主ナルカ故ニ彼千百億ノ尺迦^ニ報身ノ御本ニテ戒法ヲ

受給^{ヘル}ニ准^テ聖武天皇臺上ノ御前ニ戒壇ヲ築^キ井戒

受始給^{ヘリ}又千二百億ノ化身ノ尺迦報土ヨリ閻浮提井

樹下ニ歸テ本師ノ戒律ヲ弘[□]給ヘリ同經ニ是時十百億

還至本道場各坐菩提樹誦我本師戒ト云ヘルハ是也

天皇。大仏ノ西ニ戒壇ヲ移テ尺尊ノ形像ヲ安置シ受戒ノ

作法ヲ行給ヘルハ葉中ノ尺迦^後実報ノ土ヲ退キ本原

井道場ニ歸テ戒ヲ弘^{ウツ}給ヘル其心ヲ摸^{ウツ}シ給ヘリ東ノ壇ヲ今ノ

西ノ壇トスル事ハ報土ヲ東トシ娑婆ヲ西トセリ同經ニ余時

尺迦從初現蓮花藏世界東方來入天宮中説

魔受化經已下生南閻浮提迦夷羅國等文然者

祇洹精舎ノ三所戒壇ノ内東北方ノ井壇ヲ摸^{ウツ}シテ三井座^ヲ

安シ三重ノ壇ヲ築テ三聚淨戒ヲ示ス攝律儀ノ戒中ニ

五篇七聚ノ戸羅ヲ備ヘ大小通受ノ間半滿二字ノ妙

第九卷

上・三十八ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

行ヲ兼タリ一天ノ下四海ノ間一分具分ノ井トイハレ剃髮染

衣ノ僧尼タル皆是吾寺ノ軌則ヲ稟^{ウツ}ル故也

第十一繪有ヘシ

73

サテ法皇御受戒有テ翼^{ハネ}日必ス食堂ニ御幸是則

當寺ノ僧衆ニ連リ御ス儀也粥ヲ衆僧ニ被引ニ聽テ法皇

供シ御ス由也寛和二年円融院ノ御受戒ニモ任例ニ一

千僧ヲ囑テ是ヲ引ルニ衆僧着坐後西方第六床

末ニ着御アリ諸僧悚慄^{セウリツ}ノ皆床ヲ下ントス勅有テ勅

座スヘカラスト爰身夏臈ヲ積ミ眉秋霜ヲ點スル輩

潜^{ヒカニ}相語テ曰不量一人尊千僧ノ末ニ加リ御シ我等忝^{ヒカニ}ク其

上ニ居ス仏法貴事ヲトテ喉咽^{コウゲツ}スル者多シ此事諸^{ヒカニ}□ノ

第九卷

上・三十九オ

二六一

第十卷

上・三十九ウ

記録ニモ明ニ裁^{コトヘリ}タリトナム誠ニ吾寺ノ余寺ニ勝レ尺門ノ

他門ニ超タル事顕レタリ此時ノ和尚ハ専寺寛朝僧

正羯魔師、元杲大僧都教授師興福寺ノ真

喜律師ニテ侍^キ凡諸寺ノ御幸末代ニ雖有^其共例ニ専

寺ノ臨幸ハ猶其^レ寄重事^キノミ多侍^キ可謂中ノ大門ノ

内ニテ御拜ノ岡ト申事アリ是ハ天竺ノ國王祇園精

舎ヘ臨幸ノ時先ツ門内ニテヲカマセ給フ吾朝ノ専寺彼ノ

崇敬ノ像ヲ摸^{ウツサ}ルハトカヤ又必ス御釵^{ウヅ}ヲ御殿^{ウヅ}ニ奉ツラル是代

々ノ御門翠美^{ススイ}ヲウカシ給フ蹴躑^{セツシュク}也ケリ

第十二繪有ヘシ

第十卷

第十卷

二六二

上・四十オ

74 淳^{ジュン}和天皇御宇天長二年八月廿一日延暦寺俗別

當參議右大弁陸奥^{ムツノワタシ}出羽按察使^{アサリシ}從四位上行

勘解由長官伴^{トモノ}國道叡山戒壇ヲ可建ニ由下^{クワン}官符^フ

證^シ之日義真円證ニ示ス消息狀云

然則円教可以興教我國者小僧都傳燈大法師位

勤^{コン}。律師傳燈大法師修圓左大臣正二位藤原朝^{サツ}

臣冬^{フユ}嗣權中納言正三位藤原朝臣三守等力也^{モリカキ}云

天台円宗起^{コト}傳戒勤操^{コンヤウ}力ナルカ故ニ円仁ハ正ク此戒壇

ニ比丘戒ヲ受ケ義真彼山ニ戒壇ヲ申請シ時當寺

戒壇第九ノ祖藥師寺常詮^{セン}僧都ニ謁^ミ此壇四角

土ヲ乞請テ歸テ彼山ニ戒壇ヲ築タリ是則天竺二大那

闍陀寺ノ地味ニ同土ヲ撰テ被建ニ事ヲ思旦ハ大唐修終

南山ノ道宣律師清官寺ノ戒壇ヲ建シトセシ時親

頻頭盧尊者降臨ノ其相應ノ地ヲ示シカヘ道宣此

事ヲ信ノ掘テ地ニ水際ニ至リシ時四角ニ各オホキニシテ

彼起石アリ其銘ニ云此是迦葉仏時比丘果ニ此土

石ニ以為標相一結作戒壇云事相應ハ先仏ノ時ヨリ

標相有者哉今四角土ヲ乞ヒ渡ス蓋シ比意ナラン

第一繪有ヘシ

75 神龜元年^{甲子}斛飯王五十二代玄孫中天竺善无

畏三藏大毗盧遮那經大唐空藏聞持法等^{サツ}齋

持テ遙ニ辰旦ヲ過テ本朝ニ来ル洛陽ニ詣ノ東山ヲシム

第十卷

上・四十ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

松栢ノ枝ヲ切り荊棘ノ地ヲ拂ヒ幽庭ヲ結ヒ秘壇ヲ立

屢三蜜上乘法ヲ修ス今ノ真言院其舊跡也

此瑜伽ノ智水冥ニ率土ヲ洄シ金剛寶珠能國家ヲ

守ル事ノシルシナルヘシ然而機縁尚不^{ナラン}至人並依^ム不行ニ
備化西足ノ跡石上塚
両部秘法永代不竊事相也

之ニ唐空藏ノ聞持八十日ノ後三ケ年ヲ経ル間大和

國高市郡王舎邊ニ始テ多宝ノ塔ヲ起立ノ天

竺ヨリ可持ノ大日經。心柱ノ中ニ籠テ未來ニ興法利生

并来テ此法ヲ弘ヘシト記シ置テ再大唐國ヘ歸リ渡リヌ

第二繪有ヘシ

76 延暦七年弘法大師生年十五。^{當寺}石渕ノ僧正勤操

值テ大虚空藏并井ニ能滿虚空藏聞持法等ヲ

第十卷

上・四十一オ

第十卷

上・四十一ウ

受テ名山絶嶮^{ケシノ}處々^{ニテ}是行ヲ義測僧正吾

朝^ニ善無畏^ニ傳^ヘ并道慈律師大唐渡^{リテ}

一行禪師受シ法也同十二年春秋二十^ニ僧正

随テ槇尾寺ニ入テ鬢髮^{ヒシヘツ}ヲ剃除シ俗塵ヲ放レテ沙

弥ノ十戒ヲ護持シ名ヲ教海^ト号ス後^ニ如空^ト改^ムアラシム同

十四年四月九日廿二^ニノ東大寺戒壇院ニテ具足

戒ヲ受給フ諱ヲ空海ト定ム五篇七聚^{ジュ}ノ律儀

無^レ可^モ滿^ス善法饒益^ノ淨戒兼備^テ并大乘^ノ木叉^{モクシキ}

悉成就ヌ

第三繪有ヘシ

77 同十五年大師行年廿三^ニノ大仏宝前^ニ詣誓願門

第十卷

上・四十二オ

發ノ祈給ヘク我随仏法ニ常ニ要ヲ求ヌ三乗

乘十二^ニ經心神有疑未得決^{コト}但願ハ三十^ニ々方^之

諸仏我ニ不二^{ノ法ヲ}。示シ給ヘト一心ニ祈念シ給フ夢ニ人

有テ告曰大和國久米^{クメ}ノ道場ニ經アリ大毘盧

遮那經ト名ク是汝カ可^ル求^ム也トナン則随喜ノ行テ

尋^柱ニ東塔ノ桂ノ中ニテ彼經ヲ得タリ是則善无

畏三藏ノ可^ル埋^ル經王ナル

第四繪有ヘシ

78 同廿二年大師先年依大佛ノ感應ニ尋得給ヘル大日

經ノ源利ヲ為^ス盡習ニ可渡大唐ニ願念ヲ發給八幡大

井其心願ニ見御在テ當寺南大門ニノ神鉢旦顯

給テ唐和兩朝往還間教法傳持利物次第具

談話有テ互ニ真影ヲ写詠未生ヲ利益シ給ヘリ

僧形ニテ日輪ヲ戴給ヘル御影ハ其時之御姿也

第五繪有ヘシ

79

同年五月十二日大師年卅一遣唐大使越前太守

正三位藤原朝臣賀能ト諸共ニ同船ノ入唐八月ニ

福州ニ着十二月ニ長安城ニ至同廿四年二月勅ニ准ノ西

明寺ニ住シ城中ノ名徳ヲ訪給ニ青龍寺和尚惠果

阿闍梨ニ奉逢ニ和尚勸喜咲ヲ含テノ曰ク吾汝來事ヲ

知テ相待事久シ報命欲盡ニ無人任法ニ急キ法傳エ

ントナム則大師初大日經ノ深義問奉ニ和尚其秘決

第十卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

上・四十二ウ

授ケ給フ其後兩部ノ灌頂ヲ受ケ諸尊ノ瑜伽ヲ傳ル

事如写瓶水ニ授法事終シカハ其年十二月十五

日和尚円寂ニ入給イヌ

第六繪有ヘシ

80

大同元年八月一日百餘部金寸乗教新譯章充

仏像道具等ヲ齋持ノ帰朝十月先法門表ヲ上リテ

暫ク觀世音寺ニ住ス同六年ノ春依勅ニ參洛可弘

真言教一之由ノ宣旨ヲ蒙テ久米ノ東塔院ニ住ノ一

夏ノ間以。无畏ノ疏ニ大日經ヲ講シ給フ實惠等十大

徳同座ニ烈テ講ヲ聞ク國中諸神形ヲ現テ砌來テ

法味ヲ嘗メ擁護ヲ垂レ給キ无畏ノ置記不足哉

第十卷

二六五

上・四十三オ

第十卷

上・四十三ウ

第七繪有ヘシ

81 同三年宗分ノ度者賜 同四年入京ノ程暫^ツ榎尾寺

栖息^{セイソク}シ給^ルフ嵯峨天皇御宇弘仁元年^{庚寅}天皇殊^ミ下

勅^ツヲ大師當寺令移栖^ベニ授別當^ニ職^ニヲ給^ル

第十四代ノ別當是也則依宣旨^ニ西^ニ□室^ニ賜第

一室^ニ本坊^ノ盛弘^ニ三蜜^ニ教宗^一給^ル實惠真雅

堅惠等ノ門弟同ク從^ヒ住^メ營^ニ修學^一ヲ大師西室

手^{井カ}ヲ堀^給ヘル所^ヲ井清水^ヲ湛^ヘテ今^ニ在^{サレ}ハ彼坊号

深井坊ト同元年ヨリ寺務四年之間良弁僧正弟

子實忠和尚又修理トノ互^ニ至興澄^隆ヲ事非一其中ニ

大師或ハ大仏殿ニテ三宝供養法會ヲ始行シ或ハ花嚴

第十卷

二六六

上・四十四オ

大会ヲ興隆又八大井ヲ寺中ノ八方ニ勸請ノ遠拂^{トクハヘシ}ニ災

災^災八大龍王ノ櫛^{クシ}内ノ鎮坐^ツ莊嚴ノ久增威光^ツ又

殊^ニ戒壇院修飾^ヲノ新^ニ受戒會^ヲ興行シ給^ル但非^カ復^ニ舊^ニ

議^ニ更制^ニ新渡ノ儀^式或^ヒ始^テ被懸銘額^ニヲ是大師修複^ヲ

驗^シナルヘシ未來ノ門弟^マテモ此戒壇^ニテ受戒スヘシト示置^キ

給^ル井法皇御受戒時大師ノ門葉戒師^{ツトムル}ヲ勤^ム事

其意^{コノミ}可知又當寺ニ長五六寸計ナル大蜂時々現^ル

人ヲ損ル事アリ是辛國行者ノ化現^現ト申延曆大

同之比殊繁多^多整致^ササル寺僧五六人及^ツ間敷^{ナシキ}

逢^アル處ニ大師移住^イ後ハ自然ニ跡ヲ削ル大衆大ニ悦^テ西

室僧坊^{ムラカ}ヘ群^ム渡^テ入唐和尚ノ恩德也ト異口同音申逢^アリ

第八繪有ヘシ

82

弘仁九年春天下疫癘起^テ天亡^ニノ人不知数^ニ天皇

降^ク震筆^ヲ一^ツ般若心經^ヲ写^シ御在^ニ當寺^{ヨリ}大師^ヲ囑^リ唱

導^{トシ}大覺寺^ニ開題^ノ梵筵^ヲノへ御在^{スニ}未吐^ニ結願^之

詞^ニ蘇生^ノ族路^ニタ、スム夜反^ノ日光赫々^{アリ}同十年二月

十一日官符被^レ下^ニ治^リ省^ニ云其年冬雷恐有疫水

宜^{ヘシ}令^ニ空海法師^ニ於東大寺^ニ為國^ニ建立灌頂道場^ニ度

中及三長齊月修^シ息賢^災增益^之法^ヲ以鎮護^ニ國家^ニ

云依之大師^音。无畏三藏修練^ノ往躡^シ尋給^ニ自虛空

藏尊^ノ宝前^ニ當^{レリ}歡喜身^ニ餘^テ則舊跡^ヲ掘^ケ青龍

寺ノ風範^ヲ摸^ツ新^ニ建灌頂壇^ヲ向寶坐^ノ中心^ニ尺尊^ノ

第十卷

上・四十四ウ

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻

人玉^ヲ埋^ミ手^ニ三鉛^ノ金杵^ヲ運^テ八功德ノ闍伽井^ヲ囑^リ仏像

經論^ヲ安置^ノ道場^ヲ南院^ト号^ス今ノ真言院^{是也}

擇地^造壇鎮宅^ノ結界^ニ事終^シカハ任勅^{宣旨}每年度

中三齊^節ヲ點^テ息災增益^{秘法}ヲ奉行^シ給^フ金光

護國如意珠内證爰^ニ顯^ルサレハ大師承和二年始宮

中金光明會^{秘法}ヲ修^給稍有故者也

第九繪有ヘシ

83

南院三長修法^ハ只^一旦^非除^ニ疫水難^ニ還抽^玉金

光護國秘要^ヲ故為^ニ顯驗^ヲ大師自書^ニ四方雷王名

字^ニ打^テ舍那殿^ノ四面^ニ書^ニテ金光明天王護國之寺

額^ニ縣^ニ給^ニ南院西面門^ニ仍号^ニ國分門^ト本願皇

第十卷

上・四十五オ

二六七

第十卷

上・四十五ウ

帝以當寺一ノ一朝ノ惣国分寺給ケル只今弥被知一タリ
額縁ニ頭ニシ六天二神ノ形一ノ門内ニ築テ護摩壇一ノ修給

兩部ノ秘法一ノ依之寺中ノ天魔波旬悉ク彼門ヨリ

逝去テ後再ヒ不レ差ニ影一ヲサレハ此門前ヲハ惡鬼邪

神通ル事ナシ

第十繪有ヘシ

84

同十四年正月十九日大師永東寺ヲ賜テ撰ニテ當寺真

言院道場一ヲ更。濯頂院ヲ建并講堂等ヲ副テ師資相

承宗場トシテ年分度者宗分講師等申置給

ヘリ彼門流ヲ東寺ノ流ト号ス宗ノ官長ニ備ル人多當寺ノ

別當補ル事此大師勝躅ヲ守ル故ナルヘシ東寺ノ長者

第十卷

上・四十六オ

高野拜堂ノ時ハ經テ大和路一當寺ニ詣テ誦經ヲ修スル是
故有者也

第十一繪有ヘシ

85

承和元年二月去弘仁。年ノ般若心經秘譯可奉之由

勅定ヲ被下一ヨリテ再ヒ加テ添削一ヲ名秘鍵ト當寺真言院

諸德ヲ集メ命ノ道昌僧都ニ令講一給深義微妙大衆

催感涙一ヲ其後我親リ陪ニテ鷲峯說法延ニ聞此深文一豈

不達其義ニ哉ト表ヲ書テ奉一給ヘリ皇帝ニ同三年五月九

日廿一人僧ヲ真言院ニ置テ永ク定額ト留ニ食堂交一ヲ一

向ニ可レ令レ修ニ行三密法一ヲ之由依テ被下官符一同潤五

月三日實惠僧都圓明律師等ヲ蜜宗專當

令住ニ真元真俊等ノ廿一人ヲ弥興ヌ南院道場ニ又

其後嘉保二年遍照寺法務經範ト云人當寺ノ

別當ニ補セシ時高祖大師ノ本院頽落セル事ヲ深歎

思テ再ヒ成ノ修造一ツ至ス興行一ツ自尔以來大師ノ門葉ノ

中ニ備ニル專寺ノ寺務ニ時皆加ニ隨分ノ修治一ツ者也

第十二繪有ヘシ

86

高野山西禪院ニ明舜上人ト云人有求聞持悉地成熟ノ

人也无畏ノ舊壇大師ノ聖跡ナルニヨリテ永久ノ比真言院

詣待ケルニ紫雲忽ニ堂宇ニ覆テ渴仰殊ニ肝ニ銘シケリ

又東南院ノ聖慶得業ト申ヘ高那和須ノ化身觀

理僧都ノ再誕也尊師僧僧正嫡々ノ讓ヲ受ケ彼南

第十卷

上・四十六ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

院ノ管領之間常靈場ニ詣シムクイニ或時忽然トノ光

明顯現ノ照道場内外一ツ感應ノ至誠ニ可貴者也

第十三繪有ヘシ

87

治承ノ回祿ニ南院同炎上ス重源上人深此事ヲ歎

シケレル哉一ツ分ケ荒タル基趾ニ向テ泣々祈精シケルニ親リ

振鈴ノ聲聞ヘケレハ日々ノ影向ヲカシト大師誓給ヒケル

事ノ驗ト弥貴ク覺ヘテ久米ノ東塔ヲ撰テ多寶ノ塔ヲ造

寶珠ヲ埋給ヘル山科岡ニタテ兩部不二ノ尊ヲ安置シ奉リ

聖跡ヲ如元一ノ造ラント云フ願ヲ發シケルカ仏像ハ功ヲ終ヘ堂

舎ハ未企一早往生シヌ彼仏像今ノ東塔安置ノ仏是

也云

第十卷

上・四十七オ

二六九

第十卷

上・四十七ウ

上冊 識語

上・四十八オ

二七〇

第十四繪有ヘシ

88

大勸進聖守上人ト云人有重源和尚ノ而終功ニ事ヲ

悲ミ自身命ヲ捨廣ク知識奉加ヲ唱テ手自土ヲ運ヒ

地ヲ運ヒテ仏客僧庵如元造立早ヌ

第十五繪有ヘシ

此縁起繪詞二帖自有方令相傳處

破損之故加表紙訖

花叢末葉 實英

尊光院勝賢法印の相傳候

北林院成算

上冊 識語

上・四十八ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

第十一卷

89 文徳天皇御宇齊衡二年五月廿三日大仏御

頭落給へり同六月甲申參議從四位上藤原朝

臣氏宗使トノ見奉ル同二年九月甲戌修理東大

寺大仏司檢校傳燈修行賢大法師位真如

親王大納言正二位行右近衛大將藤原朝臣

良相等任下聖武天皇天平勝宝四年ノ勅

書上ニ唱トナユニ知識一可修福之由宣旨ヲ承テ觀進ス清和

天皇御宇修營事終貞觀三年三月十四日

開眼供養其日集ル人ニ被授十善戒一ヲ開眼師東

寺律師惠運導師藥師。律師惠達咒願

清涼院

實英

師元興寺少僧都明詮^{ミョウセン}明師^{ミョウシ}十人散花師十

人梵音二百人錫杖百八十人納衆三百八十人

甲衆二百人定者廿人合一千三口法會^{ホフクワイ}勅使^{テウシ}二

品賀陽親王三品時康親王四品本康親王右

大臣藤原朝臣中納言伴宿禰善男行事右

中弁藤原朝臣冬緒^{フユヅ}左。大夫在原朝臣行

平舞師^{フナノ}大唐文廣^{フナクワフ}富新榮^{フナササ}作^{フナツ}善現大

士多門天皇大自在天等^{シムトク}殊特^{ソトク}舞^{マシ}奏^{ソウ}シテ此時

或ハ自^{ヨリ}空^{ソウ}甘露降^{カンロク}リ或ハ玉降^{タマクワ}テ光^{ミツ}ヲサス時ノ人仏舎

利ト云ヘリ又紫雲^{ムラサキクモ}仏殿^{ブツデン}東ノ岡^{ミナト}聳^{タカビ}ク凡會日

奇特非^{トクアラセリ}一ニケリ

第十一卷

永享三年延宮本「東大寺緣起繪詞」翻刻

第一繪有ヘシ

90 當寺西室僧坊^ニ延義講師ト云人有リキ安居ノ間

大講堂ニテ講談^{コウタン}ヲ被修延義導師^{フシノ}勤^シ日大佛殿ノ東ノ
登廊^{トウロウ}ニ翁斧^{ウヨウノ}ヲツカエテ居タリ向ニテ大德^ニ五重

マテ問答ス翁大德ヲ讀^{ホメ}メ終リテ重々ノ問答ニ神^シ

精既^{セイキ}ニ消ヘ身軀又疲^{フカレ}タリ急身可療^{キヲト}云フ大德アセ

ヲ巾^{ノコイ}ヒ頭ヲ探^{サグ}、熟瓜^{ジュカ}ノ如ナリニケリ又昌泰^{シヨウタイ}ノ比彼

延義大德當寺ノ別院天智院ノ八講ヲ勤シ時聽

聞衆ノ中ニ論義スヘシト進ム七大寺ノ僧皆大德ノ弟

子ナルニ依テ諸人^{ヘ、カ}憚^レリツ、問役ヲ退ク論義スヘキ

人ナシ然ニ一人ノ翁進出ツ、論義ヲ楊其詞^{コト、ハ}

深ク義理妙也衆人恠^{オヤシム}レ之ニ大德論義ヲ牒^{コト}ノ一々答^{コタ}フ

下・一ウ

第十一卷

下・二オ

第十一卷

下・二ウ

翁ノ曰ク三ノ論義ニ一ハ既答一ハ未判一ハ不答初果聖

者ノ智分ニハ過タリ我ハ大聖文殊也トテ權滅様失

ニキ此大德奉逢ニ文殊一事。生中ニ三度也ケリ

第二繪有ヘシ

91

延喜元年天下瘴^{カニトウカンコフヲヘク}熾起^{イロヒ}多人死已ヌ朝儀是

煩^{イヘリ}五丈ノ千手ノ御前ニテ百部百座ノ仁王般若

經ヲ講讀セハ此難ヲ可遁^{ノカル}之由ヲ諸道勘奏シ

侍^{ヘリ}シカハ勅^{チヨク}定^{サダ}トノ七大寺ノ僧侶^{リョブ}集^リテ當寺大講堂

ニテ法會ヲ勤行ス効驗新^{カクシヤク}ニノ^ニ疾疫立可^{シツヤク}ニ留^{トマ}ル

其以來毎年ノ勅願^{チヨククワン}トノ六月廿八日解除會トテ被

行^{ヲコナ}ニ々疫神ノ部類眷屬ノ質ヲ顯^{スカタ}シ祭リナコメ

第十一卷

下・三オ

奉^{ホウ}ル諸國ノ中ノ疫難^{エキナン}ニ逢^{アハ}フ者此會ノ砌ニ參詣シ

ヌレハ速^{スミヤカ}ニ其難ヲ遁^{ノス}レ侍リ

第三繪有ヘシ

92 醍醐天皇御宇延喜十七年十二月一日大講堂三

面ノ僧坊焼^{シヨウ}失シヌ此時煙一天ニ覆^{フイナ}遥^{ナヒク}東大寺ノ

炎上ニ非スヨリハ此程^{コト}ニハ不可有^{アハ}ニ御門驚^{オドロキヲホシメ}思^{オモ}食^シヲ騎^キ

馬ニテ頓^{ケイ}ニ行幸ナル月卿雲客騷^{サワキマイリ}參^{シカム}ケリ而^ニ三面ノ僧

坊ニ年来僧有リ鑽仰^{サンキヤウ}ヲ事^フトノ武藝^{ケキ}ノ儀^{ナシ}ナシ乍^{ナカ}去^{サリ}

常ニ大ナルマサカリヲ以テ文机^{フフクエノ}下ニ隱^{カク}置^ツク人恠^{アヤシミ}ヲ成^ナテ

是ヲ問^トフ志ス事有^リトテ不述^{ノヘサリ}レ干細^{コノ}一^{ヒト}ヲケリ講堂焼^{シヨウ}失^シノ

時猛^{ミヤウ}火大ニ楊^{アウツ}テ大仏殿ニ移^{ウツ}ラントセシ時虛空ニ聲有^リテ

大殿風ヲハラム後戸ヲ切トナン其時彼僧ヲ

以テ大仏殿ノ後戸ノトホソヲ切破シ時仏殿ノ内ヨリ

大風猛シク吹出テツ、炎ヲ吹返テ火難ヲ留彼僧

忽ニ失侍ニキ此炎上ハ北野天神朝家ヲ恨奉テ成

給ヘル災也トソ金寸藏王日藏上人ニ示給ケル其後

承平五年五月九日大講堂造畢テ御供

養侍キ

第四給有ヘシ

93

延長元年平將門幼少ナシ時銀堂ノ後ノ谷ニ住ス

山上ノ君ト云其性極テタケク童子ト遊フ時更ニ

敵對スル者ナン成長ノ後朱雀院ノ御宇天慶

第十一卷

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・三ウ

年中ニ部類ヲ引率ノ國分ノ門ヨリ出ツ其後ハ奉ト

傾天位ニラス村上御時天曆ノ比左衛門督藤原

忠文ノ大將軍ニテ貞盛秀郷等数万騎ノ官

兵ヲ率ノ欲スルニ征討セント將門ニ人力難及ニシカハ可祈請

佛神ニ之由有宣下ニ法花堂ノ執金剛神ノ前七大

寺諸僧祈請セシ時彼ノ靈像俄ニ隱給ヌ諸人

成レ恠程ニ大ナル蜂ト成テ合戦ノ場ニ合戦場ニ飛

行テ將門ヲ指ントスルニ將門劔ヲ振テ片羽ヲ切落ス

然而終ニ差敵ツ歸テ本壇ニ立給フ像ヲ見奉ルニアセ

流レ左ノモトユヒ切レ落チ給ヘリ從其ニ以降為王城鎮

護一向北ニ給ヘリ

第十一卷

二七五

下・四オ

第十二卷

下・四ウ

第十二卷

下・五オ

第五繪有ヘシ

第十二卷

夫三論宗ハ大師釋尊昔楞伽摩耶ノ二經ヲ

説給^{トキマシ}時正^{トキマシ}我滅度ノ後南天大國ニ龍樹井ト

云フ大德ノ比丘有テ説ニ大乘无上ノ法ヲ能^ヘ可^シ能^シ

破^ハ有^ル無^ク見^ルヲ通^ス記^シ給^フニ果^ニテ如來滅後ニ六百

年ニ菩薩南天ニ出テ廣^{サラス}造^ス二千部ノ論ヲ中論十二門

論ハ是其精要也龍樹ノ上足提婆井又百部

論ヲ製^{セイ}ス百論ハ其ノ中ノ心也以^テ此三部ノ名三論ト誠^{マコト}是一

代通申ノ大教ニ藏說攝ノ秘典也於是羅睺羅

井ト云人アリ又是龍樹ノ弟子也然ニ任テ龍樹ノ遺

囑ニ以提婆法ニ附羅睺ニ傳羅睺此法ヲ於沙勒沙

車王子ニ傳也。々々龜茲ノ羅什三藏ニ凡今此三輪ハ遺法

住持取初ノ宗ト盛ニ弘ルカ故ニ概テ此論ヲ造注

尺一人七十余家アリ羅睺青目清弁无着天親

等は也晨旦晉ノ安帝ノ世後秦ノ弘始三年十二

月ニ羅什三藏始テ秦地ニ來テ譯出シ般若法花ノ

七十四部ノ經論ヲ專以三論ヲ心要トス負笈ノ門徒三

千有シカ共寫瓶ノ上足ハ八人生肇融徽等は也曇

濟道朗ノ兩師普ク隨八宿ニ共ニ受三論ヲ々々宗中

夏ニ廣ク門風上都ニ盛也但梁武帝ノ代ニ及有

智藏等ノ三大師ニ大ニ興ス成實宗ヲ武帝信之

給ニ仍ニ三論暫ク衰微シキ此時國貧令ニ穀菓^{食之}門

成^不陰陽可順ニ災恠^イ堺ニ普^イネカリシカハ武帝三寶門

驗ナキ事ヲ歎諸國ノ相人ニ問給フニ一同ニ奏シ申サ

青衣ノ比丘ヲ請ノ令講經ヲ給ハ必宇内感ニ風雨

可トナン順時ニ武帝則勅使ヲ遠近ニ遣シ青衣ヲ山林ニ

令求^給フ爰ニ道朗大師攝嶺山籠テ常ニ着シ青

衣ヲ久ク修ス妙道ヲ勅使伺得テ急キ奏此由ニ

第一繪有ヘシ

95

武帝大ニ悦テ自幸シ彼山法師鳳闕ニ嶺シ給^給大師勅

應ノ講金光明經一ツ時ニ天龍^歎勸喜ノ甘雨普ク天ニ降リ

陰陽時ニ叶テ穀菓率土ニ豐也帝感ノ大師可宗

第十二卷

永享三年延宮本「東大寺縁起繪詞」翻刻

下・五ウ

問給フ法師三論宗也ト奏ス帝曰ク不ノ知法藥隱

事ヲ教要久口依テ令レ不弘^レ使民^ニ大ニ苦ムトテ則仰テ三

大師ニ各率ノ六十人ノ門弟ニ皆捨テ成實ニ令學三論ニ

其後僧詮法朗相續テ業ヲ受ク吉藏大師哀

承ノ弘宗ニ藏師殊ニ製ノ八十餘部ノ章疏ニ委ク頭

闕中ノ祖承ニ久ク仕テ三代朝ニ弘扇山門ノ宗風ニ内證^衆ノ

縁有事ヲ知リ歷却侍仏ノ告ニ記述ノ經旨叶ヘル事ヲ頭ス

智者禪師ノ詞ニ凡厥製作ノ美談一化、靈德不能

楊盡

第二繪有ヘシ

96

日本人王第三十代磯城嶋金指ノ宮ニ天ノ下知召欽

第十二卷

二七七

下・六オ

第十二卷

下・六ウ

明天王十三年ニ百濟國ヨリ始テ奉仏法ヲ推古天皇

三十三年ニ吉蔵大師ノ弟子高麗^{コウリ}眞僧惠灌法

師以三論ヲ自外國ニ来リ本元興寺ニ住ス此間七代九

十余歳未ダ天下ニ弘宣スル事ナシ第三十七難波

豊崎ノ宮ニ天ノ下知シ召ス孝德天皇ノ御宇世ニ災旱有

民含^{モウ}愁憂^{シウウ}ヲ爰ニ天皇訪嘉例於梁武^{リョウブ}一岷^ミシ惠灌

於禁闕ニ着青衣ニ講スル三論一事偏ニ道ニ偏道朗ノ

舊跡ヲ模シカハ甘雨ヲ降ラシ霑^{ツルホス}九土ヲ事親法力ノ新驗^{ナルヲ}

得タリ殊ニ有テ教感ニ則被補僧正ニ我朝僧正始也更ニ

蒙宣旨^{ミョウケンシ}ヲ弘ニ海内於三論^福。亮惠輪等ノ唐和

僧九人同被成僧正ニ本元興寺ニ住ノ為三論

第十二卷

二七八

下・七オ

宗ノ棟梁ニ其後岡下ノ宮ノ御宇ニ岷百濟国恵

宗法師ヲ又令講三論^{ヲ給}ヲ是皆明時ノ佳猷^{キョウ}ナル

者哉

第三繪有ヘシ

97 平城天皇第三王子真如親王ハ遠惠灌僧正ノ

後比毘^ヒトノ糸ク二諦八不先匠ニ烈^給ヘリ福亮神泰宣

融玄隲道詮祖ヲ隔事五代ニシテ年記還也ト雖モ

法ヲ傳ル事一轍ニシテ冥魯^{ミョウロ}未^スタ誤^ヲニ道昌僧都又

宣融ノ資明澄ニ傳テ宗ノ雄長タリ智蔵僧正神泰ニ

同福亮ニ受テ非究ノミ宗ノ奥旨^{ミミミ}ヲ宗ノ奥旨^{ミミミ}ニ依勅

入唐謁^{ケル}ノ吉蔵大師ノ孫弟元康法師ニ重^メ聲宗

義ニ版朝ノ後弥流傳ヲ盛ニセリ道慈律師始テ入此宗ニ

伺宗義ニテ大寶元年ニ含テ詔ニテ渡海元康資勳

隄法師ニ盡奥蹟ニテ凡留學十八年ノ間覺且太宗

雖廣ニ業以三論ニテ為本ニ養老二年ニ版朝ノ建大安

寺ニテ興此宗ニテ是ヲ授慶俊善議ニミミ大德傳勤操安

澄ニ弘法大師願曉律師等勤操ノ入室トシ哀承スル

處也然嵯峨天皇御宇弘仁四年ニ召勤操法師ニテ

被定官於律師ニ撰テ取勝王經ニテ令開講於正殿ニ當

其結願ノ日ニ集メ諸宗ノ雄才於紫宸ノ皇居ニ争ヒシ

義道ノ曲直於智弁ノ鉾栢時以勤操ニ為座主ト

爰律師可立ノ義越テ群賢ニ高ク上ノホリ可レ述

第十二卷

下・七ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

幽旨秀テ諸家ニ遠歩ム因茲ニ敵宗摧刃論士靡

旗ニ皇帝褒感ノ餘則任少僧都被補造東

大寺ノ別當ニ

第四繪有ヘシ

98 導師僧正法印大和尚位聖寶ハ田原天皇第

一皇子春日親王四代ノ孫兵部大丞高聲王御息

也天長九年誕生シ承和十四年生年十六歳ニテ從テ

當寺別當真雅僧正ニ出家得度シ任テ弘法大師ノ

遺誠ニ當寺戒壇院ニテ受具足戒ニテ名ヲ定ム聖寶ト

可為僧正ノ譜弟ニ之上者雖可有急真言受法

守テ祖師ノ遺命ニテ先兼學ス顯宗ニテ爰當寺三面ノ

第十二卷

下・八オ

二七九

第十二卷

下・八ウ

僧坊ノ内東ノ面第二室建立初⁹ 鬼神^{カキリ}栖非僧

侶居^ム所^ニ内作^{ナムトモ}無^テ荒室^ト名付^{タリ}下^ト此可

可成鑽仰之切^ニ之由寺家ニ乞請給^フ諸僧不^ス誠

シカラ^ノ思任望^ニ門葉相承可經永代^ニ之旨寺官

連書^シ加證判^ニ奉^{リヌ}導師^ニ

第五繪有ヘシ

99

導師得此室^ニ新開燐雪之窓^ニ至鑽仰之勤之處

鬼神^{カキリ}。現^ル種々之形^ニ雖誤^{アヤ}タントスト不得侵^{コフ}或夜排^{カケテ}燈^ヲ向案^ニ

通夜學問^シ給^{ケル}ニ茶坏^ニ水ヲ入^テ傍置^給ヘリ夜半^ニ至

大蛇ノ形天井ヨリ頭^{カサ}ヲ但^レ口ヲアキテ導師ヲ欲奉^ム吞^ム其影

茶器ノ水ニ写^ル尊師見^之之ヲ拔^テ釵^ヲ切落^給ツ次朝

二八〇

第一卷

下・九オ

妻鬼現人形^ニ尊師ノ前ニ來^テ申^ス様此坊ハ年來ノ住所

也然^ラ今失夫^ト在所^ニ奉^レ奪^レ願^ハ垂^テ慈悲^ニ住^{スル}

事ヲ許^シ給^{エト}申尊師不^ノ免是^ニ國分ノ門ノ西ノ河ハタ

ニ杜^ヲ立^テ住^所ヲ与^給ヌ

第六繪有ヘシ

100

尊師住東室^ニ學釈教^ニ競寸陰事^ニ重歲月^ニ

間初^ニ元興寺ノ願曉律師^ニ田宗僧都^ニ習^三論^法

文^ニ究^ム智藏道慈^ノ兩流^ヲ願曉殊^ニ並^{ヘテ}二流^ヲ傳^ルカ

故^ニ彼^ヲ為^本ト東大寺^ノ平仁大法師^ニ法相^ヲ傳^ヘ同^キ玄

承^永大法師^ニ受^ム花嚴宗^ヲ宗々皆蹟^ヲ究^メ給^{ヘトモ}為^ニ大^依

師真雅等ノ本宗^ニ以^三論^ニ本^ト給^フ然程^ニ名望^秀繼

第十二卷

下・九ウ

林ニ聲譽達シカハ紫楚ニ清和天皇ノ御宇貞觀十一年生^年

三十八ニ東大寺三論宗^トシルシ被^下官符ヲ興福寺維^下

大會研學ノ堅義ヲ遂テ大乘義章ノ聲聞賢聖義

并ニ因明、二空比量義ヲ^ト立、五問十題疑開^{卷キ}

因内立破義道月明也今至マテ三論宗^ト堅者以賢

聖義^ト立^トスルハ此跡ヲ追ナルヘシ

第七繪有ヘシ

101
當寺一人寺官家富財豐也然而哀慳貪ノ

罪ノ深事^ト何ナル事ノ有シニカ滿寺ノ大衆ヨリ職掌下部ニ

至マテ与衣食ニ可行布施ニ雖何事^{ナリト}我其事ヲナスヘシ

ト語給ヘルニ有マシキ事ヲ案ノ申ケルハ賀茂祭日

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

第十二卷

下・十オ

程ニテ唐蛙云フ物ヲ太刀ニハキ女□牛ニ乗テ一条ノ大路ヲ

大宮ヨリ河原マテ我ハ東大寺ノ聖寶也ト名乗^テ

渡セ給タラハ施ヲモ行シナント申尊師サラハトテ大仏

御前ニ催テ衆會^ニ人誓ヒ衆ニ契テ去給マサテ祭近ク

成ニケレハ南都ヨリモ人多上テ一条富小路^ニ棧敷^打

集テ見侍ケリ寺官上座モ同有サル程ニ見物者ノ

ユ、敷ユスリ^{イシム}何事ニカト見レハ尊師云シマ、ニ出テ多^{立テ}

多^多。童部ヲ召具ノ棧敷ノ前コトニ吾ハ東大寺ノ聖寶

也寺官慳貪上座ト云フ者ト諍ヲシテ渡ル也ト名乗リ

給ヘリ

第八繪有ヘシ

第十二卷

下・十ウ

第十二卷

下・十一オ

102 彼上座^ニ靜負^ムタル上ハ任約束^ニ運多^ノ財物^ヲニ満寺^ニ

施シ侍シカハ己カ^ヲ灌罪^キ垢^ヲ一人ノ助^ケ疲^レヲ御門此事ヲ聞食^ヲ

聖寶ハ捨テ、捨テ我身^ニヲ人ヲ導ク者也尺迦如来コソ角^ハ

御ワシマシケレ末代難有人也トタイト、御帰依深^カ

リケリ同事無方ノ化用誠ニ貴者歟

第九給有ヘシ

103 尊師^ノ顯宗ノ學業功漸^ニ也^{ナリ}シカハ依為本業貞觀^ニ

三年生年三十。随テ真雅僧正^ニ付十八^道尊ノ軌則^ニ

受無量壽ノ秘法^ニ僧正逝去シ給シカハ付テ高野後僧^ニ

正真然^ニ傳兩部ノ大法^ニヲ尋先師附法^ニヲ属源仁僧^ニ

都^ニ官符ヲ申賜^ヲ元慶八年ニ生年五十三東

寺ノ灌頂道場ニノ受傳法灌頂ノ阿闍梨位^ニヲ受職

儀莊嚴誠ニ巍々タリ其後印璽秘決究メ奥蹟^ニヲ

薰修行業越タリ等論^ニ依之^ニ遂ニ繼キ先師僧正ノ

跡^ニヲ寛平二年ニ貞觀寺ノ座主ナサレ同三年被授

大法師位^ニヲ同六年ニ親^レ被^レテ召清冷殿^ニ給^ニ律師ノ官符^ニヲ

則法務ノ職ヲツカサトリ備東寺ノ長者^ニニ同九年ニ任

少僧都^ニニ昌^ヲ。四年ニ轉シ大^ニ延喜二年權僧正^ニナサレ同六

年ニ正ニ移リ給キサレハ大師ノ本院真言院又業々

相承シ給ヘリ又貞觀末ノ比山城國宇治郡笠

取山西首西峯ニ登テ依テ地勢ノ相應^ニニ取樹下ノ

草^ニヲ結菴居^ニヲ拂石上ノ苔^ニヲ安置ス尊像^ニヲ依為幽

閑寂寞地ニ獨住練行栖トシ給ヘリ云延命院ト是也

雅昭如意院堂ハ其後造制ヘ給ヘリ依思未來ノ

住持ニ延喜七年ニ以此所ニ成願ニ行フ仏事ニ業

師堂五大堂ハ其後ノ建立也此開山藍觴瑞雲天

マミエテ示シ密教ノ相應ニテ靈水神呼ハレテ西酉ノ佳名ヲ

残セルナルヘシ禪洞遊止此マテモ金峯山ニ毎日參詣有

ケリ或時吉野ノ山上ヨリ赤石ノ長七尺計リ廣サ一尺計ナルヲ

脇挿テ東大寺ノ東室ヘ歸テ石ヲ加持ノ荒室攝文坊ノ

樹下埋テ結界給ヘリ遺弟ノ羔ナカラシ事ヲ示給ヘルナルヘシ

第十繪有ヘシ

第十三卷

第十三卷

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・十一ウ

104 夫一乘井ノ兩峯ハ歷事修行ノ直道即凡入聖ノ徑路

也先井ノ峯云フハ攀臺月輪莊嚴圓滿ノ内庫廻スニ

凡眼ニ隔仏眼ニ四重五相純熟具足境界歩下地

自是上地也始ハ利生平等ノ熊野ノ權現大悲和光曇

ナシ終ニ斷障成徳金寸藏王大智ノ勢力緩ナラス然昔

天武天皇御宇大和國茅原里ニ役ノ優婆塞ト

云フ人アリ始テ開荒途ニテ永導ク後學ニサレハ至マテ弘

法智證等ノ賢哲ニ皆入テ此峯ニ斗敷ノ行ヲシ給シ大蛇

栖事有テ其跡絶テ數年無リキ入人ニト尊師歎此事ヲ寬

平七年ニ生年六十四ニテ晦ノ山臥トノ吉野山ニ入給安居

谷ト云可ニテ大蛇擧テ首欲敵ニト尊師扼法威ニ給シカハ

第十三卷

下・十二オ

二八三

第十三卷

下・十二ウ

蛇恐テ逃ケルヲ尾ヲ踏テ終ニ退ケ給スサテ以真言、三部經ヲ

安シ靈山峯ニ給フ彼峯ヲ号忿怒月猷峯ト其後諸國

修驗輩ヲ喰霞臥雲ノ行人于今无絶、次ニ一乗ノ峯云、

人理教行果悉円乗、行シ開示悟入併仏道ニ入ル一度、

臨此峯ニ輩ハ類衆罪於露ニヲ易レ消噓テ霜ト无跡

葛木山是也則又任役ノ優婆塞ノ舊跡ニ四十九院ヲ

巡礼シ廿八宿ヲ經行シ給ケルニ金寸山ノ宿ニ逗留シ給シ時

役行者出現ノ含歡喜ノ咲之間僧正渴仰ノ餘演テ

座具ニ合掌ニ唱テ南无金剛山中法基菩薩ト三度

礼シ給シカハ行者又正シクノ威儀ニ唱テ南无補陀落山大聖

如意輪觀自在菩薩ト三度拜シ返シ給ケリ其大聖化

第十三卷

下・十三オ

来テ御在ケル上ハ不及申ニ事ナレ共普門示現ノ應用不

簡像末邊鄙ニ誠難レカシ有ヘシ抑考ルニ舊説ニ聖德太

子在世ノ昔諸誓テ示シ給ハク我此國ニ受生ニ事三度名聖、

字ヲ付テ同興法利生セントナム

第一繪有ヘシ

105 尊師當寺ニ歸リ給テ安居谷ニテ踏エシ蛇ノ逃去ントテ尾ヲ引答シ

程ヲ知ントテ繩ヲ踏テ人ニ引スルニ二百人ノ曳マテハ尚不及其ノ力ニ

三百人ノ曳時蛇引シ程也トテ放ツシ給ケリ

第二繪有ヘシ

106 文德天皇御宇齊衡年中平城第三皇子真如

親王修理東大寺大仏司傳燈修行賢大法師位被授

金那ノ金容ヲ修理シ給フ其比造東大寺講堂ノ檢校ニ

補シ觀賢ヘ任ノ同別當ニ遂講堂修造ヲ給其後延

喜二年當寺ノ中門ニ長二丈余ノ二天王像ヲ造立請

千二百人僧ヲ設大法會ヲ飾ル供養道儀ニ是勅會タリ

シカハ被下勅使一捧告文被テ行勅施ニ凡處々ノ興隆細

々ノ行事不可稱計一

第三繪有ヘシ

107

大和國虚空藏寺云寺弘法大師求聞持法勤

修時明星闍伽井ニ降り駄都峯洞ニ涌出ノ靈驗揭

焉也小野篁擬シ深信ニ檀越ト成テ精舎ヲ建立ス即

大師自刻木造リ虚空藏尊ノ像ニ書テ銘額ヲ打鳥

第十三卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・十三ウ

居ニ什物ヲ殘シ給ヘリ實惠真雅真然真紹等

相續ノ住持ス爰尊師正受真雅ノ讓ニ此寺ヲ管領ノ間

自尊像ニ薄ヲラシ更ニ刻テ二天像ヲ制テ安置シ永代門跡

相承ノ寺ト成シ給ヘリ

第四繪有ヘシ

108

平城左京五條六坊大安寺邊一伽藍名。積寺。是

大藏卿正四位下佐伯宿祢麻毛利并舍弟造東

大寺長官參議正三位佐伯宿祢今毛人等官

符ヲ給フ珍財ヲ投東大々安兩寺ノ地ヲ買得ニ國家ノ御

為ニ建立スル所也檜皮葺ノ五間堂一字金色藥師

如来丈六像同色脇士日光月光二菩薩像各一

第十三卷

下・十四オ

第十三卷

下・十四ウ

軀檀相、十一面觀音像一軀ヲ安置ス草創以來家門
氏、僧等專此寺ヲ興ス角テ經テ百三十二年ヲ延喜四年

佐伯氏、僧東大寺花嚴宗、道義律師東大寺

大安寺兩寺ノ別當ヲ兼帶ノ間氏寺ノ衰微スル事ヲ

歎思テ七月二日以三百余人ノ々夫等一ツ彼寺壞壞渡

東大寺南大門、内東ノ脇建テ、弘法大師、南院對

号東南院ト氏、法師真雅、附弟トノ依為真言三論

棟梁永奉讓尊師一隨而同五年今毛人卿ノ曾

孫正六位下佐伯宿祢高相等ノ氏人連、暑ノ僧正

聖寶律師觀賢ニ讓リ奉ル由シ扶捧テ寄附ス抑彼

南院ハ大師密宗、本院此東南院ハ大師俗家ノ氏

第十三卷

下・十五オ

寺也共ニ當寺門内ノ左右ニ在テ尊師ノ掌ニ入ル感應
因縁只ニハ非ル者哉

第五繪有ヘシ

109 僧正讓ヲ得テ延喜六年ニ重テ受政所、證判ニ同七年更

立應量坊一ツ号院主坊ニ永代々ノ院主坊ト定メ給ヘリ前池ヲ

堀給シカハ五色ノ蓮花忽ト出生シキ羅什三藏ノ法花ヲ譯

セシ時庭前連理樹生、云此類ナルヘシ池岸室ノ前

石アリ是醍醐ヨリ吉野ヘ日詣時是ニテ日中ノ時行ヒ

給ントテ是ヲ濯給ケル石トナン申傳ヘタリ其石今ニ現在

亦池ノ邊ニ一間四面、仏閣ヲ立テ号院主堂是三密

修練ノ道場也造壇儀式ハ三國相承ノ法則大師

門内ノ塗壇外ハ其類希也道場東ニ建經藏ヲ異朝

傳來ノ聖教顯密祖承ノ正本三論本供文書調

度勘録ノ公驗本尊道具聖財世寶三衣一盃角

杖草鞋ニ至マテ自筆起請置文ヲ加テ悉ク是ヲ納メ永吾

朝三論本所トシ又顯密兼學ノ淨場ト定メ給ヘリ觀

賢延徹等同當院ノ興隆ヲ營シヨリ宗徒林ヲナシ門葉

顯シケカリシカハ御門尊崇アマリ七大寺ノ惣檢校ニナシ

給フ七寺ノ師德ヲ仰テ皆門弟ノ礼ヲナス依之當室ヲ七

寺本院ト稱ス又當寺根本僧正良弁ヲハ一天是ヲ

貴テ号尊師ト今又其跡ヲ學テ七寺コソリテ聖寶ヲ

カシツキテ奉名尊師ト

第十三卷

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻

第六繪有ヘシ

延喜年中ニ當寺ノ南中門大蜂現不知其數ニ是辛

國行者カ化現カトテ人皆恐アヘリ尊師為治罰之向テ門

前ニ加持シ給ケレハ或小兒ニ詫ノ申ク我ハ是下野國二荒

山ノ地主明神也為害人ヲ不來ニ吾護ラント三論ノ宗法ニ

云願有テ此砌ニ臨メリトナム此時ニ尊師至一心ノ信敬ヲ合

十指ノ爪掌ニ崇メ和光利益ヲ悦玉願力本縁ニ則學テ

本山ヲ東南院内ニ池ヲ堀リ山ヲ築キ立兩所社壇ヲ飾

鎮坐糞ニ祭サレハサレハ堂社ニハ以蜂ニ使者トスル也其後數

万卷ノ金剛般若經ヲ轉読シ又其一々ノ文字ヲ石ニ書テ

池ノ中ニ嶋ヲ築給エリ今ノ中嶋是也

下・十五ウ

第十三卷

下・十六オ

第十三卷

下・十六ウ

第七繪有ヘシ

111

延喜九年四月、比ヨリ尊師普明寺ニテ風病相侵事有リ

寛平法皇御ユキシテ病ヲ訪ヒ御キ耆婆扇鵲カ跡ヲ訪シ

針炙湯藥ノ方モ驗无リシカハ終ニ七月六日行年七十八ニノ

手ニ結秘印一ヲ口ニ誦ノ密言一ヲ都率天ニ生シ給メ聖主此由ヲ

聞食テ右近衛將監紀淑人ヲ御使トノ調布二百端ヲ

遣ノ御誦經被行一僧正円寂ニ入給シカハ觀賢延徹元

方等ノ遣弟閻浮ニ縁盡テ鵲色為之一變シ寂滅期

至ニ鶏足忽ニ閑ヌル事ヲ悲テ面々ニ修ノ頭教密教ノ行業一ヲ備ヘ

追福追修、妙因一ニ左手シモ可有ナラネハ聖武皇帝ノ御陵ノ東ニ

當リテ地ヲ拂ヒ墳ヲ築テ納メ先師ノ遺骨一ヲ立寶籠一ヲ安メ仏

第十三卷

下・十七オ

像一ヲ地ヲ拂ヒ墳ヲ築テ納メ先師ノ遺骨一ヲ柳シ円寂塔一ヲ侍

墳墓ノ前ニ寺アリ名善鐘寺一ト是彼ノ墓所ノ伽藍也

善鐘寺ノ名稍故アル不能委注ニ

第八繪有ヘシ

112

尊師、附弟延徹僧都ト申ヘ尊師東室ニ住給シヨリ入テ門

室ニ觀賢僧正相共ニ嗜頭密、修學、葉功闡テ名

遂前途一ヲ但觀賢ハ不ケリ遂三會ノ講師一ヲハ延徹ハ頭密

共ニ可經一々可勤一々然者觀賢コソ受テ氏ノ誨一專僧

正相共東南院、事ヲハ興隆セシカ共兩宗前途、人ナレハ

トテ以延徹一當院、附弟ト定給ヘリサレハ尊師在世ノ

時自頭密兼學ノ驗シトテ作テ五師子ノ如意一ヲ汝勤

三會講師ニ時自顯密可持之ニ都末代マテモ備ン此講師一

輩ハ必可持此如意ヲ之由ヲナン永定テ經藏ニ納置給キ

依之ニ延徹僧都延喜十一年ニ東大寺三輪宗兼

真言宗トノ遂三會講師ニ時任先師遺命ニ彼如意ヲ

取出ノ是ヲ持シカハ七寺ノ學侶悉成テ門葉礼ニ唯舉テ兩

条ノ問題ニヲ重難ヲ略シキ又延徹法務ノ附弟ニ觀理僧都ト

云人アリ是附法藏第三祖師商那和修并ノ化身也天

曆六年ニ勤ヨリ三會ノ講師ニヲ七寺コソテ号本院先德ト村

上天皇御宇應和三年八月震筆ノ御講次被下

別勅ヲ令戰法相天台ノ宗義是非ヲ給シ時僧都■

為東大寺三論宗ト參ノ一座講師ニニ評判シ法藏良

第十三卷

下・十七ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

源カ對論ニヲ勘ヘ決ス聖教仲第カ雌雄ニヲ凡彼大小半滿ノ記

述宛經藏ニ有餘ニ從其一以降勤三會講師ニ人ハ皆

臨テ本院ニ受テ如意ヲ持之ニ則論義ハ略ス重ニ是ヲ名重ネ

論義ト七寺皆受導師ノ門風ニヲ述舉ル問題計ニ之旨ニヲ

是ヲ号送表白ト抑此如意ハ以水牛角ニ被造ニ面ニ五ノ

師子ヲ以銀ニヲ造テ付ク是ニ表密教ノ五智ニ故ニ名テ五

師子如意ト為顯密兼學ノ規模ト是則國家鎮

護重寶ナルカ故ニ若破損スル時ハ公家ヨリ付テ料所ニ令

御在修理ニ

第九繪有ヘシ

113 觀理ノ後法縁澄心濟慶有慶々信五代相續テ

第十三卷

下・十八オ

二八九

第十三卷

下・十八ウ

為顯密ノ棟梁一ト兼學ノ院務ヲツカサトル爰慶信法印ノ

時ニ當院ノ辰巳ノ角ニ建テ一梵閣一ヲ安置十一面ノ尊像ニ

學菴ヲ作制テ一塚トノ名妙音院ト今ノ妙音寺是也寛

治年中白川院高野臨幸ノ時且ハ依為シ寺務ニ以東

南院ニ可行宮^{トス}之由被仰下^シカハ則妙音院ノ西南々

大門^ノ東脇御所^ニヲ新造シ侍キ此時珍海已講ト云人有テ

木立風流ヲ作リシカハ莊嚴奇麗也キ

第十繪有ヘシ

114

慶信院務ヲ覺樹僧都ニ譲ル此僧都ハ因内二明ノ秀逸

也ケレハ觀理ニ對ノ東南ノ後僧都ト申キ覺樹恵珍ニ譲ル恵

珍僧都ハ右大臣源宗忠ノ息神ヲ藤氏ニ受ケ仏教師ニ傳

第十三卷

下・十九オ

シカハ明敏ハ性ニ備タリ等倫ニ无類ニ研覺ハ心ニ權タリ

洪業ニ泥ム事ナシ八幡ニ荒惣別ノ擁護^{カヲヘンカヲサレニアラキトモ}不非^{ミミ}觀^ミ畫

夜各三反^ヲ誓又肝ニ銘シケレハ常ニ春日ノ本社ニ向テ法施ヲ

タムケテ或時四町ノ神鏡忽然小ノ四面日輪ノ如クニテ池ノ

南ノ岳ニ現給リ僧都渴仰身ニ餘テ則彼可建テ社壇ニ

崇敬シ永外院ノ鎮持ト捧^{タテマ}祭奉ル依之ニ彼僧都ヲハ号感神

僧都トナム

第十一繪有ヘシ

115

治承回録ヲ時妙音寺同焼失シニケレハ本尊モ定テ炎ニ化シ

給ラント諸人悲アヘルニ此堂ノ前ヘ朱雀澤ニ仏聖稼穡ヲ

ナス是ヲ前田ト号ス彼ノ田ノ中ニ光ヲ指可アリ人恠之ニ高町ヲ

軀ヲ見ルニ十一面觀音ノ像麗然トノ无可損ニ自眉間ニ光

明ヲサシ給ケレハ各機感ノ不盡ニ事ヲ悦ビ泣々奉取上ニ侍ヌ

抑今本尊舊記雖幽ト尊師ノ御本尊ト申傳タリ測

知ヌ是香積寺安置ノ壇相靈像ヲ慶信法印ノ此可ニ

移シ安シ奉リケルナルヘシサレハ昔ヨリ靈驗聞ヘ有シカハ鳥羽院御

宇三十三所ノ靈像ヲ御奉請有タルニ今ノ像其隨ニタリシカ

トモ院主堅被キ惜申一今又カ、ル奇特ヲ現シ給ニヨリテ

後白川ノ法皇臨幸有御歸依ノ餘リ永三口ノ有職ヲ

寄ヲキ給キ

第十二給有ヘシ

116 治承四年十二月ニ平相國カ乱逆ヨリテ南都ノ兩寺悉ク

第十三卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・十九ウ

灰燼ト成シカハ諸宗聖教皆塵ヲ拂キ然而當院内

根本院主堂院主坊并大經藏計ハ炎難ヲ免レタリ

依之諸寺ノ學侶舉テ此院家ノ經藏ヨリ寫取テ再

法燒ヲ排タリ

第十三給有ヘリ

117 惠珍僧都ノ後聖慶道慶勝賢次第ニ相譲ル受ニ

勝賢僧正院主タリシ冠鎌倉右大將頼朝建久供養ノ

時東南院ニ寄宿スヘキ由申請侍シカハ僧正彼宿町ノ

為ニ急キ取立シ刻ミ重源和尚師資ノ儀タリシニ依テ專ニ

合力ヲ仏闍僧菴再舊儀ニ復シ侍キ其後當室ハ

尊師以來代々顯密兼學ノ祖跡院務ヲ掌ル事ハ

第十三卷

二九二

下・二十オ

第十四卷

下・二十ウ

誠ニ導師ノ冥助ヲ喜ト雖モ勝賢唯密ノ身トノ猶其憚

有トテ門弟定範法印ニ譲ル從其以来代々院務皆顯密

兼學ノ法匠トノ其儀タレル事久シ

第十四繪有ヘシ

第十四卷

118

大伽藍内西北ノ隅ニ當テ一塚ノ院家アリ尊勝院号其

監鵜ヲ村上天皇御宇天曆九年十二月廿五日正三位

中納言兼、民部卿藤原朝臣在衡正五位下山

城守左中弁藤原朝臣文範ヲ勅使トノ當寺別

當光智大僧都干時大法師仰テ帝王繼位太后皇太子繼

榮ノ為ニ朝中第一伽藍内一院家ヲ可建立之由被

第十四卷

下・二十一オ

宣下光智詔令ヲ含テ則奉テ勸請大日如来三世十

方諸尊聖衆天神地祇伽藍本願三代聖靈ヲ

先ツト三町地ニテ所謂一ニハ寺家成宛地今尊勝院ニニハ政

所三山地ニニハ唐院ノ西方此也此中ニ帝王太后皇太

子井藤原ハ氏繼榮龍花ニ及ヘカラン町ニ正ニ瑞相ヲ示給

エト良久祈念ス頂上第一ノ成宛地ヨリ紫雲聳テ三

町聖靈ノ御陵マテ覆ヘリ其間十町餘其程三時斗

日高山ヲ照ス初尅ヨリ影平地ニ普ネキ午之默ニ至ル奇特

已新テ建立殊ニ定リス

第一繪有ヘシ

119

然間此彩雲出現地於起立ニ五間四面仏闍一字十

三間、僧坊ノ二字ニ安置毗盧舍那如来尊像各一

鉢、樂師如来像二鉢十一面觀音延命菩薩梵天

帝尺四天王像各鉢已上十三軀尊像ニ備仁王般

若經尊勝陀羅尼以下法味ニ傳フ一乘廣大円

滿修多羅最勝義理於永代ニ專為花嚴宗

根本ニト可奉祈紫微官、長久ニ之由應和元年被

下官符ニ以来靜十玄縁起、華色於雪窓、前鏤

六相円融、月光於瑩幌門ニ遠奉鎮護百王聖

運ニ遙ニ要規スル千仏興現ニ處也

第二繪有ヘシ

120

西室ノ僧坊北ヨリ第三ヲハ云實相院ト法藏僧都ノ室也

第十四卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・二十一ウ

彼僧都此坊ニノ度中講最勝王經ヲ生馬ノ龍神現化ノ

冠者形ニ常ニ聴聞ス講説終テ後鞍馬道ニ曳テ暮ニ宿ス

人常ニ恠テ見ニ睡眠ノ時、複ス龍身ニ天下旱魃ノ人民憂

僧都是ヲ歎テ龍ニ雨ヲ降シテン哉ト問給フニ龍ノ曰天神地

祇相ヒ議テ天旱アリ与ル雨ニ事非龍ノ進止ニ然而上人ノ

命難ニ背ニ雨ヲ降シ侍ヘシ定テ天罰ニ逢ハム乞必後世ヲ訪ヒ

給ヘ雨ノ降ラン時可有驗ニ去ス玄雲俄ニ覆天ニ甘雨忽

灑ク地ニ其時龍血雨共ニ降ル僧都見テ之ニ悲涙无ノ

限ニ慙ニ後世ヲ訪侍キ

第三繪有ヘシ

121

法相宗、法藏僧都、惠燈照佛界ニ戒珠莊法鉢ニ此

第十四卷

下・二十二オ

第十四卷

下・二十二ウ

故ニ琰魔法王書金泥法華經一供養導師トシ給ヘリ

其請書并布施ノ被物糸一縮白疊等當寺ノ

寶藏ニ有請書ニ云

敬頌 乞閻魔王所

諸宗中法相宗獨順佛智諸家釋中慈恩玄贊

究竟釋一乘大德玄贊朗願勿辭

年月日

謹々上 閻魔法王上

凡琰魔法王修因感果檢断トノ罪福二門ノ憲章新

也然ニ法相宗ハ專定メ有為性相一ヲ稠シク談業因果果

道理ヲ法故ニ叶靜息大王心ニ預シ今ノ囑請者歟琰

第十四卷

下・三十三オ

王使持請書ヲ西室ノ僧坊寶相院ノ前ニ來レリ

第四繪有ヘシ

122 法藏僧都請應琰魔王宮參シ說法終リテ冥官布施ヲ

置時座ヲ退ツ膝ヲ屈テ申サク七珍万寶モ不_ム可_ム希_ム御布

施ニハ只悲母ノ生所ヲミセ給ヘト奏シ琰王下テ宣_ハヲ尋給シニ獄率

等勘ヘテ焦熱地獄ニ有_ニトミセ給ヘト奏シ_{ヒヒヒヒヒヒ}申_ニ冥官ヲ指南

ニテ法藏ヲ遣彼ニ獄率城ノ門ヲ叫テ宣下ノ旨ヲ含_ニ黒_{キハ}

物影樣ナルヲ鉾_{サキ}ニ貫テ獄率指出セリ法藏願クハ

元ノ形ヲ見セ給ヘト云フ獄率活々唱ヘテ本ノ質ニナシツ法

藏泣々母_ニ向テ取後ノ命ニアハサシ事ヲ悲ミ臨終正念ノ

知識セサリシ恨ヲ述ルニ罪人ノ苦患程ヘヌトテ獄率大ニ怒テ

鏡ノ中へ投法藏音ヲ揚呼テ云ク忝クモ琰魔ノ應ニ御布施ニ

預ル悲母也片時ノ暇ヲ許ノ今一度見セ給ヘト臥倒テカナシメハ

獄率又如本出セリ法藏母ニ向テ何ナル善ヲ修ノカ此苦免

給ヘキト云フ母ノ云ク一日書供養ノ法花經ノ功德ニシクハ无ト

ナム法藏泣々琰魔應ニ歸テ事ノ次第ヲ奏スルニ是皆吾

咎ナラス自業自得果ノ理リ衆生皆尔也トク々々姦婆ニ返

リツ、犯テ罪業一ツ此可ヘ向フ事ナカレト普ク人ニ語ト琰王勅答

給リテ閻浮ニ被返侍

第五繪有ヘシ

123

任先妣ノ命ニ速ニ法花經頓寫セシカハ其ノ夢ノ中彼

母既ニ得脱ノ由ヲ示シ告侍ケリ

第十四卷

下・二十三ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

第六繪有ヘシ

124

法藏僧都天帝釋ノ請預迷慮八万ノ頂上リ善

見宮ニ至リテ瑠璃、觀音ノ像ヲ供養シ侍キ釈提桓

因感歎ノ餘リ有首ヲ傾ケ諸天ニ命テ種々ノ布施ヲ

被キ置其間經四十九日ケリ門弟等僧都入滅ノ由ヲ

思テ彼為メ修ノ追善ヲ。當テ第七々日ニ殊ニ佛事ヲ營ム

處ニ僧都天上ヨリ返テ住坊修善ノ取中來レリ諸

人奇異ノ思ヲ成シ侍キ

第七繪有ヘシ

125

信源得業云者夢中琰魔宮參リス琰王汝

何ノ可ニテ何ノ教ヲカ學セント問給フ信源日本國東

第十四卷

下・二十四オ

二九五

第十四卷

下・二十四ウ

大寺^{ムテ} 三論宗ヲ學シキト申ヌ琰王又彼宗義ヲ問

給信源不生亦不滅不常亦不斷不一亦不異

不来亦不出ト答フ又サ程ノ人ハ何ノ此所ヘハ来哉ト尋給フ

信源答曰ク法本来不生ナレトモ業因縁ノ故ニ人間生

シキ又縁壞スルカ故ニ此所ヘ来ル如此次第ニ八不ノ心ヲモツ

テ申ス爰ニ琰王礼シ給テ曰ク汝非可我断罪之人一速ニ

皈人間ニツ、尚可學彼宗ニヲトテ被帰ニ其帰シ路ニテ當

寺ノ花嚴宗行秀五師ニ行逢テ信源此由ヲ語^ム

行秀又語テ曰ク我モ同人間ニ返ルト云信源夢覺^ム

門徒ニ語ル此由ニ同朋等急キ行秀五師カ許ヘ行テ尋ニ

行秀此曉俄ニ絶入ノ只今蘇生シタル由返答ソキ

第十四卷

下・二十五オ

第八給有ヘシ

126 當寺ニ侍ケル僧花取リニ東山エ入トテ不心迷ヒ行ク程ニ

作續^{ツヘケ}タル瓦葺廊ノ隔^{マデ}シタル有中人見レハ此寺死

セル僧アリ此ハ何ニ御渡シタルニカトテ對面シタル事ヲ悦ビ泣々

語曰ク我指セル重罪无リシカハ不墮地獄ニハ寺ニ栖シ程ニ寺供ヲ

ノミ受テ^{モノツキ}嬾^ハ日行モセスノ依テ過^カシニ懸ル果報ヲ受テ毎日ニ一度

苦患ニ逢ヘリ漸其時ニ成リヌト云程ニ僧氣色忽ニ替リヌ

隱居テ壁ノ穴ヨリ見給ヘト云入テノソケハ唐人姿シタル者

四五十人許空ヨリ来テ刑罰具ヲ土ニ堀立ツ火ヲヲコ

シテ銅ヲ湯ニ涵ス主人トヲホシキ人三人計着座^{アリニ}後ニ

赤幡共ヲ立雙ヘタリ早召出ヨト云任^マニ二三人中ニ走入テ

十人計ヲアケノ綱^ツシテアミ續^ツケハタ物コトニ縛^ルリ付テ大ナル

カナ箸ヲ持ツ、口ヲ開^ケテ鐵ノ壺^フニ銅湯ヲ入テロニ入ルレハ目鼻

耳ナトヨリ焰出毛孔コトニ煙出テ、クユリアカリタリ涙^ナ

流シ叫喚スル事無限一片端ヨリ吞セ終テツレハ解^{トキ}許^ル

シテ本町へ皆返シ入ル此人共へ空へ飛上テ失^ヒス彼亡

者ノ曰ク此事寺ニ返テ披露シテ各尤モ可有用心云ヘリ

彼寺ニ歸テ人ニ語^リ自深ク道心ヲ發シ侍^リニキカ、ル類助^カ

為ニ天禄三年ヨリ大講堂ニテ同前供ト亡者寺

僧名注シ仏名經ヲ講シ毎年十月廿五日勤トセリ

第九繪有ヘシ

第十五卷

第十五卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・二十五ウ

127 一條院御宇永延元年天下大旱飢アリシニ五月廿八日

勅使大和守藤原朝臣佐時宣旨ヨリテ七大寺僧

集メ大佛殿ノ廣目天ノ前ニテ雨祈ヲ始同六月六日第

九日ノ夕座ニ彼天ノ前ノ穴ヨリ龍神飛出テ大雨周降ル

國土皆霑ヌ同天ノ前祈雨ノ時廣目天ノ眼井ニ踏

給エル鬼ノ目ヨリ涙流レテ後甘雨降リ侍ニキ

第一繪有ヘシ

128 治安年中ノ比延曆寺ノ實源律師ト云人俄ニ興福寺ノ永

超僧都ノ住坊へ來ル僧都來臨ノ由ヲ問フ律師答テ云ク我カ

住坊ノ邊ニ宇治殿下家司昨日死亡ノ良久アリテ生

返キ仏ニ可供養ニ物ヤ有ルト云フ妻女何ノ為ソヤト問彼男

第十五卷

下・二十六オ

第十五卷

下・二十六ウ

云我。琰魔王尋給ク汝ハ日本人也東大寺ノ大仏ヲハ供

琰王國ヘマイリタリケルニ

養セリヤト答申云ク雖不ト及供養ニ拝見ノ志ノミ有キ

トナム琰王讀云礼ント思フ既ニ結縁ノ人ナルヘシ大仏ニ結縁

者更不懸琰魔ノ裁断ニ汝帰テ早彼佛ヲ可ト礼ナン我

親ノ聞之ニ随喜誠ニ切也他日ヲ不可過トテ為大仏供養ノ

黄金三兩ヲ経袋入テ自持テ歩行ニテ急參詣由テ語侍

凡大仏ニ結縁シ奉ル人三惡道苦報ヲ免事前蹤不

知數是委注シカダシ

第二繪有ヘシ

129

保延年中ノ比伊賀國男有死テ後三日有蘇生

妻女悦フナス程ニ彼男俄ニ起キ立テ我衣裳ヨリ始テ

第十五卷

下・二十七オ

妻子等カ雜物マテ悉取集ム諸人皆狂乱ノ氣有ト

思ヘリ然ニ彼男語テ云ク我琰魔ノ廳ニ參リテ未被断

罪ニ程ニ見ルニ多ノ罪人ヲ一々ニ罪ノ輕重ヲ被定メ我分ニ當テ

琰魔王問給ヘク汝ハ何國者ソ答テ曰ク我ハ日本國者也

又問給ハク東大寺大仏ヲハ供養セリヤト又申クスキニシ年ノ

比寺ノ公役ヲ勤事ノ次ニ參テ糧米ノ残ヲ仏前チラシ侍

ト云フ琰王怒レル毗ツ反ノ曰ク事ノ次ナレトモ汝既ニ大仏ヲ礼シ

又一掬米ヲ供養侍ヌ尤是ヲ随喜ス速ニ本國ニ歸リ

ツ、重テ供養ヲノヘテ再此庭ニ向事ナカレトナム

第三繪有ヘシ

130

此男蒙テ仰フ活侍依之ニ為供養ニ不嫌雜物取

集ル也ト云ケル

第四繪有ヘシ

131 當寺ノ華嚴宗隆助法橋ト云人有キ寛治年中比

依學ノ師匠助範得業ト云フ者白地ニ京ニ住ス其時天

下ニ疫病流行シテ无シ免者一助範カ夢中ニ東大寺

職掌ノ公人等赤狩衣ヲ着来テ其宿可ニシメヲ引

マツシテ堅ムト見夢醒テ後見ルニ家中ノ諸人皆悉ク

病臥ヌイ云ヘトモ助範ト隆助ト只二人計其難ヲ遁ニキ本

寺ノ守護天等ノ師弟共ニ依為ニ法匠一施冥助ヲ給也

第五繪有ヘシ

132 能恵得業ト云人有依病ニ入死門ニ獄率相具參琰

第十五卷

下・二十七ウ

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻

魔、應一へ黄ナル束帶ノ俗立副テ諸^{トモ}ニ行則彼官ニ參テケレハ

琰王御簾ノ中ヨリ名ヘ何ソト問セ給フ束帶ノ人日本國東大

寺花嚴宗能恵ト申ス八幡大菩薩ヨリ御使具シ侍リ

寿限ニ不有之上へ大願ヲ發シタル者也今度計返給テ

大願ヲ遂セテ進ント也ト申ス何ナル願ソト問セ給フ能恵申ク大

菩薩ノ御前發ス二ノ願一ニハ東大寺西室僧坊馬道

大般若ヲ不具ナルヲ書繼キ奉ラント一ニハ堂宇ヲ建テ、是ヲ

安置シ奉ラント申スサル大般若ヤ目錄ニ入タルト御尋アリ

束帶人承テ立テ行ヌ又同様ナル束帶人經机ニ草

子一帖置テ參ル開見テ東大寺五本トシルサレタル内馬

道、本白紙花軸申ス琰王給ク日本國へ人ノ悟リ深シ仏法盛

第十五卷

下・二十八オ

二九九

第十五卷

下・二十八ウ

人ヲ勤ムト云ナトカ不逐願ニ此文ヲ弘テ可進ム也トテ

般若第一教此縁結縁者雖有重業障必當得能脱^{經カ}。

^{ニ返}

誦テ教ヘ給フ又大菩薩御使ニモ此旨申セト被仰サテ罷出ント

スルニ能恵ヲ召還テ若欲書寫應疾書寫ト云文アリ此

旨存セヨナム授量業ノ祥^{ハカレ}頗梨鏡ナト獄率能恵ニ

見セテ返シ侍ニキ能恵大般若ヲ書寫畢テ仁安四年四月十

八日八幡宮^{ニテ}供養ヲ遂ク導師園城寺法印權大僧

都公顯請定^{ヨリトテ}サキノ夜彼法印夢ニ瑛魔王宮

立文ヲ持来ル大般若供養導師ノ事也ケリ同五月

廿一日午時能恵指タル病^{モナカリシニ}死期^{モナカリシニ}覺テ法花

般若ノ二經ヲ講シテ佛前ニ向テ念佛ス彼大般若初百

第十五卷

下・二十九オ

内第一卷ヲ手ニ拵テ入滅シ侍ニキ^{生年四十五}

第六繪有ヘシ

133 本願勅施入ノ五千烟封戸一万町ノ水田諸國ニ満リシカトモ或

為ニ國衙ノ奪レ或ヘ為權門ニ被妨^ムテ所殘僅ニ絹玄也十二大

會以下ノ恒例ノ勅願等寺用不全ニ其内丹波國後河

庄云フ般若會料可^カ或ル一代ノ國司^{カシマ}奸シク國衙ニ落テ

吏務進止ノ地トセント思ケリ彼所ヨリ蔓草ヲ取寄燕ヲ

切^キタリケレハ八幡ト云フ文字其切口ニ現シケリ大ニ恠テ

アマタヲ切テ見レハ皆同カハリケレハ國司驚テ大仏八幡

御崇有ヘキ先非也トテ^永押妨ヲ留ニケリ

第七繪有ヘシ

134 重源上人上醍醐ヨリ出京シケルニ年来ノ仏師湛慶ツカ

イケル女童^{メノコ}ノ袋ヲ持テ道ニ行合ケルニ宿寺ニ何事カ有ト問

ケレハ女童云ク坊主此程煩ヒ給間為祈禱ニ陰陽

師ノ許ヘ罷也ト云、上人驚テ聽テ湛慶カ許ヘ行テ

訪侍ケルニ折節御渡可然事也早御加持ニ預ルヘキ

由懇ニ乞請ケル程ニ暫祈念ノ處ニ忽ニ絶入シ又上人殆

乍失面目強チ加持スル事数廻ヲ經テ更ニ蘇生ノ湛

慶申テ云不思議ノ事待ツ我閻魔廳庭ニ臨ミツルニ

十王冥官評議ノ曰日本国東大寺回録有ヘキ也再

興ノ大勤進ヘ重源上人^此大仏師ヘ湛慶等也。上ハ早ク閻浮ニ

返スヘシトナン其後病惱忽ニ噓テ起居不移時ニ是不宜

第十五卷

下・二十九ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

事ニ之間湛慶上人ニ申合テ南都ニ下ツ、當寺ニ詣テ

密ニ大仏聖容ノ丈六脇士四天、寸法已下堂宇ノ構莊

嚴ノ舛小事モ不捨細ニ注シ取テ歸上リ侍ス

第八繪有ヘシ

135 重源上人高野參詣、次ニ大佛殿ニ參テ彼湛慶、瑛

魔、聰庭マテ聞侍シ大仏炎上スヘキ事ヲ理真已講逢

語ル左少弁行隆同シ様ナル夢ヲ見テ此時參逢テ同ク相

語ル其後^不可ニ經幾程旬日ニテ大仏殿炎上アリ彼上人ハ

尺迦ノ化身ナリ實語ト云フ僧ノ夢ニ車田樂大ナル四五

間ノ屋斗ナリ縵幕ヲ引テ夜叉ノ如ナル者乘リ乱タリ唐土ノ

天狗日本ヘ渡ル彼等カ曰ク迦葉カ有ニ不可叶ニ可還迦葉トハ

第十五卷

下・三十ウ

三〇一

第十六卷

下・三十ウ

誰ソト其中ニ問フ重源上人則迦葉尊者也ト云也ケリ

第九繪有ヘシ

第十六卷

136 治承四年十二月廿六日藏人頭平朝臣重衡ヲ大将ニテ

数万騎ノ勇士南都ヘ發向ス同廿七日大衆出會テ

木津河ヲ隔テ合戦ス夜ニ入マテ无ノ勝負ニ兩方エ引退^{キヌ}

第一繪有ヘシ

137 次日廿八日軍兵尚責来ル大衆奈良坂般若路

二ノ路ヲ塞^{フサ}キ城堀ヲ構テ防戦事良久シカリシ程ニ可々ニ

火ヲ懸シニ風猛シク煙ヲ吹懸シ時衆徒引退ク炎^ヒ弥

移テ東大寺興福寺ノ内堂舎寶塔焼侍キ大仏

第十六卷

下・三十一オ

舎那ノ御頭ヘ落テ灰燼ニ交ル御身ハワキ合テ大山ノ如シ見聞

ユキ合ノ人无不涙ヲ流^ナサ梵王帝釋モ眼クレ天神地祇モ胸

コカシ給ケン然而大伽藍建立御祈ノ可根本ノ法花堂

并ニ生身觀音安置ノ二月堂本願天皇ノ御寶物

納メヲカレタル正倉院天照太神影^{向ノ}。竈殿已下ノ官藏^{宮イ}

當寺ノ内規模、靈處ヘ尚遁テ大難ニ^ル于今无替^ハ

第二繪有ヘシ

138 平相國、入道大仏殿ヲ焼^キ仏法ヲ亡ス故ニ天罰不遁ニ雲ノ

上ニ鬼形ノ者現ノ大佛奉タル焼^キニ為シ立テムスル也ト云ケルヲ

入道親リ見聞テ身毛豎テ心モ消ニケリ養和元年二月

廿八日重病、受テ寢食忽ニ留テ身ノ内ホムヲノモユルカ如シ^病

席ノ邊二三間ノ中猶アツカリケレハ近ツキ寄ル人ナシ板ニ水ヲ

流ノコロヒシカ共不助アツヤ／＼トノミ云ツ、悶絶僻地ノ同

二月四日薨シ畢ヌ 城大郎事

第三繪有ヘシ

139 後白川禪定法皇當寺魔滅事深ク思_{シキ}惻隱

御テ叙念ヲ廻シ重源上人ヲ召テ勅ヲ被下ニ昔ノ權者ノ構

思ニ末世ノ凡夫力雖難及ニ再唱テ知識ニ成風ノ功ヲ可終ニ

ナム上人申ク傳聞ク昔ノ建立ノ時ハ寄テ二十五箇國ニ六

十一年ニ其功畢ニケリ今ノ薄福ノ衆生奉加知識ニタノモ

シカラネ共大願ヲ発ノ勤進シ侍ヘシト奏ス又文治元年

鎌倉右大將源朝臣<sub>干時前
右兵衛佐</sub>同ク此事ヲ歎テ書札ヲ寺

第十六卷

下・三十一ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

門ニ遣ス其狀云

東大寺事

右當寺者破滅平家之乱逆逢回祿之厄難仏

像為灰燼僧徒及没亡積惡之至比類惟少者

乞殊以可歎思給也於今者如舊令遂修復造

營司被奉祈鎮護國家也世縱雖及隣季君

猶令施舞德者王法共以繁昌假乞御沙汰之

条法皇定思食知御乞然而如當時者朝敵追討

之間无依他事若令遲々御乞且又當寺事可_{致丁}

寧之由可令相存作也仍執達如件

三月七日 前右兵衛佐源朝臣_刊

第十六卷

下・三十二オ

三〇三

第十六卷

下・三十二ウ

寺門煙火ニ化シ學侶退散ニ及シカトモ各來集テ將軍家ノ

書狀ヲ披聞ス日来ハ偏ニ一寺ノ魔滅ヲ雖歎ト今ハ又新ニ再興ノ

カシ本マ、
傳ニアツカル事悲喜相半也

第四繪有ヘシ

140

重源上人承テ知識、宣旨一輪車六兩造テ大仏ヲ圖繪

ツ、車コトニ副テ六方ニ遣シ勸進ヲ始東ニ行テ夷ヲ勸ムルニ随分

奉加アリ是一ノ不思議也藤原ノ秀衡コトニ誠ヲ至シ知

識、方便ヲ廻ラス鎌倉前右大将八木一万石黄金二千

兩美絹一千足是度々奉加也其外一天四海我モト

結縁シ侍キ

第五繪有ヘシ

第十七卷

下・三十三オ

第十七卷

141

平六左衛門尉時忠ト云フ者大仏殿炎上ノ後為結縁

家子郎從等多ヒキキテ參詣セシ時アル野原ヲ過行ニ

狐ノ立文ヲ横ニクワエテ走ケルヲ家子右馬允康兼ト

云者はヲ見テ馬ヲ走セテ追取ラントスルニ彼狐立文ヲ捨テ、

アル塚ノ中ヘ走入ニケリ此文ヲ取テミレハ聖武天皇ノ

震筆ト覺テ我寺焼タラム時一ノ上人是ヲ作ヘシ瓦ノ

在可ハ何レノ松ノ下ヲ堀テ取出スヘシトアリシカハ堀テ見ニ若

干ノ瓦有ケリ其瓦ノ中ニ仏ヲ書付奉ル有是ヲ取テ置ケル

可コトニ皆疾病起リケリ彼康兼我志シツ、奉ハ崇ニ可

有何歎一カトテ奉取ケルニ无別事ニ解脱上人此由聞テ

乞給ケレハ上人ハ何ナントテモ出離シ給我可奉被救此

佛ニトテ惜テ不奉之彼仏ハ康兼カ子孫傳テ今ニ奉持云云

第一繪有ヘシ

142 壽永二年^{己卯}四月十九日大宋國陳知卿始テ大仏ノ御頭^{尺迦化身}

奉ル鑄ニ其間日々ノ祈禱非一ニ又奉鑄之時本三位

中將重衡ノ後室彼後世ヲモ訪ヘントテ中將ノ鏡ヲ鑑ノ中ニ

入シニ其鏡不ノ涌ニ自鑑中ニ度々被吹出ニ又同キ中將ノ

太刀ヲ奉加ノ釘ニ作ントセシニ不被作ニ又南大門ニ

札ヲ立ル事有キ其銘ニ曰ク大仏。欲鑄終ニ^{先ニ}四ノ鳥有テ銅ヲ

盜ントスト云ヘリ又大ニ叫聲アリ^不可^ト知何事万人是ニ驚ク

天魔ノ可為也又奉鑄之日銅ノ湯仏ノ御胸ニ流ツ、

第七十卷

下・三十三ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

流ツ、假屋免ニ欲焼ニ^{イロイロ}ト諸人集テ水ヲ酌テ消ニケリ

第二繪有ヘシ

143 雷神落テ大佛ヲ廻コト三廻ノ上リヌ道俗色ヲ變シ貴賤魂ヲ

失シカトモ龍神結縁ノ志也シカハ其難ヲ成事ナシ

第三繪有ヘシ

144 壽永二年五月廿五日至三十餘ケ日十四度奉

鑄終ニ^ニキ黃金ヲヌリ奉ル事水銀ナクンテ不可叶ニ^ニ伊

勢國住人大中臣^{某カ}寓宅^可ヨリ水銀二万兩ヲ堀

出ツ、仙洞ヘ進セシカハ金ヲ奉ニキ塗^ニ昔奥州ヨリ黃金ヲ

獻シ今ハ勢州ヨリ水銀ヲ進ス地中ノ伏藏自然ニ顯ルハ事

彼是併鄙重之叙信ノ可至ニ冥感ナル者歟

第十七卷

下・三十四オ

三〇五

第十七卷

下・三十四ウ

第四繪有ヘシ

145 文治元年八月廿八日大佛開眼師後白河法皇御筆ニ

十二筋ノ綱ヲ付ク長サ七町ニ至ル參詣ノ道俗皆綱ニ付ク同令ノシ

結^ト開眼ノ縁ヲ供養、導師專寺別當法務僧正定

遍咒願師與福寺別當權僧正信円^談講師同寺

權別當大僧都覺憲其外ノ僧一千口抑鳥羽、禪

定法皇大佛殿、朽損ヲ修理シ給ヒ金銅、形像ノ塵垢ヲ

拂ヒ洗ヒ清メ御ス御眉眼、色霞ミ疊リ給シカハ大仏師長

圓法師印ニ仰テ眉眼ヲ被書ニ彼佛師无智ニシテ不慎怖ニ

思フ様ニ以筆ニ奉書ニ建立昔ノ佛師ハ皆是大權化現^{ナリ}

其時ノ開眼師ハ婆羅^門僧正也シカトモ筆ニ綱ヲ付テ

第十七卷

下・三十五オ

總ニ彼綱ノ端ヲ取テ奉リ書ニ末代凡夫矯テ筆ニ取是大

誤也依之其後鳥雀集テ御目ニ御巢ヲ食^キ穢^シ奉リシカ共

又治承回祿ノ後再ヒ瑩金容ニテ後白河法皇抽御信

心ニテ自如法ニ御開眼有シカハ其後ハ鳥禽等ノ類ヒ近キ汚ス

事ナシ或律書ニ寫像得^レ真儀者鳥獸不敢穢之

云云今此理リ无違事ニ者歟

第五繪有ヘシ

146 御供養之後正倉院ノ御町ニテ大衆延年侍リ

第六繪有ヘシ

147 造寺ノ祈請、為メ重源上人伊勢大神宮ニ詣^テ誓テ曰

我願滿スヘクハ其旨ヲ示シ給ヘトナム其時夢ニ非ス覺^ニ

文治二年四月十日重源上人并宋人陳和卿

第十八卷

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

非ス社前東帶ノ俗アリ又童子来テ上人懷ニ入ッ、願ッ

ミテント思ヘ、我ヲノ肥セト示給キ上人以般若ノ法味ニヲ神

明、法樂ヲ増ント思テ則大般若經二部ヲ書_レ内宮ニ納メ

六十口ノ寺僧ヲ率ノ十六會妙典ヲ令讀ノ解脫上人ヲ

供養、導師トス其時自内宮ニノ瑞光指照_キ說法ノ

會場ニ又重源上人太神宮、イワ測社ニ參籠シ

タリケルニ天女来テ二顆宝珠ヲ授キ上人何ル人ニカ御在_{トス}

問ケレハ風ノ宮ト答テ失給ニケリ彼宝珠今ニ傳テ有

第七繪有ヘシ

第十八卷

下・三十五ウ

木工物部、為重等始テ周防國ノ杣ヘ入ル此時山中ニ紅

袴_{ヘカキ}着タル女多ク群来_ムル上人恠之ニ杣人恐侍_キ上人曰ク

汝ヘ何者ソ大願ヲ妨ケントテ天魔ノ形ヲ變ノ来ル歟ト云フ

女曰ク我等ヘ此山ニ栖餓鬼也苦患難堪ニ侍願一日法

花經ヲ書供養ノ廻向シ給ヘト云テ去ヌ上人哀ミテ同法ヲ

勤メテ經ヲ書供養ノ懇ニ訪給シカハ夢ノ中ニ依經力ニ餓

鬼ノ報ヲ免レヌト示シキ

第一繪有ヘシ

防州ノ杣ノ内ニ或_ニ昔_リ毒蛇多有能大木多有カトモ

杣人臨事无_リキ然上人入_ル時彼毒虫皆却失_ニ是_ニ

一ノ不思議也 又大蛇出_ル木ヲマイテ尾ニテ木ダ、キヲ用_フ木教ヘ早

第十八卷

下・三十六オ

第十八卷

下・三十六ウ

第十八卷

下・三十七オ

第二繪有ヘシ

150 天長年中ニ大佛傾給ニヨリテ左大弁直世王右兵衛カフキ繼

佐藤原朝臣豊主等ヲ勅使トシ佛後ニ山ヲ築今重レキ

源上人異ナル構ヲ案シ是ヲ可崩クツス之ニ由ヲ申ス建久元年

六月二日後白河法皇自ミカド上人ト土ヲ運ヒ御ス事六十

度見聞輩无シ不ハ流涙一キカケイ三公九卿皆土ヲ曳公

家ヨリ被下人夫七千餘人其外結縁類不知數ニ

第三繪有ヘシ

一重源上人 大石ヲネチキリ餅ニナシ人夫ニ与ル
事其ノ餅石阿弥陀寺アリ 一又空ヨリ出入事

151

大佛殿ノ料木杣ヨリ出事不輒一山崩シ谷ヲ填メ嶽ヲ

穿テ河ヲ堀ル其構不一ニ數百人ヲ集メ口六寸長サ五十丈ナメ

大綱ヲ柱ニ付テ引之ニ又柱一本ヲ車ニ載テ牛百。二十頭ヲ懸ケ

侍建久元年六月三日諸院諸宮面々ニ柱ヲ引寺ニ入ル

其時左綱後。白川法皇自引セ御ス女院ノ御車ニ綱ヲ入テ

同ク引給キ月卿雲客皆此綱ニ付ク右ノ綱僧綱以

下大衆引之ニ侍キ凡材木ヲ引コト不輒ニ諸國役夫ヲ

催シ甲乙ノ諸人ヲ勸メキ其時山城國稻八束權守源ノ

弘ト云フ者棟木ヨリ渡虹梁マテ六支ヲ毎度ニ一千人ヲ集テ

六ケ度引テ結縁シキ彼弘罪科コト有テ開東ニ被キ誅。其

後弘カ子ウナミノ三郎強夢ニ父弘我依罪業ニ地

獄ニ墮タリツレトモ依大佛料木ヲ引タル善根ニ忽ニ改テ惡熱報ヲ

受都率天生ニツトッ告示シケル

第四繪有ヘシ

152 重源上人周防國致生ヲ永ク止メニケリ然ニ或夜ノ上人ノ夢ニ

鯖云フ魚多群来リツ、訴ヘテ云我等大佛造營ノ巧

匠ノ食ト成テ依其結縁ニ離ヘシ苦海ヲ然ニ漁獵ヲ被留メ

永ク可失出離便ニツト歎キケリ依夢想ニ殊更網集

メテ魚ヲ引ケレハ限無ク多鱗被捕ヘケリ自余餘ノ致

生ハ留リシカ共番匠料ニハ下テ網ヲ彼魚ヲ取テ可済トセリ

第五繪有ヘシ

153

營作ノ間平大丞宗盛カ。牛作事ノ可ヘ自然ニ出来

勢大ニ力強シ料木ヲ引キ非尋常ノ牛ニ建立ノ古ヘ力士

變セシ牛ノ再来ル歟ト覺ニ是皆伽藍ノ靈威ニシテ

非亘事ニ癩病人此牛ニ祈禱セシカハ皆落ニキ

第十八卷

下・三十七ウ

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

第六繪有ヘシ

154 重源上人大佛殿ノ四天王ノ像ヲ奉ン造トテ西國ニテ敢テ

彼御衣木ニ海上ニ浮漕上シニ海賊有テ遙ニ增長

天ノ御衣木ヲ見テ奪取ントテ船ヲアマタ押寄セテ見ケルニ

彼料木噸ニ。增長天ノ形像ニ成ケレハ海賊共大ニ驚奇

異ノ思ヲナシテ急漕還ツ、逃去ニケリ

第七繪有ヘシ

第十九卷

155 建久元年七月廿七日大仏殿母屋ノ柱二本ヲ始テ被

立一侍キ

第一繪有ヘシ

第十九卷

下・三十八オ

第十九卷

下・三十八ウ

156

同十月十九日上棟後白川法皇御幸綱二筋ヲ棟

木ニ付テ右方ノ綱ニハ法皇付セ給フ當^{寺別當}。僧正俊勝并僧

綱以下付之^レ左方^ニハ攝政以下三槐^{クワイフツハクワイヤウ}文武百寮悉ク

付キ侍キ

第二給有ヘシ

157

建久六年三月十日為當寺供養

主上^{後鳥羽院}行幸十一日ニ大佛殿ニ清御供奉ノ卿相^{クニシヤウ}

関白^{兼實}藤大納言^{隆忠}右大將^{頼實}左大將^{良經}

大納言^{定能}土御門中納言^{通親}藤中納言^{兼光}右兵衛督^{實教}

左宰相中將^{忠修}別當^{光雅}藤宰相中將^{公時}右宰相中將^{公繼}

參會ノ人 大政大臣 左大臣 右大臣

第十九卷

下・三十九オ

大宮大納言^{實宗}民部卿^{經房}左大弁^{定長}是已下供奉ノ

人依事繁ニ不注一

第三給有ヘシ

158

同六年三月十二日供養導師興福寺別當權僧正

覺憲^願。師專寺別當權僧正勝賢證誠當

寺、檢校仁和寺、法親王守覺凡諸寺龍象一

千口主上行幸関白已下諸卿參仕ス供養

之後被行賞一

二品親王道法^{檢校二品法親王}大和尚南無阿弥陀佛^{勸進}

權律師理真^{寺家實定範別當實}

法橋證中^{勸進聖人實讓定覺佛師實}

凡鎌倉前右大將殊為當伽藍大檀越ト為值カ御供

養ニ相州ヨリ引率ノ數万軍兵ヲ參詣ス龍蹄七百

十三疋ヲ施入シキ依勅命ニ四面ニ陣ヲ張り廻廊ヲ籠テ三

重ニ警固シキ諸國群集之輩四海結縁之類過タリ雲

霞ニモ凡再興之間叙願殊ニ深シテ任テ本願例ニ被下知識

宣旨ヲ一天勸靡キ万人力ヲ起ス其詞ニ云ク

勅朕以幼齡ヲ忝續聖緒ニ唯依宗廟之保護ニ偏思社

稷之安全ニ與若大和。添上郡建大伽藍安十六丈金

銅、虛遮。像ニ感神聖武天皇天平年中可鑄造ニ也棟

礎挿 于半天ニ光明超于滿月ニ諮之和漢ニ敢無比方

第十九卷

下・三十九ウ

而去年窮冬不慮有火ニ四百余歳之花構空化灰

燼ニ三十二相之金姿徒交煙炎ニ禪定仙院忽聞斯緯

惻隱于懷ニ任礎石於舊製採山木ニ以致造營ニ供鎔

範於良工ニ聚國銅ニ以欲修補ニト叙願之趣尤是隨喜

夫有天下之富ニ者朕也有天下之勢ニ者朕也以此富

勢ニ將助禪念ニ亦答本願聖靈之盛思ニ宜唱大善

知識之勸進ニ上自。侯相將ニ下及與僮輩齡毎日三拜

隸

虛遮佛ニ各當存念ニ手自造 虛舍那佛像ニ也昔

聖武天皇志存兼濟ニ誠切 利生ニ内祈 神道ニ外勸

法界ニ降 絲綸之命ニ遂廣大之善ニ緬 尋舊規ニ可

復古跡ニ雖一粒半錢寸鐵尺木施与者 世々生々在

第十九卷

下・四十オ

第十九卷

下・四十ウ

在所々必依妙力一長保一景福一彼泰山无嫌二撮攘一故盛

起雲之峯一巨海不馱細滲一故激一浮天之浪況于時

臨澆醕一俗非淳素一共勵興立之恩同結一菩提之因

今在斯時一已與一此善一幸遇一朕之勸進一者豈非民

之良縁哉然則率土之濱一露法雨一以伴一花育一普

天之下染患風一以同一栗陸一五畿七道諸國等司。此事一

莫侵擾ニ一百姓ニ布告一遐迩俾知ニ朕意焉

治承五年六月日

鎌倉前右大將至シ信心一ヲ若干ノ奉加有遂ニ土木ヲ功終

聖武天皇御記文ニ於當寺ニ不道主邪賊臣若ハ犯シ

若ハ破障シテ不ハ行一起テ火禍一ヲ可亡子孫一ヲ若敬テ勤行セハ

第十九卷

下・四十一オ

世々ニ累福一ヲ可昌子孫一云ヘリ然而伽藍ヲ破滅セシ平氏ハ

立可ニ凋弊シテ一門ノ榮華早被レ犯災患風一ニ修營崇

重有シカハ法皇ノ御末ハ于今嗣聖緒一ヲ御キ武庫ハ又繁

昌シテ諸國東一風ニ靡一九州収ル事權者ノ盟約掌指

不異一此時重源上人ノ夢ニ天ニ聲有云昔ノ天平勝宝

年中御供養ノ時參詣結縁ノ輩ハ依其功德一ニ皆得天

上淨土生一ツ今ノ供養ニ結縁スル人ハ又昔ノ天平ノ供養ノ時天ニ

翹鷹地ニ栖メル螻蟻等ノ類也此人ハ皆又同ク可生天上淨

刹一ニ也トソ見侍ケル

第四繪有ヘシ

陳和卿異朝ノ來客トシテ奉修複大佛ニ為巧匠事非耳

〔人ニ〕為 値遇結縁ノ鎌倉前右大将悦ヲ述ントテ御供養翼

日殊更大仏殿ニ参リテ重源上人ヲ使トノ為對面〔招請セシ〕

カハ和卿云ク將軍ハ多國ノ敵ヲ滅ノ罪深キ人ナレハ對面无ト由

辭申ケリ

第五繪有ヘシ

160

寧ニ數ケ度請セラレシカトモ我ヲ見ト思ヒ給ハ、只能大仏ヲ拜給

云テ遂ニ止ニシカハ將軍涙ヲ流シ悲テ金銀等ノ珍寶布絹類ヒ

龍蹄三足ニ鞍ヲキ與攻ノ時被シ用ニ甲冑等ノ兵具若干

被送ニ早不請取ニ返シキ又是ヲ歎キ度々強テ送遣サレシニ

其中ニ與攻ノ鞍一口兵具計ヲ留テ兵具ヲ彼致生ノ器

ナレハトテ滅罪、為ニ佛殿ノ釘ニツクリ鞍ヲハ後ニ轉害會ノ

第十九卷

下・四十一ウ

永享三年延宮本「東大寺縁起絵詞」翻刻

十列ノウツシノ鞍ニ施入シ侍

第六繪有ヘシ

161 重源上人ハ生身ノ觀音奉拜祈請シケリ貞慶上人ハ

生身ノ尺迦ヲ奉拜ニ祈ケリ然ニ同夜ノ夢ニ重源ハ貞慶

則觀音也ト見ル貞慶ハ重源是尺迦也ト見侍キ兩

上人共ニ出立テ瞻礼為ニ東大寺行キ笠置ヨリ出平野ノ

二間率都婆ノ邊ニテ行合テ共ニ夢ノ告ヲ語リ俱ニ泪ヲ流シ

ツ、互ニ礼ノ先立テ命終ン者必ス生可ヲ示ヘント契テ去ニ

ケリ其後建永元年六月五日貞慶上人ノ夢ニ

重源上人只今コソ化縁已ニ盡テ靈鷲山へ皈侍ト示

貞慶夢サメテ急キ人ヲ遣テ尋サスルニ此晚上人ハ東大

第十九卷

下・四十二オ

第十九卷

下・四十二ウ

寺ニテ入滅、由ラソ答ヘ侍ケル

第七繪有ヘシ

162

治承年中ノ回祿ニ東塔焼失、後本願安置、仏舍利

十粒、内九粒ハ瑠璃壺中ニ御在ス、今一粒ハ塵土ノ中ニ交テ

不知是^ニヲ或竹林ノ中ニ夜々光ヲ指ス人恠ヲナシキ理真律

師其程、土ヲ取ツ、沙ヲ水ニテユラセテ鍛冶ノ鎚ニテ打試ルニ

仏舍利ハ鎚中ヘ入給シカトモ不碎^一シカハ其後稱楊讚歎シ

奉ル彼八粒ヲハ大佛ノ御身ニ籠奉ル今二粒ヲハ七重ノ寶塔

造畢ノ後如本可安置之由勅定有シカトモ只アラハニ奉^テ

置^ニ諸人拜見セサセンニハ利益弘アリナント寺家奏聞セシ

程ニ彼御舍利四粒ニ分布シ給ヘリ元ノ二粒ヲハ塔ノ^{理果ニ}

第二十卷

下・四十三オ

籠分布ノ二粒ヲハ浄土堂ニ安シ奉リ又其後于今ニ至マテ

神變ヲ現シ分布シ給ヘリ

第八繪有ヘシ

第二十卷

163

建仁三年十一月十八日大佛脇士并四天像供養、為佐保

山、御陵ヘ二人ノ勅使ヲ被立ニ參議藤原朝臣資實

内蔵^人。權頭源朝臣國行也同廿五日本寺八幡宮奉

幣アリ左近衛權中將藤原朝臣定家勅使ヲ勤ム

第一繪有ヘシ

164

同十一月廿九日御供養、為後鳥羽院東南院ヘ御幸

第二繪有ヘシ

165 同卅日御供養導師前法務大僧正信圓禪願尊寺

別當法務前大僧正延果證誠仁和寺二品法親王

道。法其外僧侶一千口上皇御幸関白以下大政大臣内大臣

右大将忠經新大納言信清皇后宮大夫實教三条

中納言 中納言中将 二条中納言定輔 左衛門督公經

權中納言定隆 左大弁宰相實實 右衛門督通具

左中将雅行朝臣右中将高通朝臣 丹波守信雅朝臣

左中将定家朝臣内藏權頭親實朝臣權左中弁

長兼朝臣藏人弁光親春宮權大進仲房是

以下依繁不注武藏守平朝政軍兵ヲ率テ守

護シ侍キ同日緇素ノ被行賞除書云

第二十卷

永享三年延營本「東大寺縁起絵詞」翻刻

下・四十三ヤ

從四位上藤原長兼行事實 從五位下佐伯景正竹鉾權大

僧都定勝寺家實 權律師增寛導師 賴惠別當

法印道弘證誠 運慶佛師 法橋覺圓佛師定寛

快慶仏師 勢順繪仏師

可置阿闍梨六口於本寺

造寺長官左大弁藤原資實ス 次官三善清信

判官中原基康ヤス 主典大江宗保ヤス

造佛長官左大史少槻シツキ 國宗 次官同頭綱

判官大江國道 主典中原章重アキヒ

行事官

權大納言藤原兼良 中納言藤原公房キナシ

第二十卷

三一五

下・四十四オ

第二十卷

下・四十四ウ

参議藤原資實 左少辨藤原光親

少外記中原師朝 左少志 中原成弘

檢非違使左衛門尉藤原時親 左大志 中原朝敏

脇士四天御衣木加持賞

權少僧都宗巖

凡建久ニハ後白河院兼テヨリト仙居於寺中ニ自營

給ス 又行幸成テ被摸天平ノ古ニ之上者比類更不可

有ニ勅願ノ寺々供養ノ時臨幸ヲ望申此度脇士供

養ヲ例トストナム又導師賞被行ニ事建仁ヨリ始

第三繪有ヘシ

166 仁和寺ノ鳴瀧ノ住僧頭俊太輔阿闍梨重病ヲ受テ建久

第二十卷

下・四十五オ

八年十二月八日辰刻ニ死テ琰魔王宮ニ詣ッ赤衣ノ

俗頭俊ニ向テ云ク雖可遣汝於三惡道ニ十一ケ年

毎日念仏一万遍ヲ勤ニ依テ遁ル惡趣ノ生ニ若猶

人天ノ生ヲ離ト思ハ大和国成道寺ニテ百万遍ヲ唱

ヘシト云フ頭俊問云ク成道寺トハ何處ソト俗曰ク大仏殿ノ

東ナル 浄土堂是也彼所ハ日本國九品往生間下品下

生ノ地也ト云フ頭俊同キ八日西曆蘇生シテ同朋ノ輩ニ

語り侍キ

第四繪有ヘシ

167 治承炎上ノ後建久ニ重テ大佛殿ヲ造營有シニ造寺

長官左大弁行隆奉行トシテ寺門ニ常住ノ夜ハ佛

像ノ灰燼ヲ悲ミ畫ハ寺塔ノ土木ヲ專ニ終ニ一十六丈ノ

聖容昔ノ如ク修復シ二階九間ノ梵宇任テ古ニ造_レ早_ル

惣供養ニ至マテ奉行シ奉リテ後随分ノ恩賞預_キ

有為无常ノ習_{ナレハ}老病身ヲ侵シテ臨終正念ニシテ他

界シ侍ケリ然ニ彼_レ息女有年少ニシテ_父文ニ送レタル事ヲ

歎キ悲ム事無限ニ悲歎_ノ无為_ハ方_ニ之餘ニ文ヲ書_父交_ニ

年来馮ヲ懸テ歸敬シ朝夕ニ不淺ニ奉ケル馮一本尊

地藏菩薩御手ニ結付テ大聖ハ六道能化トシテ

任テ九界於心ニ化導シ給ナレハ_父文ノ生所定テ知給ケル

ラン願ハ此文ヲ生所ヘ送付給テ必返事取テ我ニ給

ヘト晝夜仏前ニ泣居タリケル程ニ七日ニ當リケル朝

第二十卷

下・四十五ウ

地藏ノ御手ニ結付奉リタリケル文元ノ無シテ別ノ文ヲ持給ヘリ

不思議ノ思ヲ成テ是ヲ取テ披覽シケル程ニ無疑亡_{セム}父

行隆手跡ニテ返事ヲ書タリケリ生者必滅分段之

常ノ理リ會者定離ハ有為ノ定ル習也シカハ生ヲ隔_ス

事ハ不及力ニ事ナレトモ吾_レ東大寺ヲ奉行シテ造寺修

仏之功ヲ至シ興法利生ノ誠ヲ專ニセシ故ニ都率ノ内

院ニ生テ弥勒慈尊ノ說法ヲ聴聞ス身心安樂ニシテ勝

妙自在ナル事第三禪ノ快樂ニモ勝タリ更ニ不可有歎_キ

悲_ム常ニ東大寺參詣シ給テ大仏ヲ拝シ給_ハ者必可受

一仏淨土ノ生ニ何事モ其時委ク可_レ申_ニ書タリケリ見テ

之_ヲ。且_ハ悦_ビ事无限ニケリ不思議也シ事也

第二十卷

下・四十六オ

第二十卷

下・四十六ウ

第五繪有ヘシ

168

貞永元年^辰三月二日^{辰時}東塔^ニ雷火付免^ニ焼失^{セトス}

諸人^{サレキ}騒^ニ集^テ面々^ニ消^{サントス}サントスレトモ難^ニ及^カ力^ニカリシニ何方ノ

者トモ不知^ニ翁鑿^ヲ持^テ火付^{タル}處^ヲタチ捨^テサチ侍^リ

見ル人恠^ヲナス塔ヨリラル、トモ不見^ニイツチト行^モ無^ク失

ニキ是護塔善神老翁^ノ形變^{シテ}其難^ヲ留^メ給^{ヘル}

ニコソト申合ヘリ

第六繪有ヘシ

169

八幡大井天平勝寶元年本願皇帝御勸請ノ後建

久五年十二月廿八日^寅尅^ニ少兒^ニ託宣^シ御ノ云我ヘ是聖

母大井也東大寺ノ大佛ハ我カ本尊也欲^ニ崇我^ヲ大仏

第二十卷

下・四十七オ

殿ヲ可奉崇^メ大仏供養ノ後遷宮スヘシト云云依之造テ

今ノ御殿ヲ奉遷^ニ毎年九月三日為恒例祭礼轉害

門ニテ彼御影向式ヲウツシテ被行ニ大會ヲ然^ニ當寺領

南院ノ郷住^{ニセシ}人等漸々ニ居ヒロコリテ依大菩薩御行ノ

道狹^ニ仁治年中衆議トシテ大會ノ時路ヲ直シ廣クルニ

他寺ノ僧成遍僧都ト云フ者頻^ニ難^ニ礙^ス然^ニ八幡宮ニ

參候スル神人ノ見ケレハ御殿ヨリ不^ニ測^ニ鎗矢一ツ鳴テ未申ノ

方ヘ飛行ス其ノ矢彼成遍カ住坊ノモヤミスノ額ニタチマケリ

コハ何ナル事ニカト驚程ニ又鎗矢鳴テ丑寅ノ方ヘ返リ

行ヌアヤシミ騒^ク程ニ又驚程ニ又鎗矢鳴テ丑寅ノ方ヘ返リ

俄ニ絶入ス驗者シテ祈ルニ大菩薩御託宣アリ我遊

行スル時路次狭ク不淨歎シキニ寺僧等歎キテ道路

直ントスルニ我敷地ニ乍居住ニ不隨衆儀ニ事返々

奇恠也成遍カ命ヲ召スヘシト云ヘリ騒テ門ヲ破屋ヲ壞

道廣ケタリシカ共忽早世シニキ

第七繪有ヘシ

170
北京ニ慶盛ト云僧有寛喜二年二月廿六日

俄ニ兩眼ヲ失ヌ歎之ニ熊野山長谷寺參テ祈ニ

無驗ニ同年八月廿七日祈請タメ當伽藍ヘ參ルニ忽

目アキテ大佛ヲ奉拜又安房國曆入道カ舍

人男六郎太郎
則正嘉禎四年六月五日大仏參テ黒

山ト奉ル拜悲テ之ニ出家ス同十三日又參テ拜ントスルニ

第二十卷

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻

スルニ尚黒山也ケレハ書寫山ニ籠テ祈之ニ同月

廿一日當寺淨土堂ヘ參ル其夜夢想ノ告有テ

次日雖奉拜大仏ニ猶丈六ノ形像ニテ十六丈聖容

ヲハシマサ、リケリ又寶治三年二月十四日若狹

國ノ女年十六御前ニ參詣スルニ大蛇口ヲ并開テ向フ由ヲ云ツ、

人ノ肩ニ懸テ歸リニキ凡雖詣佛殿ニ不奉拜之

類其數限ナシ

第八繪有ヘシ

書本云
建武四年丁丑十二月十七日

玄龍刻

千時應永九年甲子三月十三日写之早 興隆沙門拟講兼俊

應永十年壬辰二月廿四日書写早 從四位下紀朝臣延光

下冊 識語

下・四十七ウ

下・四十八オ

永享三年六月書写早

延營

此縁起繪詞二帖自有方令相傳處

破損之故加表紙訖

八幡大井御詠

心カラ生死海ニシツムナヨ急ケ浮舟浪立ヌ間ニ

春日大明神御詠

六道朝露ワケテ行通ウ慈悲ノ杉ワカワク間ナシ

舊光寺阿弥陀

急ケ人御法ノ舟ノ出ヌ間ニノリヲクレナハ誰カ渡サン

花厳末葉

實英

下冊 識語

下・四十九ウ

尊光院輪賢法印の相傳之

北林院成算

永享三年延管本「東大寺縁起絵詞」翻刻